

来住廃寺

KISHI TEMPLE SITE

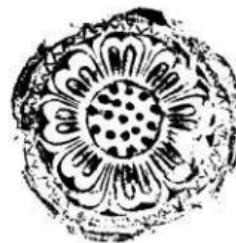


1979

松山市教育委員会

来住廃寺

KISHI TEMPLE SITE



1979

松山市教育委員会

—序—

昭和47年、高松塚の発見、古熙遺跡の発見などに始まるこの数年来は考古学ブームといわれる風潮の中にあって、最近の稻荷山古墳出土の鉄劍から百十五文字による金象嵌の銘文の発見や、太野安萬侶の墓誌・松林宮の発見など相次いでのニュースにより、埋蔵文化財に対する世間の関心が一段と高まってきたことは御同慶に堪えないところであります。

松山市においては、かねてよりその存在が伝えられた「長隆寺遺跡」の寺跡について、昭和52年度及び53年度の2回にわたり寺院跡の調査が行われ、その結果をまとめたのがこの報告書であります。

長隆寺遺跡は『伊予風土記逸文』にある久米寺の有力な候補地として、種々論考がなされてきたところでありますが、今回の調査に当っては、文化庁の格別なご理解をいただき専門調査官の派遣により詳細な調査が行われ、その結果寺院に直接関係のある遺構や鷲尾の一部、白鳳期の古瓦等が検出されたことによって、畿内の古寺跡に匹敵する伽藍跡が確認されたものであります。このことにより昨年10月27日に開かれた文化財保護審議会で「来住庵寺跡」の名称も付され、国指定の史跡として答申がなされ近く指定公示される運びとなったもので、当市にとって松山城跡に次ぐ二番目の国指定史跡となるもので誠に喜ばしいかぎりであります。この本が私たちにとって学術および教育文化の向上の資として、また文化財保護に役立つきずとなもなれば、これにすぎたるものはありません。

最後にこの調査ならびに史跡指定に際し、文化庁及び愛媛県をはじめとして、終始専門的な立場から直接ご指導下さいました奈良国立文化財研究所の方々、また史跡指定に関しては快くご承諾下さいました土地所有者の方々や、ご協力をいただいた多くの方々に対し厚くお礼申しあげ、今後とも一層ご協力ご支援を賜りますようお願い申しあげます。

昭和53年3月20日

松山市長 中村時雄

例　　言

- 1 本書は、松山市来住町に所在する来住庵寺跡の、1977年度に実施した発掘調査と1978年度に行った発掘調査の報告書である。
- 2 第二次調査（1977年度）は協和道路株式会社から松山市教育委員会が委託されて実施し、第三次調査（1978年度）は文化庁から国庫補助を受けて松山市教育委員会が実施した。
- 3 本書の執筆は次の各氏による。各項目の分担者はそれぞれの項の文末に氏名を掲げた。

池田　学	西尾　幸則
小笠原好彦	松村　淳
岸　郁男	森　光晴

- 4 本書の作成にあたって、出土遺物の整理実測は、小笠原好彦・森 光晴・西伸二・西尾幸則・池田 学・松村 淳が行なったが、一部、田辺征夫氏の協力を得た。遺構の製図には、高谷光子・田中恵子氏の協力を得た。
また、遺構・遺物の写真撮影は、岸 郁男・西尾幸則が担当し、佃 韶男氏の協力を得た。さらに出土遺物については、大山正風氏の助言を得た。
- 5 本書の編集は小笠原好彦が主として行なった。
- 6 来住庵寺から出土した遺物は、古照資料館に収蔵陳列し、一般公開している。

目 次

I	はじめに	1
II	遺跡の環境	3
1	遺跡の位置と歴史的環境	3
2	遺跡の現状とこれまでの調査	9
III	発掘調査の経過	13
1	調査経過	13
2	調査日誌	14
IV	遺構	20
1	寺院関係の遺構	20
A	講堂	20
B	僧房	23
C	回廊	24
D	その他の遺構	25
2	寺院造営前の遺構	25

V 遺 物	38
1 瓦 類.....	38
A 軒丸瓦.....	38
B 軒平瓦.....	41
C 丸 瓦.....	43
D 平 瓦.....	43
E 鶴 尾.....	46
2 土器類.....	49
A 須恵器.....	49
B 土師器.....	52
C 弥生式土器.....	54
3 石 器.....	64
 VI 考 察	67
1 伽藍と寺地.....	67
2 来住廃寺造営の歴史的意義.....	70
3 出土土器について.....	77
 VII おわりに	80

図面目次

第1図	来住庵寺遺構配置図	81
第2図	北調査地区実測図	82
第3図	講堂玉石組雨落溝実測図 I	83
第4図	講堂玉石組雨落溝実測図 II	84
第5図	南調査地区 B区・D区	85
第6図	南調査地区 A区・C区	86

図版目次

彩色図版	北調査地区全景
図版 1	来住庵寺跡周辺空中写真
図版 2	1 長降寺全景 2 塔跡心礎
図版 3	1 講堂基壇 2 講堂基壇
図版 4	1 講堂南側雨落溝 2 講堂雨落溝西北隅
図版 5	1 講堂南側雨落溝 2 講堂南邊石組溝
図版 6	1 南面回廊 A区 2 西面回廊 B区
図版 7	1 西面回廊 D区 2 西面回廊 D区

- 図版 8 1 南調査地区 A区
2 南調査地区 C区
- 図版 9 1 西面回廊と S D33
2 西面回廊と S B22
- 図版 10 1 北調査地区全景
2 僧房全景
- 図版 11 1 僧房全景
2 寺院造営前建物 S B03
- 図版 12 1 寺院造営前建物 S B04
2 寺院造営前建物 S B02
- 図版 13 1 僧房柱穴
2 僧房柱穴
- 図版 14 1 僧房柱穴
2 北調査地区西面回廊東側溝
- 図版 15 1 竪穴住居 S B21
2 竪穴住居 S B22
- 図版 16 1 竪穴住居 S B23
2 S D33南端部
- 図版 17 1 弥生時代土壙 S K57・58・59
2 土壙 S K52
- 図版 18 1 講堂基壇版築状況
2 南調査地区 C区
3 南調査地区 B・C区
- 図版 19 1 S D38検出状況
2 軒丸瓦出土状況B区
3 丸瓦・平瓦出土状況B区
- 図版 20 1 竪穴住居 S B22土器出土状況
2 同 上

3 同 上

- 図版 21 軒丸瓦
図版 22 軒丸瓦
図版 23 軒丸瓦
図版 24 軒平瓦
図版 25 丸瓦
図版 26 平瓦
図版 27 鶴尾
図版 28 爐窓器
図版 29 土師器
図版 30 土師器・弥生式土器
図版 31 弥生式土器
図版 32 弥生式土器
図版 33 弥生式土器
図版 34 弥生式土器
図版 35 石器
図版 36 石器
図版 37 石鏡

挿図目次

第1図 来住廃寺と周辺の遺跡	3
第2図 盖ノ口遺跡	4
第3図 波賀部神社古墳	5
第4図 東山古墳	5
第5図 湯ノ町廃寺	6
第6図 内代廃寺	7

第7図	朝生田庵寺付近（善宝寺前）	7
第8図	朝生田庵寺礎石	8
第9図	中ノ子庵寺出土軒平瓦	8
第10図	上野庵寺	9
第11図	来住庵寺塔心礎	10
第12図	来住庵寺周辺地形図	10
第13図	来住庵寺第1次調査	11
第14図	塔跡実測図	12
第15図	竪穴住居S B21	15
第16図	北調査地区発掘状況	15
第17図	北調査地区全景	16
第18図	遺構検出状況（A区）	17
第19図	遺構検出状況（D区）	17
第20図	E区発掘状況1	18
第21図	E区発掘状況2	18
第22図	現地説明会	19
第23図	遺構配置図	20
第24図	講堂基壇土層実測図	21
第25図	講堂の柱間	22
第26図	僧房実測図	23
第27図	回廊と僧房重複関係	24
第28図	S B05建物実測図	25
第29図	S B02建物実測図	26
第30図	S B03建物実測図	27
第31図	S B04建物実測図	28
第32図	S B06建物実測図	28
第33図	竪穴住居S B21実測図	29
第34図	竪穴住居S B22実測図	30

第35図	竪穴住居 S B23実測図	31
第36図	竪穴住居 S B24実測図	32
第37図	土壙実測図 I	34
第38図	土壙実測図 II	35
第39図	軒丸瓦実測図 I	39
第40図	軒丸瓦実測図 II	40
第41図	軒丸瓦実測図 III	41
第42図	軒平瓦実測図	42
第43図	平 瓦	44
第44図	平瓦叩き目	45
第45図	丸瓦実測図	46
第46図	鶴尾破片想定位置	46
第47図	鶴尾実測図 I	47
第48図	鶴尾実測図 II	48
第49図	須恵器実測図 I	50
第50図	須恵器実測図 II	51
第51図	土師器実測図	53
第52図	弥生式土器実測図 I	55
第53図	弥生式土器実測図 II	57
第54図	弥生式土器実測図 III	59
第55図	弥生式土器実測図 IV	62
第56図	石器実測図	66
第57図	講堂東側土層実測図	67
第58図	法隆寺伽藍配置図	69
第59図	松山平野古代寺院分布図	71
第60図	朝生田庵寺出土軒丸瓦	72
第61図	中ノ子庵寺出土軒丸瓦	72
第62図	京都府正道遺跡の掘立柱建物	75

I はじめに

1 調査の経緯

来住庵寺跡は松山市の東部にある来住舌状台地の西端部に位置する古代寺院跡である。この寺院跡は、これまで長隆寺庵寺跡と呼ばれてきたもので既に昭和42年7月に大山正風氏が塔跡と講堂跡の一部について発掘し、その結果が「松山市文化財調査報告書Ⅲ」で報告されており、白鳳時代寺院跡として知られてきたものである。また、この寺院跡周辺では弥生式土器が採集され、遺跡台帳には、長隆寺遺跡としても登録してきた遺跡である。

昭和52年10月2日、協和道路株式会社がこの長隆寺跡の北側にあたる松山市来住町852番地に宅地造成を行う目的で、埋蔵文化財確認申請を松山市教育委員会に提出した。このため松山市教育委員会はこの申請地に古代寺院に関連する堂塔が存在することを考慮し、同年10月12日に確認調査の試掘を実施することとした。その結果、試掘トレンチから溝跡・柱穴を多数検出するとともに、この遺跡のおおまかな層序を確認し、あわせて多量の瓦類・土師器・須恵器・弥生式土器などの上器類を採集した。このような試掘調査によって、本格的な発掘調査を実施する範囲が決定された。

本格調査は、宅地造成地として申請されている7,440m²のうち、2,216m²を調査することにし、その実施計画書を作成し、協和道路株式会社と協議した。この話し合いがついたので発掘調査は、昭和52年11月21日から、来住庵寺（長隆寺庵寺）の第2次発掘調査として実施する運びとなった。調査は翌年2月9日まで行った。調査期間は延べ75日間である。

発掘調査は掛土場所の都合から南西部から着手した。調査が進行するにしたがって、来住庵寺に関連する遺構、古墳時代住居跡・弥生時代住居跡などが複雑に重複して検出された。検出した主な遺構としては、来住庵寺僧房・回廊・掘立柱建物6棟・古墳時代竪穴住居跡1基・弥生時代竪穴住居跡4基・土壙・溝などである。

このような来住庵寺に関連する建物およびそれに先行する掘立柱建物、あるいは古墳、弥生時代の遺構が検出されるにおよび、この遺跡が一般市民の注目するところとなつた。そしてその調査状況、および遺跡の調査成果の一部が新聞などでもしばしば報道された。また調査期間中には、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの田中琢研究指導部長および、文化庁記念物課の稻田孝司技官の視察・指導を得ることとなつた。第2次発掘調査はこのような成果のもとに終了し、協和道路株式会社の協力を得て、遺構はいったん旧状に埋め戻すこととなり、遺跡の今後の方針については市文化財専門委員会の答申を受けることとした。この第2次調査の成果によって、来住庵寺の回廊の規模、主要伽藍の配置・規模の確認をする必要性が認められ、松山市教育委員会は第3次発掘調査を実施することを決定した。

第3次発掘調査は、土地所有者に対する土地借り上げ、および補償問題が解決した後、国庫補助事業として実施した。調査は昭和53年7月4日から同年8月20日まで行ない、この間、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの小笠原好彦技官の指導を得た。

調査はすでに明らかになっている塔跡を除き、現在の長隆寺境内の南側に中門・南門を想定して調査地区を設定し、一方塔跡の東側では西面回廊および寺域の西限を確認するための調査区、さらに本堂の周辺では講堂の規模を確認するための調査区を設定して実施した。調査方法としては第2次調査の地区割を南へそのまま延長し、A区（中門・南門区）、B～D区（回廊地区）、E区（講堂地区）と呼称して進めることとした。

その結果、A区では南門、中門は検出されなかったが、南面回廊に付属すると想定される東西溝を検出し、回廊の存在をほぼ想定できた。B～D区では、南面回廊および付属する南北溝を確認した。続いてE地区では、現在の本堂および庫裏などの建物によって、調査は思うにまかせなかつたが、本堂前面で講堂基礎を確認した。また本堂の南側、山門付近などで雨落石組溝を検出し、講堂の確固とした遺構を検出し、あわせてその規模も想定できた。

第2・3次の発掘調査のこのような成果をもとに、松山市教育委員会は、国へ対し、史跡指定を申請する方針を決定した。

2 調査組織

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター 小笠原好彦

松山市教育委員会 教育長 関谷勝良

教育次長 竹田 恵（前任）

〃 森田富士弥

文化教育課長 藤原 渉

〃 課長補佐 岸 郁男

〃 文化第一係長 坪内晃幸（庶務）

〃〃 主任 渡部直子（〃）

〃 文化第2係長 西 伸二

調査担当者 指導主事 森 光晴（第2次） [現 松山市立勝山]

調査主任 主任 西尾幸則 中学校教諭

調査員 非常勤嘱託 池田 学・松村 淳

調査補助員 越智武志（第2次）・沖野新一（第2次）・栗田茂敏（第3次）

調査協力者 長井数秋・大山正風

市文化財専門委員 八木繁一（第2次）・景浦 勉・和田茂樹・

山本四郎・石井 進・村上節太郎・森 正史

松崎宗雄・河合 効

II 遺 跡 の 環 境

1 遺跡の位置と歴史的環境

松山南部の地質は、中央に走る（東北東—西南西）中央構造線により分けられており、中央構造線以南は三波川変成岩類となり、北側は後期白亜紀和泉層群となっている。平野の中央を西流する重信川は、流域面積約400 Km²を持つ最大河川である。重信川の主要な支流は、石手川、小野川、山之内川、表川、井内川、林川、久谷川、砥部川である。平野部の勾配は上流約 $\frac{1}{50}$ 、下流 $\frac{1}{500}$ と比較的急傾斜の平野で、重信川、石手川などの氾濫による三角州性の湿润な冲積低地や、扇状地の末端では泉が分布する。すなわち重信川と支流の流域には、沖積世の堆積層が発達し、上流にゆくにしたがってこの堆積層は薄くなっている。本遺跡付近では重信川右岸（北岸）は冲積層も浅く、段丘や扇状地の堆積物の堆積が多くなった台地土壤から山地土壤へと連続する洪積台上にある。これら大小いくつもの河川を中心とした扇状地を形成し水利の便もよく人間の居住には、格好の空間を提供している。

松山平野における旧石器及び先土器関係の確たる遺跡は発見されていないが、縄文時代における後期から晩期にかけての遺跡に、船ヶ谷遺跡、上野（南ヶ丘）遺跡、久米山田池遺跡

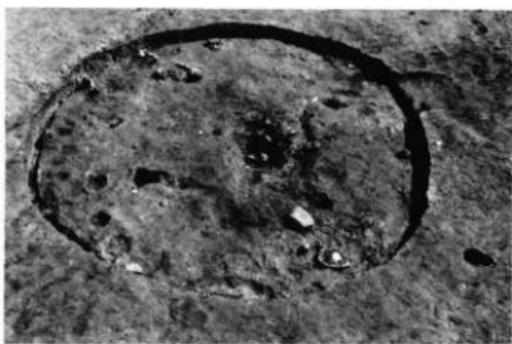


第1図 地図・遺跡の分布

などがあり、丘陵部や台地及び平野部に点在する残丘上及び扇状地の末端部に集落遺跡が形成され、船ヶ谷遺跡では縄文晩期における水稻農耕を示す出土遺物がある。弥生時代の遺跡は、小野川・内川・久谷川・砥部川の下流域の堤防上に大きな集落が相次いで出現する。これら大規模な集落遺跡には、久米高畠遺跡や土居窪遺跡のように弥生時代に開拓されたものもみられるが、上野（南ヶ丘）遺跡、船ヶ谷遺跡のように縄文時代の遺跡と重複するものも少くない。

松山平野における弥生時代関係の遺跡は、前期、中期、後期へと時代の進展と共にその数も増し、集落規模も大きく発展するか特に瀬戸内の分布を表わす高地性住居遺跡の大峰ヶ丘遺跡をはじめ、畑作農耕も平行して営まれていたと断定されるパン小麦（2粒）が米住遺跡の低位台地地形から出土し、貯蔵穴からはヒヨウタン・ウリ科植物の種子・山桃の種子とまるめて保存されていた桜皮が出土した。また範記号を施した土器が出土した釜ノ口遺跡等出土遺物も多く生産遺構をともなう遺跡や丘陵部において40基を越す配石土壙墓を出土した南ヶ丘遺跡、あるいは円形の住居跡と方形台状墓を併置した天山天皇山遺跡をはじめ平野部の微高地に埋葬されていた弥生前期の合口壺棺直葬の越智町遺跡、弥生時代後期の浮穴遺跡、西石井町の荒神堂遺跡の合口壺棺及び粘土塚など、丘陵部より遠く離れた平野部のわずかな微高地を聖地として利用された祭壇遺跡が点在しており、同時期における低湿地への開発状況をよく物語っている。

古墳時代には平野部周辺の丘陵部をはじめ、平野部に点在する残丘上、河岸段丘上、台地及び扇状地に500基にあまる古墳が作られた。これらは三島神社古墳、波賀部神社の王塚古墳などの前方後円墳を中心に、円墳・方墳を含む横穴式石室を主体構造とする古墳が大勢をしめ、同時代の居住跡も台地や扇状地はもとより、各河川流域の低地のわずかな微高地を求めて小規模集落の形成があり、生産遺構と直接に関係をもつ遺跡が爆発的に増加する。前川遺跡や枝松遺跡は、右岸の河岸段丘及び南面する緩斜面の地形を利用して方形の竪穴式住居跡を囲む掘立柱建物群があり、福音寺遺跡では舌状台地端部を利用した集落で一間に造り出し部を持つ方形の竪穴式住居跡と掘立柱建物跡がセットとなっている。生産遺構を含む遺跡では、高畠遺跡の北



第2図 釜ノ口遺跡の竪穴住居跡

側を西流する小野川の支流である堀越川周辺がある。さらに旧河道の魚果としながらみが、河岸段丘上の竪穴住居跡と掘立柱建物とのセットとなっている前川遺跡をはじめ、大規模な農業土木工事を施した古照遺跡の堰等がありこれ等の遺跡と併出する土器は、土師式土器を主な出土遺物となっている。弥生時代の終末から古墳時代にかけての遺跡は枚挙に暇のほど発展する。古墳時代の遺跡の今一つの特色として、生産遺構である住居跡と、集会的、祭儀的目的を持つものと理解すべき集落形態が見られる

東本II遺跡、桑原高井遺跡がある。これらの竪穴住居跡に見られる床面の平面プラント及び柱穴位置の変化から5様式に分類される。

松山南部が歴史上に登場する時期では、温泉郡・和気郡・浮穴郡・久味郡・伊予郡の5郡からなり、温泉郡は『伊予風土記逸文』に湯郡とするされて早くから中央(畿内)にも名が響き知られ、天皇をはじめ多くの来湯者が記載されている。「和名抄」の温泉郡には味酒・井土・桑原・立花・埴生の5郷を記しており古くから伊予の中心として中央との交渉も開けていた。和気郡・温泉郡の名は天平19年(747)の法隆寺資財帖で14か所の法隆寺莊園があることを記しており、「和名抄」でも大内・吉原・高尾・姫原の4郷を記している。久米郡は、



第3図 波賀部神社の王塚古墳



第4図 東山窓ガ森古墳6号墳

「国造本記」に応神天皇の世に、伊与主命が久味の國造に任せられたとあり、久味とは今の久米郡あたりをさすものと考えられる。

(森 光晴)

古代寺院

松山平野で、奈良時代までに造営された古代寺院として知られるものを北からあげると、湯ノ町庵寺・内代庵寺・中村庵寺・朝生田庵寺・来住庵寺・中ノ子庵寺・千軒庵寺・上野庵寺の8カ所である。これらの寺院は、松山平野のなかでも道後地区的丘陵地と右手川と重信川の合流地以東に開けた平野部に集中して分布する。こうした古代寺院の分布は、前段階に展開した後期古墳とは立地こそ異にするものが多いが、両者とも二つの河川によって形成された豊かな平野を基盤として成立した点では共通しており、松山平野は古墳時代から古代にかけて伊予における中心的地域を占めていたことを物語るものである。以下、米住庵寺を除く七寺院について概略を記すこととする。

湯ノ町庵寺

道後温泉の北方丘陵上の祝谷一丁目に位置する。かつて、伊予鉄道がグランドを造成した際に古瓦が出土したといわれている。石田茂作氏の「飛鳥時代寺院址の研究」に収録され、注目された寺院である。現在は寺域の一部に文教会館が建設されている。

付近の地形は、北と東と西の三方に山がせまっているが、南は開け、松山平野を展望する位置にある。寺域の大部分が破壊されてしまっており、現状の地形からは伽藍・寺域の範囲とも推測する手がかりを欠いているが、石田氏はもとの地籍図と古瓦の採集地によって、寺域として方1町、南面する伽藍であったと想像している。

出土瓦は、かつて松山城に陳列中に火災に会い失っており、わずかしか現存していない。素引10弁蓮華文・複弁8弁蓮華文・複弁6弁蓮華文などの軒丸瓦と重弧文・均整唐草文・波



第5図 湯ノ町庵寺

状文などの軒平瓦が知られている。この寺院の創建については、天德縁起に、推古天皇の法興6年に聖徳太子が行啓の際に、乎越宿称益躬と力を合わせて伽藍を建立したと記しているが、真偽は明らかでない。創建後、平安時代前半まで存続したことは出土瓦から知りうるが、平安時代中頃以降の瓦が出土していないので、その頃廃絶したものと

想定される。

内代庵寺

道後温泉の東方、上市二丁目に所在する。近くに義安寺があり、この義安寺の南側一帯が寺域に想定されている。かつて、礎石が存在したことでも知られているが、現在は失なわれている。瓦の分布は150m四方範囲に散布しているの

で、1町四方程度の寺域をもった寺院と想像される。出土瓦には、重弧文の軒平瓦が知られている。なお、内代庵寺の東600mに位置する右手寺から複弁8弁蓮華文軒丸瓦、重弧文・均整唐草文などの軒平瓦などが出土しているという。現状では寺院跡とみてよいか明らかでないが、今後注意される。



第6図 内代庵寺

中村庵寺

中村町四丁目の素鷦神社を中心とする一帯が寺院跡に想定されている。50m四方にかけて古瓦が散布しているが、寺域の大部分はすでに宅地化されている。古く、「伊予史談」に須山正夫氏が齊明天皇の行宮跡に想定した報文があるが、寺院跡と考えた方がよい。

朝生田庵寺

松山市朝生田に所在する寺院である。現在、旧寺域の中心部付近とみられる位置に、バイバスが通っている。昭和10年頃に、川の改修工事が行われ、その際に礎石が検出され、また



第7図 朝生田庵寺付近（善宝寺前）

墓地付近から掘りだされた径2mの大の心礎が、善宝寺の境内に現在おかれている。柱座径は、0.45m、柄穴径は0.22m。柱座の外縁に溝を彫りめぐらし、その溝から2カ所で方向を異にする外へ導く排水溝を切っている。この善宝寺境内の西側からも古瓦が出土しているが、伽藍の手がかかりおよび寺域の範囲については全く知りえない。

出土瓦には、複弁8弁蓮華文・複弁4弁蓮華文軒丸瓦と忍冬唐草文・均整唐草文軒平瓦などがある。これらのうち、複弁8弁蓮華文軒丸瓦の一つは、奈良県平隆寺から出土しているものと同范とみられており、両者の関係が注目される。この瓦は忍冬文軒平瓦と組合って創建時の堂塔に葺かれたものと想定される。軒瓦には平安時代前半のものまで出土しているので、その頃まで堂塔が存続したものと推測される。



第8図 朝生田庵寺礎石

千軒庵寺

松山市高井土居之内小字千軒に所在する、寺院跡である。波賀郡神社の東北東300m、高井町郵便局の東部一帯に位置する。明治35年前後に礎石が6個検出され、それらが破壊されたことが地元に伝えられている。出土瓦には山田寺系の単弁蓮華文の軒丸瓦が出土している。

中ノ子庵寺

松山市南上居町字中ノ子に所在し、内川に接するタチマチ堰のすぐ北側の台地一帯が寺院跡に推定されている。石田茂作氏の「飛鳥時代寺院址の研究」に収録されている。付近は、開墾され水田や畑地となっているが、もと素齋神社があり、そばにタチマチ庵寺とその付属墓地とがあったという。明治末年の開墾までは、方5間、高さ7尺ほどの土壇があり、上に礎石とみられる石が2個存在したといわれる。この2個の石は、五十鈴神社境内に現在運ばれている。開墾時に土壇中央部とおぼしき辺の地下で巨大な礎石が検出されたが、割って搬出したと伝えられている。石田茂作氏は、土壇の大きさ、および地元の人の話から塔跡と想定し、旧タチマチ庵の位置は、当時の伽藍配置からみて金堂に推定している。礎石は2個あり、1個は五十鈴神社の手水鉢に使用され、他は拝殿のそばにある。



いずれも自然石の上面を平らにし、ただけで、造出ではない。

出土瓦は、複弁8弁蓮華文軒丸瓦2種、忍冬唐草文軒平瓦・均整唐草文軒平瓦とがある。これらのうち、複弁8弁蓮華文軒丸瓦の一

第9図 中ノ子庵寺出土軒平瓦拓影図

つが創建瓦で、この瓦は朝生田廃寺の軒丸瓦と同一のものとも想定され、忍冬唐草文軒平瓦と組合せて使用されたものとみてよい。石田氏は、この中ノ子廃寺を風土記に記載されている久米寺の第一候補にあげているが、なお検討を要する。



上野廃寺

第10図 上野廃寺

松山市荏原字上野の大宮八幡神社の境内およびその周辺地域が寺院跡に想定されているもので、重信川の南に位置する。出土瓦には、複弁8弁蓮華文軒丸瓦・忍冬唐草文軒平瓦などが出土地している。

(小笠原好彦)

2 遺跡の現状とこれまでの調査

米住廃寺は、和泉砂岩の風化堆積した北來住舌状台地のほぼ西端付近に位置している。この寺院が立地する周辺地形を細かくみると、南は現在の長隆寺南門の南100mほどまで台地をなし、そこから一段おちて水田となる。東側は200mまでわずかに南にさがりながらも、ほぼ同一高をもって台地がのびており、南土居に通ずる南北道路の東30mの位置付近で一段下がっている。また西側もほぼ同一高の台地が続き、西250m付近で一段下がり、北側もほぼ同距離で一段下がる地形となっている。

米住廃寺跡には、現在、長隆寺が建っている。この長隆寺は黄檗宗に属し、京都の万福寺の末寺にあたる寺院である。境内には本堂・観音堂・山門・南門・庫裏などの建物が建っており、米住廃寺の旧時のなごりをとどめるものとしては、その規模から塔跡と想定されてきた土壇1基が、庫裏の西側に存在することと、ほかに本堂の正面北側と背面東側に都合20個余の礎石が点在するだけである。

長隆寺境内のすぐ南は、東西に通ずる小径を隔てて水田および畠地となっている。西は塔基壇の西側から水田が2箇続き、その西は南北道路を隔てて民家となっている。東側は境内地にすぐ民家が接しているが、本堂に通ずる東西道路から北側は、水田および近時埋められたが池が存在した。

こうした米住廃寺の現状の景観からすれば、かつての寺域は、東側はすでに失われてしまっているが、南・北・西は寺域の大部分を残しているとみてよいことがわかる。

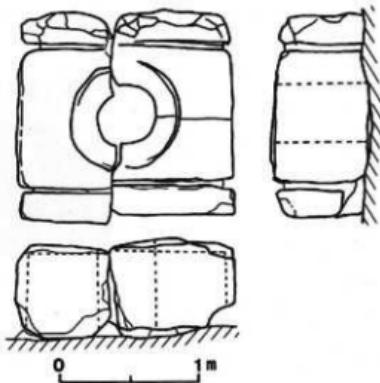
古くから塔跡に想定されてきた土壇は、1辺15m、高さ1.5mほどの規模を有するもので

ある。土壇状には、コウヤマキ・サクランボの樹木をはじめ、多種の灌木が茂っているが、土壇のはば中央部に一辺1.6m大方形の心礎とおぼしき大型の礎石とその両側に小型の礎石4個が露出している。

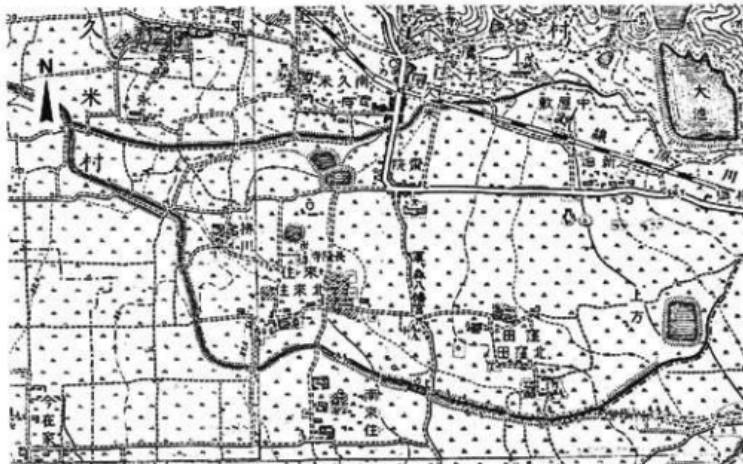
この心礎とおぼしき礎石は、東西1.62m、南北1.55m、高さ0.69mを測る和泉砂岩製の切石で、2個の石を寄せ合わせた形状をなしている。表土上にあり、しかも他の礎石と離れて位置することからも、原位置を勤いでいることは明らかである。この心礎の南北両端には、二つの石を縛るためにみられる

溝が一条ずつ彫られており、中央部には、径0.8m大の柱座がつくり出している。そして、この柱座の中央部には径0.42m大の上下に貫通する孔があいている。こうした柱座に貫通した孔をもつ例はまれで、いささか特異なものである。

ところで、これまで松山平野で行われた古代寺院の発掘調査をみると、きわめて少ない。



第11図 米住庵寺塔心礎



第12図 米住庵寺周辺地形図（縮尺2万5千分の1：明治38年）

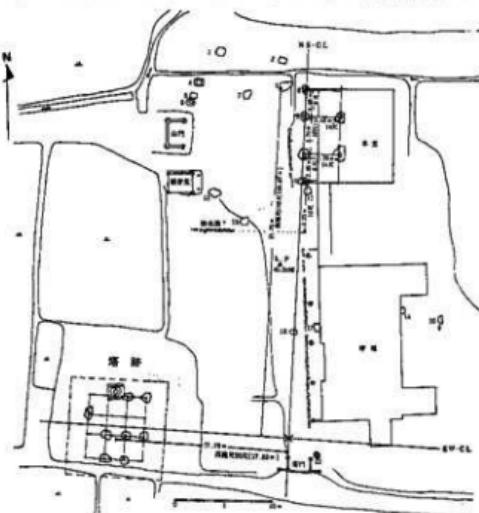
いま寺院の発掘調査に関連するものを二、三あげると、大正14年に柳原多美雄氏が衣山瓦窯跡を発見し、この際に出土した蓮華文軒丸瓦・重圓文軒丸瓦・重圓文軒平瓦・均整唐草文軒平瓦などが「伊予史談」第145号に報告されている。また、昭和5年6月の「伊予史談」第62号には、林降夫氏が発見した中ノ子廃寺を柳原多美雄・伊賀寅五郎氏らが、現地調査を行っていることや、五十鈴神社境内に2個の礎石が存在すること、法隆寺系の軒丸瓦や布目瓦を検出したことなどが鶴久森熊太郎氏によって報告されている。その後、久米村字来住高畠の現在の長隆寺から軒瓦が発見され、寺院跡であることが知られるようになったことや、須山正夫氏が素鷲村から軒瓦が出土することについて見解を述べたにとどまっている。

こうしたこれまでの松山平野における寺院研究の実状に対して、昭和42年の7・8月に、大山正風氏が来住廃寺の発掘調査を実施し、長隆寺境内の土壌が塔基壇であることを確認した。これは来住廃寺の第1次発掘調査にあたるものなので、ここではその結果明らかになつたことを要約し、参考に供することにする。⁽¹⁾

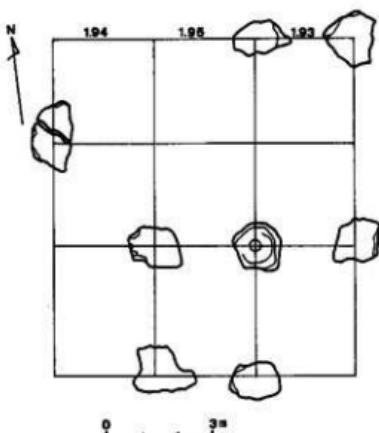
発掘調査の結果判明した塔基壇は、東西9.75mを測る。基壇上では、四天柱の礎石2個と側柱列の礎石6個が検出されている。これらの検出された礎石によって塔の平面規模は3間×3間、東西総長5.82m、南北総長6.42mの数値が得られている。この数値では東西長と南北長で0.6mの差が生じているが、東西総長を信頼しうる数値とみなしている。さらにこの数値によって、塔の柱間は高麗尺の5.5尺等間に復原し、また塔高についても、心礎の柱座径にもとづいて復原する石田茂作氏の説を採用して、五重塔であったとみなし、高さ31m前後を想定している。

塔基壇の築成技法についても、黄色粘土と灰層による版塗技法によって築成していることを確認している。しかし基壇外装の嵩石・羽目石・地覆石などのいわゆる化粧石については明らかにされず、今後の調査に残された。

また、本堂の正面では、茶褐色粘土・黄色粘土からなる基壇を検出し、さらに長隆寺本堂の4本の柱位置で、別の和泉砂岩の自然石からなる礎石を検出し、それらを講堂の礎石とみなしている。その結



第13図 来住廃寺第1次調査（大山正風氏原図）



第14図 塔跡実測図（大山正風氏原図）

以上記したように、大山氏による第1次発掘調査は、限られた小面積による発掘調査ではあったが、きわめて大きな成果をあげたというべきであろう。しかし、それだけに調査の不十分さも少なくない。とくに不十分な事実にもとづいて復原した基準尺および伽藍中軸線の想定は、なお説得性を十分もつにはいたっていないようである。このことは後述する。

けれども、これまで松山平野では、白鳳時代の寺院が8か所も知られ、これらのうち湯ノ町庵寺・中ノ子庵寺が法安寺とともに石田茂作によって紹介されて注目されながらも、古瓦の採集にとどまり、すでに寺域の大部分が破壊されてしまっているものが多い。こうした点からすれば、大山氏によるこの調査は白鳳寺院の内容をより具体的に明らかにするとともに新たな課題を提起した点で高く評価されるべきものである。（岸 郁男・西尾幸則）

注

- (1) 石田茂作「飛鳥時代寺院址の研究」1936年。
伊予の寺院としては、湯ノ町庵寺・中ノ子庵寺・法安寺の三寺院が収録されている。
- (2) 須山正夫「素鷦村出土物に就て」(『伊予史談』第4巻1号 1917年)。
- (3)～(4) 大山正風「長隆寺跡調査報告書」(『松山市文化財調査報告書Ⅲ』1974年)。
伽藍配置を、当初から法隆寺式に想定し、塔の北側で他の基壇の存在を確認したことから法隆寺式とみなしている。しかし、塔の北側建物が講堂か金堂かは明らかになっていない。

果、梁行が南から2.86m, 3.70m, 2.86m、さらに桁行の柱間の一間が3.65mであることを知り、これらから梁行は高麗尺8尺+10尺+8尺を想定している。

また、観音堂の南で、東西方向に一列に並ぶ玉石列を検出し、これを排水溝とみなしている。

以上のような遺構と出土瓦によって、来住庵寺を白鳳時代の寺院とし、その配置は法隆寺式の伽藍配置をとるものと想定している。

さらに、塔の柱間、講堂の柱間などによって、寺院造営にあたっては、高麗尺を使用し、堂塔の配置は高麗尺50尺を単位として設計したことを想定し、あわせて伽藍中軸線をもとめている。

III 発掘調査の経過

1 調査経過

昭和52年10月上旬に協和道路株式会社が、来住庵寺跡に宅地造成工事をする申請を出したので、10月12日に申請地における遺構の存否を確認するための予備段階の調査を行った。

この試掘によって、この遺跡を本格調査するための資料を得るに至り、11月21日から昭和42年の調査に次ぐ、来住庵寺跡の第2次調査を全面的に実施することとなった。

発掘調査は、4m間隔のグリッドを調査地区全体に設定し、堆土の土盛地との関係から、まず西南部から着手した。調査を開始して二週間後、予備調査で一部知り得たように、寺院関係の遺構と弥生時代および古墳時代の竪穴住居などの遺構が重複していることが明らかになつた。寺院関係の遺構としては、調査地区の西側を南北に走る回廊があり、中央部では、東西棟の掘立柱建物S B01が検出された。また調査地区的中央部から南半部にかけても掘立柱建物S B02・03・04が検出され、さらに竪穴住居S B21・22・23・24などを順次検出した。これらのうち掘立柱建物群は、建物相互の重複関係および柱の掘方に瓦を含むものと含まないものとがあり、こうした事実から来住庵寺に関連する建物と寺院造営に先行するものがあることがわかった。

そのほか調査地区からは、多数の溝や土壙などを検出したが、南北回廊の東に平行して走る南北溝S D33がとくに注目された。

検出した各遺構は、順次写真撮影し、さらに実測調査を行い、翌年の2月9日に全ての作業を終了した。

第3次調査は、昭和53年7月4日から実施した。調査は第2次調査で検出した回廊の南延長部を検出すること目的の一つとともに、講堂・金堂・中門・南門の想定地および寺域の想定地に小規模な調査区を設定した。塔の南側に設定した調査区(A区)では南面回廊にともなうとみられる東西溝を検出し、西側の調査区(B・D区)では第2次調査で検出した西面回廊が延びていることを確認した。

ついで、長隆寺本堂前面にT字形に調査区(E区)を設定し、講堂の遺構の確認作業を行った。ここでは講堂の基壇を確認するとともに玉石組の雨落溝を検出し、講堂の規模がほぼ明らかになった。その後、塔の東に金堂が配置される仰鑑を想定し、塔の東に現在建っている長隆寺の庫裏の東側・南側などに調査区を設定して発掘した。しかし、庫裏および園地などによって調査区はおのずと限定され、発掘区を設定した個所では後世に擾乱されており、金堂の基壇を確認するには至らなかった。

以下、日を追って調査経過を略記する。

(西尾幸則)

2 調査日誌

第2次調査（昭和52年11月18日～昭和53年2月9日）

- 11月18日 発掘道具類搬入、テント設営作業を行う。
- 11月19日 調査計画・工程・方法などを再検討する。
- 11月21日 表土排除作業開始、西側北東面に柱穴を検出する。
- 11月23日 表土排除作業。中央部で瓦類出土する。
- 11月24日 整地後グリット設定（4m×4m）し杭打ち作業を行う。
- 11月25日 遺構検出作業を重点的に行う。
- 11月27日 遺構検出作業を中心に行う。
- 11月28日 積穴式住居・回廊・土壙及び溝状遺構などを検出確認した後、遺構に石灰をしりし、写真撮影・測量を行う。
- 11月29日 中心よりやや南寄りに瓦類・土器片を多量に検出し、土壙も確認する。
- 11月30日 南端地点に東西に並ぶ柱穴を検出（SB03）、周辺にも柱穴瓦類・土器片を多数確認し測量を実施する。
- 12月1日 各遺構検出、掘下げ作業を行う。中心部より西南地点に瓦・土器片が密集した状態で出土する。
- 12月2日 南部で円形プランの積穴住居跡と南西部にも積穴住居跡を検出、これをSB21、SB22とする。土師器・弥生式土器片多數出土する。
- 12月3日 SB22より東6～7m地点に土師器・弥生式土器が密集して出土、測量を行う。SB21の西寄りを南北に貫通する溝を確認する。
- 12月5日 SB22掘下げ、土師器・弥生式土器が密集して出土。これより西北2m地点に円形プランの積穴住居跡を検出これをSB23とする。掘下げを行う。
- 12月6日 北から南へ流れる共通した3本の溝を確認し東よりSD31、SD32、SD34とする。特にSD32西側に回廊柱穴を検出掘下げを行い南北へ並列していることを確認する。また方形プランを持つ積穴住居跡を検出しSB24とする。回廊柱穴の延長と遺構の確認作業を行った結果、柱穴の西側のみが北へ3個確認する。
- 12月7日 昨日に続き土壙の掘下げ作業を行う。東南方向に掘立建物跡を確認しこれをSB02とする。SB02の東に土壙を検出するが、旧溜池のものと思われる。
- 12月8日 回廊柱穴掘下げ、溜池上堤堆積土を排土。土壙検出。弥生器出土。SB22掘下げ。弥生土器（器台・複合口縁等）出土。掘下げ作業を行う。
- 12月9日 回廊柱穴掘下げ、溜池上堤上に東西両端を削平された積穴住居跡を検出、SB25とする。A溝掘下げ作業を行う。
- 12月10日 SD34及びSD31掘下げる。

- 12月12日 S B22の出土遺物測量、掘下げを行う。S B24掘下げ作業を行う。
- 12月13日 S B22及び周辺部掘下げ作業、S D34及びS D31の後端部を確認する。
- 12月14日 S B22の遺物検出と周辺部の掘下げ作業。S D33掘下げを行う。
- 12月15日 S D32掘下げとS B22の遺物測量、S B22の南面と北面に柱穴を検出する。
- 12月16日 S B02柱穴掘下げ作業を行う。
- 12月17日 最西寄りの掘下げ作業を行い落ち込み肩部を検出、S B03の柱穴掘下げを行う。
- 12月19日 17日に続く作業、土壤状遺構及び柱穴検出、10m北地点に土師質土器出土する。
- 12月20日 S B23の柱穴検出作業、17日検出の土壤状遺構は竪穴住居跡とわかる。
- 12月21日 S B24で柱穴検出確認、S B22の遺物測量を行う。
- 12月22日 S B24で4本の柱穴を検出し測量に移る。
- 12月23日 回廊柱穴掘下げ作業及びS D33掘下げを行う。
- 12月24日 S B21北側、S D34に柱穴検出、回廊柱穴掘下げ作業を行う。
- 12月25日 雨天のため、出土遺物の整理を行う。
- 12月26日 調査区最北部を西へ曲る地点掘下げ、瓦類・石類の集合群を検出。軒丸瓦・平瓦・丸瓦・鷲尾片出土、南寄りに竪穴住居跡を確認S K12とし掘下げ作業を行う。

12月27日 S D32の掘下げ。北端はかなりの深さを保つ、S B02柱穴掘下げ作業、S B02を直角に曲る掘立住居跡 S B02柱穴検出掘下げ作業、回廊柱穴測量を行う。

12月28日 最北部高畠池瀬部分検出確認。S B01の柱穴掘下げ作業を行う。

12月29日 昨日に続き高畠池瀬部分検出作業を行う。

1月4日 S B02柱穴掘下げ、B溝掘下げ及びC溝掘下げ作業を行い、瓦類・須恵器片類が出土する。

1月5日 S B02の掘方断面計測、C溝西の肩部にS B01の柱穴検出する。

1月6日 S B01柱穴掘下げ。S B02掘方断面計測。C溝掘下げ、底辺に礫を検出する。

1月7日 昨日に続く作業と、S B01と各土壤の掘下げ作業を行う。



第15図 S B21 (竪穴住居跡)



第16図 北調査地区発掘状況

- 1月8日 旧大池土堤上の遺構検出作業を行うが確認出来ず、S K12掘下げを行う。
- 1月9日 鶴尾片出土地点の遺物検出作業と測量。軒丸瓦・軒平瓦が出土する。
- 1月10日 C溝掘下げ作業、調査区清掃、写真撮影を行う。
- 1月11日 最西端柱穴掘下げ作業。S B01内の柱穴を検出する。
- 1月12日 C溝掘下げ、碌・丸瓦類出土。S B23周辺柱穴掘下げを行う。
- 1月13日 昨日に続く作業とS B22のセクションベルト撤去。土器片出土。回廊柱穴を確認した。
- 1月14日 S K12調査完了、柱穴及び中央を流れる浅い溝状遺構確認。S B02の周辺柱穴確認作業で土堤上にも無いことを確認。S B25掘下げを行う。
- 1月15日 S B25掘下げ完了。S B01の掘込み部分掘下げ終り柱穴を掘る。
- 1月16日 S B01柱穴掘下げ、瓦類・石の礎板を検出、S D32掘下げを行う。
- 1月17日 S B22遺物測量、C溝に瓦・石の礎板を検出、S B05の柱穴を見る。
- 1月18日 S D32掘下げ。平瓦・河原石が多量に出土する。S B05柱穴掘下げを行う。
- 1月19日 S D32掘下げ側壁部を東へ張り出した工房状の遺構及び円弧状に曲る柱穴を検出。土師器・弥生土器が崩れた状態で出土する。
- 1月20日 昨日に続く作業を行い、崩れた土器の側量をする。S D22底辺が浅くなる。
- 1月21日 S B03柱穴掘下作業。崩れた土器は更に東へ広がって出土する。
- 1月23日 各遺構の測量を行う。
- 1月24日 テント小屋にて土器整理を行う。
- 1月26日 S D32に連なる排水溝を検出、掘下げを行う。
- 1月27日 S B22内の周溝。回廊柱穴掘下げ作業。中心部に炉跡を検出する。
- 1月28日 S B01の作業終了する。
- 1月29日 S D32掘下げ測量。礎板の断面実測を行う。
- 1月30日 S D32南端に接続する浅い溜池部を検出し掘下げを行う。
- 1月31日 最西端部土壙及び周辺部の掘下げを行う。
- 2月1日 S B21を掘下げ、中心部で炉跡を検出。S B23を完掘する。
- 2月2日 S B21~23の掘方断面計測・溜池部掘方終了する。
- 2月3日 S B03とS B05の柱穴掘方終了。C溝掘方終了する。



第17図 北調査地区全景

2月4日 調査全区の断面計測及び測量を行う。

2月5~8日 発掘諸材料引揚げを行う。

2月9日 遺り方撤去、発掘調査を終了する。

(松村 淳)

第3次調査（昭和53年7月1日~8月19日）

7月1・2日 発掘調査地および付近の測量を行う。

7月3日 調査地区の設定（A~D区）する。

7月4日 グリッド割りつけ設定する。

7月5日 発掘区および周辺の現状を写真撮影する。A区から表上の排土を開始する。

7月6日 A区の第3層まで排土作業。平瓦・須恵器出土。A3~A4区で東西に溝状遺構を検出する。

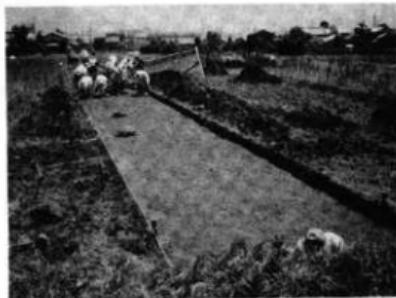
7月7日 A区の第3層の排土を完了。A7区からA14区で溝を検出。A11区の第3層で銅錢2枚出土を見る。

7月8日 D区の第3層の排土、D3区で南北溝を検出する。D3区・D4区とも柱穴を検出し、回廊の延長であることを確認する。B区の第1・2層の排土を完了する。東寄りで南北に走る柱穴列を検出する。B3区で南北溝を検出し、南寄りで軒丸瓦2個出土する。

7月10日 D区の第3層まで排土作業。D4・5区で柱穴を多数検出し、寺院造営前と想定する。B区の遺構を検出する。

7月11日 B区の遺構検出。C区の第2層の排土を完了し、C1~C8区まで南北溝を検出する。

7月12日 A1区~A2区の東西溝は西に伸びることが確認され、A7区~A14区にも溝2条を検出する。



第18図 遺構検出状況（A区）



第19図 遺構検出状況（D区）

7月13日 A区の溝2条を掘りさげる。

A12区～A14区で柱穴を検出した。B区で北に3m幅の調査区を、D4～D5区の南でも調査区を拡張する。

7月14日 A区の東西溝の掘り下げ作業。溝内には多数の拳大の石を含んでいる。B4区～B8区で重複する柱穴を多数検出する。

7月15日 各調査区で検出した遺構を実測する。

7月17日 A区の東西溝の掘り下げ作業を継続する。B区の南北大溝を掘り下げ、あわせてC区の溝も掘り下げる。

7月19日 長隆寺本堂前に調査地区を設定し、E区と呼ぶ。講堂基壇の版築を確認し、南端で玉石組雨落溝を検出する。A区は東西溝の掘りさげ継続。B区の柱穴の検出作業、南北大溝の掘り下げ。

7月20日 A区の遺構検出を終了。D区の柱穴掘り下げ作業。E区の基壇検出作業を続ける。長隆寺西門北に東西トレンチを設定、雨落溝を検出。庫裏の南にもトレンチ2か所を設定し掘り下げる。

7月21日 B地区で竪穴住居を検出。E区では基壇検出作業を行う。講堂の玉石組雨落溝の西南隅および西北隅を検出する。

7月22日 影を考慮し、早朝に遺構の写真撮影を行う。B区・D区の柱穴を精査する。B4・5区で回廊柱穴を検出する。

7月24日 実測用の基準杭を設定し、実測の準備をする。

7月25日 B区で柱穴の精査、柱穴の埋土層序を実測する。

7月26日 昨日に続き柱穴の断面観察。

7月27日 C区の溝の掘り下げ。各調査区の掃除を行い写真撮影をする。

7月28日 A区拡張区の遺構実測。B区の柱穴の掘り下げをする。



第20図 E区発掘状況1



第21図 E区発掘状況2

- 7月29日 A区の遺構実測。B区の柱穴断面実測作業。B区・D区に造り方を設定する。
- 7月31日 調査区全域に造り方を設定する。
- 8月1日 B区の柱穴を掘り下げ、B I区から実測をはじめ、D区・E区の実測を開始する。
- 8月2日 B区の西で瓦を含む落ち込みを検出する。新たに柱穴の重複を確認し、建物にまとまるか検討する。
- 8月3日 前夜の雨のため、B区・E区の排水作業を行い、排水が済んだところから実測を行う。
- 8月4日 D地区の排水作業。A区の遺構を実測する。B区の南北大溝の補足調査を行い、溝の壁面を確認する。B区およびD区の実測を行う。今回の発掘調査の成果を記者発表するとともに、一般市民を対象として現地説明会を実施する。夏休み中なので子供の参加が目立った。
- 8月5日 D区の遺構実測および部分写真撮影のため掃除をする。
- 8月7日 B区・E区の実測を行う。
- 8月8日 E区の土層実測図を作成する。
- 8月9日 E区の玉石組雨落溝の平面プラン、立面図を作成する。
- 8月10日 昨日に続いて、玉石組雨落溝の立面図を作成する。
- 8月11日 A区・B区・C区の土層実測作業を行う。
- 8月12日 B区・C区の土層図作成。A区・E区の実測。土層図作成の終了したところから埋め戻し作業を実施する。
- 8月14日 B区、柱穴の重複関係を実測し、A区・D区の埋め戻し作業を行う。
- 8月17日 柱穴の断面を実測し、柱穴の重複関係をみる。C区の遺構を実測する。
- 8月18日 E区の雨落溝の断面図を作成する。調査地区および周辺の写真撮影を行う。B区・C区の埋め戻し作業を行う。
- 8月19日 各調査区の埋め戻し作業完了。発掘資材を撤去し、終了する。
（池田 学）



第22図 現地説明会

IV 遺構

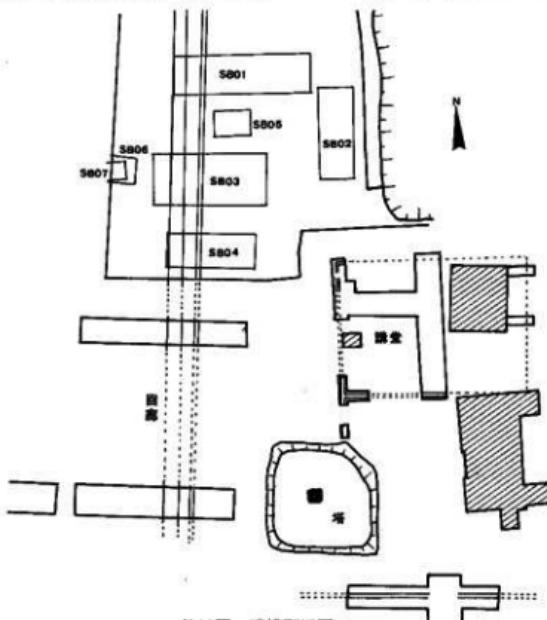
来住庵寺跡で行なった二回の発掘調査では、来住庵寺に関する遺構と、寺院造営に先がつ7世紀代の掘立柱建物群および堅穴住居をはじめとする古墳時代、弥生時代の遺構を検出した。ここでは、寺院関係の遺構とそれに先行する遺構群とに区別して記述する。

1 寺院関係の遺構

A 講堂

講堂は現在の長隆寺本堂・山門・観音堂周辺で検出した。調査は本堂の前面に十字形に調査区を設定して実施した。講堂に関連する遺構としては、講堂の基壇とその周辺部で検出した基壇に付属する雨落溝などがある。

講堂は本堂のすぐ前面を中心として基壇土の広がりを検出した。基壇は北側では本堂の北



第23図 遺構配図

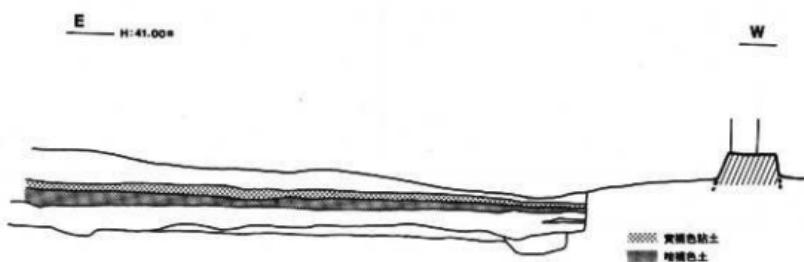
端まで、西側は山門まで、南側はかなり擾乱されているが、庫裏の北側まで、東側は本堂の東5.5m付近まで延びていることを確認した。

この基壇は、7世紀後半の黒褐色土層の上に、版築によって積みあげて築成したものである。調査地区内では、本堂前面付近がもっとも残りがよく、厚さ0.45mほど残っている。基壇は黄褐色粘土と暗褐色土を水平に、しかも互層に積んでつきかためて築成しており構造の層をなしている。黄褐色粘土層は、やや粘土質のいわゆる洪積層の山地で、遺物を全く含んでいない。暗褐色土は腐植土質の粘質土で、調査地区内で基壇の断面を観察した限りでは遺物を検出していないが、南北両調査区におけるこれと同一層とみられる層では寺院造営前の7世紀の土器を含んでいる。おそらく、この層は寺院造営時に周辺の堆積層を掘鑿して積んだものと推測される。

基壇はかなり削平されており、礎石はなく、また根石も検出されなかった。第1次調査では本堂の西側柱列で3個の礎石が検出されているが、これらの礎石はその後、本堂前をコンクリート舗装した際に覆われてしまっており、現状では再確認することが困難となっている。前回検出されている礎石が、旧位置を動いていないとすれば、旧基壇高は今回検出しているものよりも0.25mほど高いことになり、もとは0.5mほどの高さであったと想定される。

基壇外装の化粧石も原位置をとどめるものは見られない。ただ、講堂基壇から離れているが、東27mの位置で凝灰岩切石の一部が検出されているので、講堂基壇の外装は凝灰岩切石によって化粧していたものとみてほぼまちがいない。

基壇の四辺には雨落溝がめぐっている。この雨落溝は基壇の南側・東南隅・西北隅など都合四カ所で検出した。これらの雨落溝はいずれも玉石組によるものである。南側では、ともに0.3m大の玉石を側石とし、その間にやや小さめの石を底石としている。溝幅は0.7mである。この雨落溝は第1次調査でも長さ4.5m分を検出しているが、前回は調査面積が狭かったので、南北いずれかの側石を検出したにとどまっており、溝とみてよいか検討の余地を残していた。したがって、今回の調査によって、南側玉石組雨落溝であることが明かになり、



第24図 講堂基壇土層実測図

合せて溝幅も確認したことになる。南側で検出した2カ所の雨落溝の底石高から、この雨落溝は東から西へ排水したことがわかる。

西北隅ではL字形に折れる雨落溝を検出した。北側溝は大きめの側石が2列並び、その間に小石をつめている。南折した南北方向の西側雨落溝もほぼ同様に配置している。この二つの雨落溝の関係では、東西に走る北側雨落溝がわずかながら高いので北から南折して排水していたことがわかる。

西南隅では、T字状をなす雨落溝を検出した。ここでは南北に走る基壇の西側雨落溝と東西に走る南側雨落溝とが合流し、さらに同一規模で塔の北辺部までまっすぐ延びている。おそらく、この溝は塔基壇をめぐる同様の雨落溝と塔の北側で合流させていたものと推測される。なお、今回の調査では、講堂の東側雨落溝は後後に玉石組溝の玉石が抜きとられており、その抜取痕跡を検出したにとどまった。

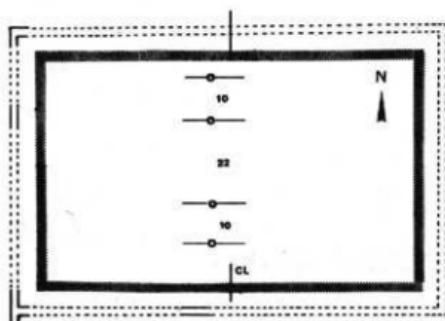
階段は調査面積が狭いので、調査範囲内では検出されていない。また北側の階段が想定される位置は東西に走る通路になっており、調査できなかった。

講堂については、以上のような遺構を検出したが、先述したように基壇外装の化粧石あるいはその抜取跡が検出されていないので、基壇規模を直接計測することは困難である。いま、現状で検出している基壇を手がかりにその規模を復原すると、東西約28.80m、南北18.0mほどとなる。この数字は南・西・北で検出した雨落溝と東側雨落溝の石組抜取跡にもとづいて計測したものから東西3.0m、南北3.0mを引いたものである。この数字は基壇をめぐる大走りに相当することになる。

ところで、前回の調査では本堂の西側柱列北第1・第2・第4の礎石下で、別の大型礎石を検出している。これらの礎石のうち北第1を講堂の北側柱列に、北第2を北入側柱列に、北第4を南入側柱列の位置に想定することができそうである。もし、そうみてよければ前回

報告されている北入側柱列と南入側柱列の長さ6.55mは講堂の身舎の梁行の長さとなるので、身舎の梁行柱間は3.27mで唐尺の11尺とみることができそうである。

また、北側柱列と南入側柱列との長さは、2.86mとされている。この数字は礎石上で10尺(2.98m)とすることも困難ではない。こうした想定から講堂の梁行総長は、10尺+11尺+11尺



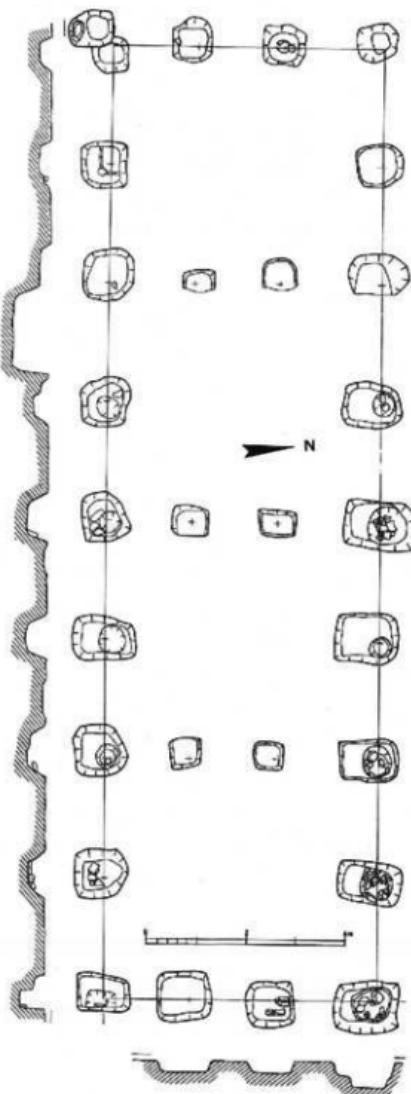
第25図 講堂の柱間

+10尺で42尺(12.52m)とみれそうである。つぎに桁行の柱間は前回の調査では、北入側柱列にあたる礎石とその東で検出された礎石抜取跡などによって、3.65mが報告されている。この礎石抜取跡については、なお検討の余地もないではないが、いまこの数字を用いて12尺とすると、桁行の両端が梁行の両端間と同じく10尺で、ほかの柱間が12尺であった可能性が高くなる。柱間の長さについては遺構の材料が不十分なので、あくまでも想定の域をでないが、基壇の大きさをも考慮すると、桁行は7間で、両端間が10尺、中5間が12尺の建物を想定の一つとしてあげておく。

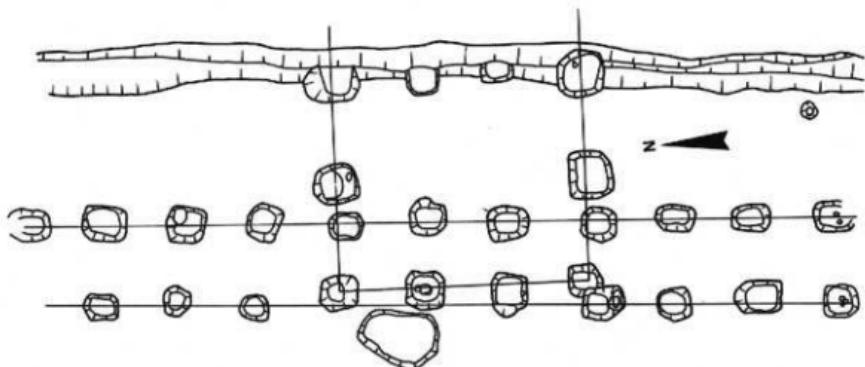
(小笠原好彦)

B 僧 房 (SB01)

講堂の西北22mの位置で検出した桁行8間、梁行3間の東西棟の獨立柱建物である。桁行総長は19.2m、梁行総長5.5m。建物方位は真北に対し北で1度東に偏している。西妻柱列の柱穴が西面回廊の西側柱列の柱穴と重複しており、この重複関係から回廊に先行して建てられたことがわかる。北側柱列の北第1・第5などの柱穴底に瓦を置いたものがある。側柱列・妻側柱列とも柱穴は方1.0m大である。桁行の東から2間目、4間目、6間に側柱列よりもひと回り小型の方0.8m大の柱穴を南北方向に2個ずつ配し、全体を



第26図 僧房実測図



第27図 回廊と僧房重複関係

4区画に仕切っている。各区画はいずれも桁行2間(4.8m), 梁行3間(5.5m)の同一の広さ(26.4m²)で、それぞれが一つの房をなしていたものとみられる。各房では、さらに小空間に仕切るような柱穴や棚などの施設は検出されていない。

C 回廊

北調査地区の西半部および南調査地区のB区・D区で検出した南北に走る掘立柱建物による回廊である。単廊で、北調査地区では27間分、総長48.3m、南調査地区ではB区で4間、D区で4間分検出した。建物方位は真北に対して、北で1度14分東に偏している。北調査地区では僧房S B01および掘立柱建物S B03・04、竪穴住居S B22・24と重複しており、これらのいずれの建物よりも新しい。この回廊の柱穴は0.8m×0.6m大で、やや南北に長い長方形をなすものが多いが、一部南・北調査地区の西側柱列の南第9・10・11と東側柱列の南第4・6・7などで検出した。柱間は桁行が6尺(1.79m)等間で、桁行の柱間の長さから1尺の長さを復原すると29.8cmとなる。梁行も6尺(1.79m)である。

この西面回廊は、北調査地区を南北に貫き、南調査地区でもB区・D区にそのまま延びているだけである。南側は後述する東西溝S D38からみて、塔の西南部で東に折れて、中門にとりついていたものと想定される。しかし、北側では、回廊が東折する位置の手がかりは全く検出されていない。

S D33は西面回廊の東4mの位置を回廊と同一の方位をとって南から北へ流れる南北溝である。溝幅は2.5mでU字状に掘り下げられている。深さは北調査地区の南端部では遺構面から0.45m、中央部で0.8m、さらに北半部では1.2mと深まり、北端付近では2mになっている。中央よりやや南側では溝底に段差を設けて排水している。南調査地区では、北調査地区よりも浅く0.4mほどの深さである。両調査地区とも溝の堆積土から多量の瓦が出土して

いる。このS D33と直接合流する溝は検出していなかったが、塔跡の南5mの位置を東西に走るS D38は、S D33と直交する位置にある溝である。

S D38は溝幅1m、深さ0.5mほどの東西溝である。溝底の高低から東から西へ排水していることがわかる。溝の堆積土からは多量の瓦と土器が出土した。今回の調査では、南回廊の遺構は後世の削平によって検出されなかったが、この東西溝S D38は南面回廊に付属したものとみるのが妥当である。したがって、西面回廊の南北溝S D33と南面回廊の東西溝S D38とが合流することが想定されるが、その位置は現在一段低い水田になっている。今回の調査では、発掘して確認することができなかったが、おそらく二つの溝は合流し、北へ排水していたものとみてまちがいない。

(小笠原好彦)

D その他の遺構

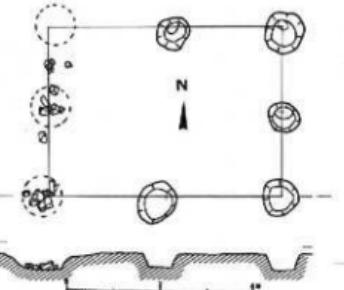
S B05

S B01のすぐ南で検出した東西2間(5.06m)、南北2間(3.65m)の東西棟建物である。桁行2.49m等間、梁行1.84m等間である。柱穴は僧房S B01ではいずれも方形の掘方をしているのに、この建物は円形の掘り方を呈しており、径8.5m、深さ3mである。検出したものでは、北側柱列の東第1と南側柱列の東第2がひと回り大きい。西妻側柱列の柱穴はいずれも南北溝S D33と重複しており、溝の埋土と類似しているため柱穴の掘り方が判別し難く、いずれも柱穴の掘り方を検出できなかった。しかし、西妻側柱列の南第1の位置で柱穴の底にええたとみてよい平瓦・石を検出し、柱穴の底を確認したので、南北溝S D33が廃絶し埋めたあとで柱穴を掘って建てたとみてよい。南北溝S D33の廃絶と寺院の廃絶とが同時であるかは明らかでないので、関連する建物として取扱っておく。この建物は、東西、南北とも2間であるが、東西の柱間が1.41m長く、東西棟として建てている。柱痕跡はいずれも明瞭でない。

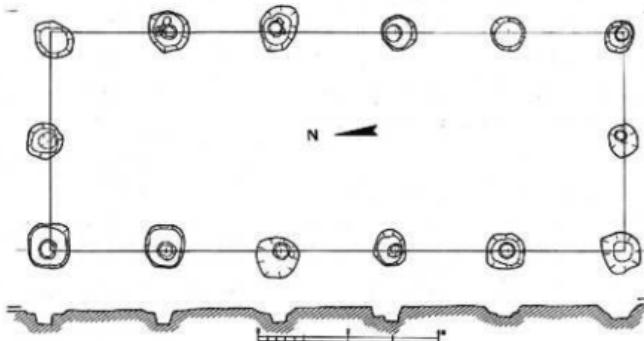
2 寺院造営前の遺構

S B02

北調査地区の東半部で検出した桁行5間(13.0m)、梁行2間(4.6m)の南北棟掘立柱建物である。方位は真北に対し、北で1分西に偏している。僧房S B01の東南隅とS B02の西北隅とがわずか1m離れているにすぎず軒を接する位置にある。柱穴からは全く瓦が出土し



第28図 S B05建物実測図



第29図 SB02建物実測図

ていないので、僧房SB01に先行する建物とみられる。柱間は桁行2.57m等間、梁行2.44m等間である。柱穴は建物の北半部のものが遺存状態がよく、方0.9m、深さ0.35mであるが、東南部分の柱穴は後世に著しく削平されており、円形に近い形態に変形し、深さも0.25mほどしか残っていない。柱痕跡は西側柱列の北第1～第5と東側柱列の北第2で検出した。また東側柱列の北第3では柱掘方の底部に石をつめている。

SB03

北調査地区の中央部で検出した東西5間(16.2m)、南北3間(7.2m)の東西棟掘立柱建物である。建物方位は真北に対し、北で1度9分東に偏している。側柱列の北第2の位置で、西面回廊および弥生時代の竪穴住居SB22と重複し、北側柱列の東第5で竪穴住居SB23の壁面と重複している。西妻柱列の北第3の柱穴は検出されなかった。桁行11尺(3.24m)等間、

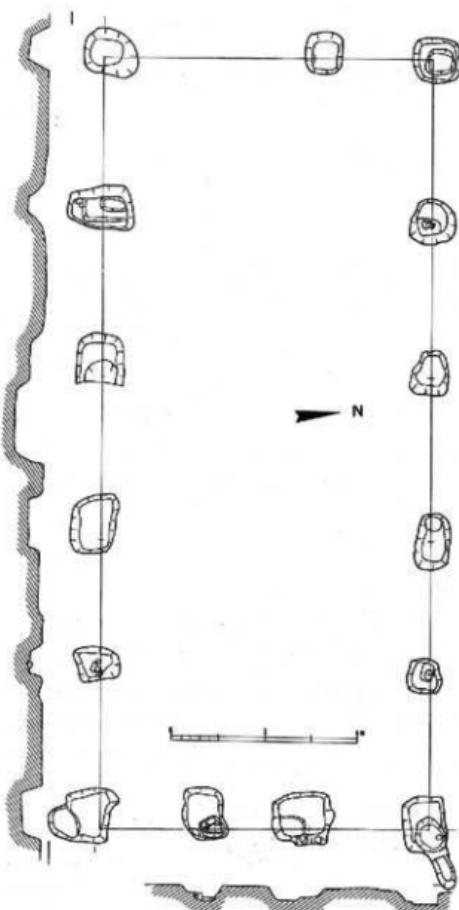
	桁 行		梁 行		桁 行 柱間寸法	梁 行 柱間寸法
	柱 間	総 長	柱 間	総 長		
SB02	5	12.9	2	4.6	2.58	2.3
SB03	5	16.2	2	7.2	3.24	3.6
SB04	6	12.7	2	4.8	2.12	2.4
SB05	2	5.1	2	3.6	2.55	1.8
SB06	2以上	4.2	2	4.2	2.1	2.1
SB07	2以上	4.2	2	3.6	2.1	1.8

第1表 棚立柱建物の寸法

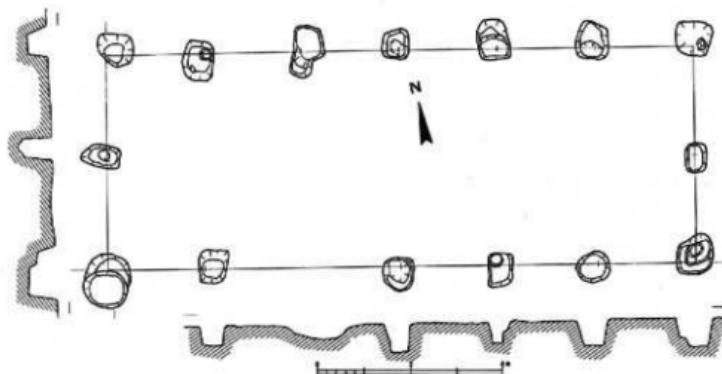
梁行8尺(2.4m)等間である。柱穴は方1mほどのものが多いが、北側柱列東第3、南側柱列東第3、東妻柱列北第3のように長方形をなし、長辺が1.2mほどのものもある。北側柱列東第5および南側柱列東第2では柱掘方の底に石をおいている。しかし瓦をおくものはない。柱痕跡は北側柱列の東第1・2・3で検出した。これらのうち東第1の柱痕跡ではやや東に片寄っており柱通りがそろいにくい。北・南側柱列の東第2の柱穴は南北溝S D32と重複しており、S D32よりも新しいことがわかる。柱穴から瓦が全く出土しないこと、西面回廊にともなうS D33が側柱列の東第4の柱穴を壊していることからも、寺院造営に先行して構築された建物であることが知られる。なお、梁行が3間で、廟がかからない平面プランをなすものは7世紀代の掘立柱建物のなかに比較的多くみるものである。

S B04

掘立柱建物S B03の南4mに、平行して建つ東西6間(12.7m)、南北2間(4.8m)の東西棟掘立柱建物である。建物の西端付近で西面回廊、建物の中央部で南北溝S D33と重複し、南側柱列の東第7の柱穴が回廊の柱穴によって、東第5の柱穴がS D33によって失われている。建物方位はS B03と同じく、真北に対して北で東へ1度東に偏する。桁行は7尺(2.13m)等間、梁行は8尺(2.4m)等間である。柱穴は方0.7m、深さ0.3mであるが、両妻柱の柱穴は側柱列の柱穴に比べてや



第30図 S B03建物実測図

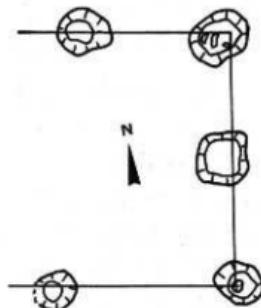


第31図 SB04実測図

や小さめで浅い。柱痕跡は北側柱列の東第1・4・6、南側柱列の東第3で検出した。東妻柱列の南第3の柱穴はひと回り小さいが、後世の削平をうけて小型化したものも本来の形ではないであろう。柱穴からはいずれも瓦の出土をみない。

SB06

SB03の西2mで検出した東西2間以上(4.2m以上)、南北2間(4.2m)の掘立柱建物である。調査地の西にお延びている。建物方位は真北に対して、北で東に2度9分偏しており、SB03よりもわずかに東に大きく偏する。柱間は東西・南北とも7尺等間である。この建物を東西棟建物を想定すると、柱穴は東妻柱のみが方0.9mであるが、ほかは円形に近く、径1~0.7mである。柱痕跡は東妻柱列の南第1で検出した。柱穴からは瓦は出土していない。



SB07

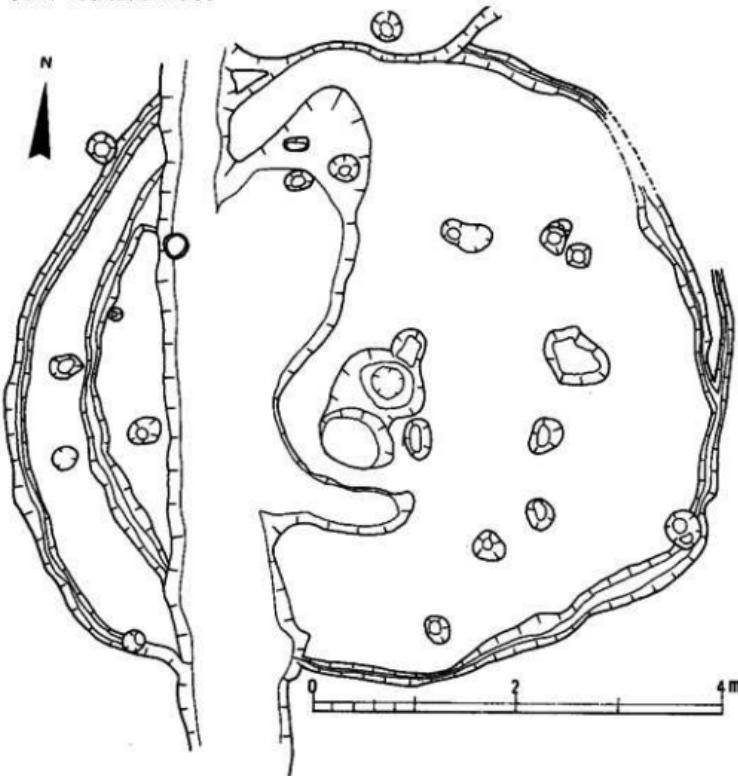
SB06と重複する東西1間以上(2.1m)、南北2間(3.6m)の掘立柱建物である。SB06と同じくさらに西に延びている。建物方位は真北に対して北で西に6度1分偏している。SB06と同じく東西棟を想定すると、桁行7尺(2.1m)、梁行6尺(1.8m)である。柱穴は0.7m、深さ0.4mで柱痕跡は東妻柱列の南第3で検出した。柱穴からは瓦の出土をみない。

(小笠原好彦)

第32図 SB06実測図

S B21

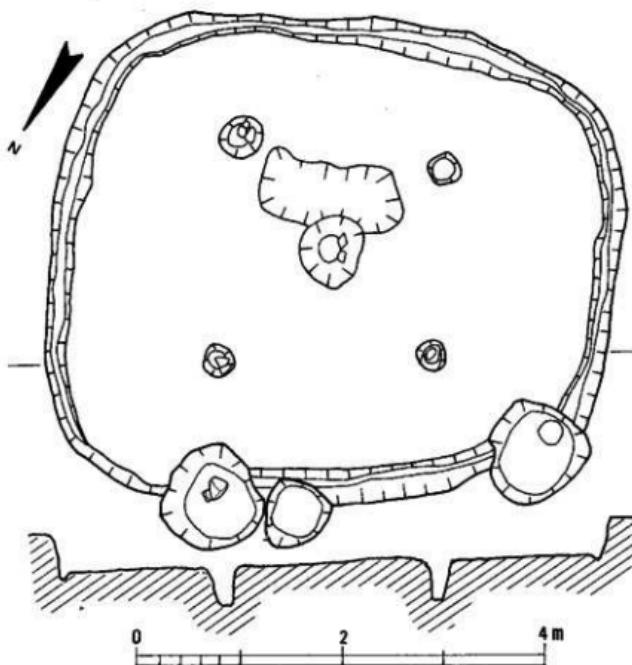
北調査地区の東南部で検出した円形の竪穴住居である。溝 S D31が竪穴住居の中央西寄りを南北に貫通し、掘立柱建物 S B02の西側柱列の南第1の柱穴が東北部の周溝と重複している。また北壁を S K53が重複して破壊している。後世の削平が著しいので、地山面にわずかに周溝をとどめているだけで、壁はほとんど遺存していない。プランはほぼ正円形に近く、径 6 m を測る。周溝は断面 U 字状をなし、幅 0.1 m ほどのものである。S D31の西側では、周溝が二重にめぐっているので、竪穴住居が二つ重複している可能性が高いが、削平が著しく明らかでない。床面では 16 個の小穴を検出した。これらのうち東側の規模の大きな 2 個を主柱とみてよいかもしれない。中央部には炉跡とみられる焼上を検出したが、小穴と重複しており、完全には残っていない。住居内の埋土からは弥生式土器が出土しているが、いずれも細片で実測困難である。



第33図 竪穴住居 S B21 実測図

SB22

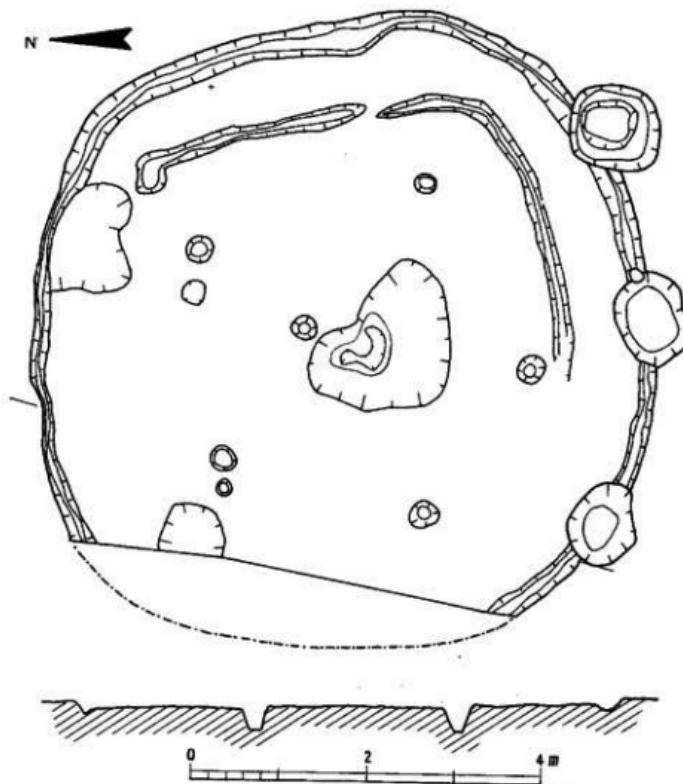
北調査地区的西南部で検出した隅丸方形の竪穴住居跡である。回廊および掘立柱建物SB03の北側柱列の東第5の柱穴と重複している。東西5.3m、南北5.1mで東西がわずかに長く、細かくみると東側の1辺よりも西側の1辺がやや短い。壁にはV字状の周溝がめぐっているが、北の隅丸部にあたる位置で一部溝が切れている。ここに入口が設けられた可能性がある。周溝の幅は0.4m、深さ0.3mほどである。床面では柱穴3本を検出しているが、他の1個は回廊の西側柱列の柱穴と重複したことによって失われたものとみられる。柱穴の径は0.3m、深さ0.3mである。柱間は東西が2.1m、南北2.2mでわずかに南北が長いが、辺のはば2分の1の距離をとって配置したものとみられる。床面は平坦で凹凸が比較的少ない。床面の中央部には炉跡が検出されており、南寄りに灰跡が不整形に広がっている。住居内からは後期の弥生式土器が出土しているが、後世の削平によってかなり破損しており、もとの遺存状態をとどめるものが少ない。



第34図 竪穴住居SB22実測図

S B23

調査地区の西端部で検出した円形の竪穴住居である。南北部分で獨立柱建物 S B03およびS B06と重複している。径7mを測る。壁面にはU字状の周溝がめぐっている。周溝の幅は0.3m、深さ0.25m。壁面の掘りこみは、南と北でわずか4cm差があるだけで、ほぼ平坦である。床面からは、小穴を14個検出した。この小穴群のうち、中央部の5個が主柱として掘削されたものとみられるが、中央の位置にも柱穴が1個あるので、これも加わった構造となるかも知れない。柱の径は0.3m、深さ0.3mほどである。床面の中央部には焼土があり、炉跡とみられる。東壁面から南壁面付近にかけて、U字状の溝を検出した。この溝の内外で床面の段差

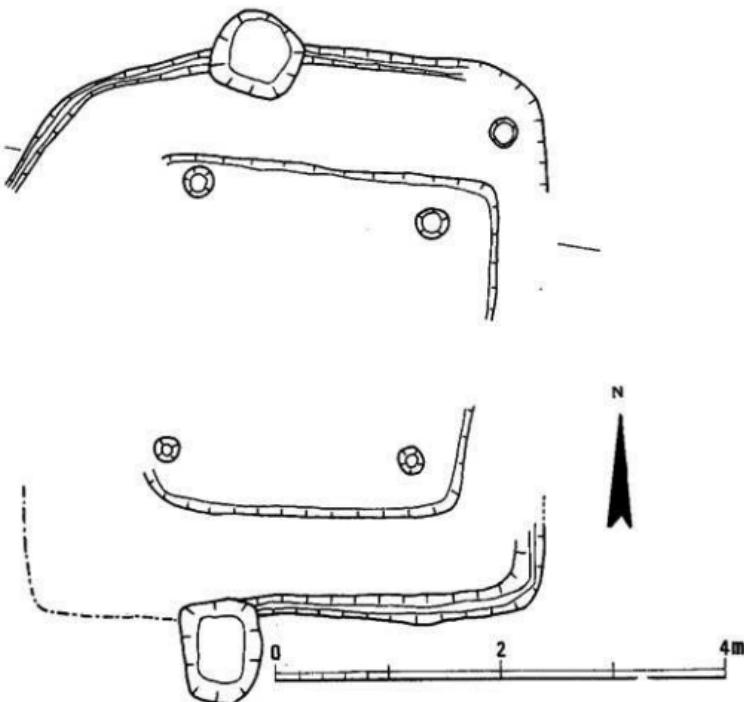


第35図 竪穴住居 S B23実測図

はみられない。溝は全体にめぐっていないので、竪穴住居が重複した周溝とみるのも困難である。住居内での区画を示すものとみなしておく。

S B24

北調査地区の北半部で検出した方形の竪穴住居である。回廊と傍房 S B01と重複している1辺5mを測る。ほぼ直角に折れる周溝が南と北とに残っている。床面ではわずかに段をなすベット状の遺構を検出したが、床面では炉跡は検出していない。また床面で5個の柱穴を検出したが、うち北東隅のものは掘りこみも浅く、補助的なものとみてよい。柱穴は径0.25m、深さ0.3m。柱間は竪穴住居1辺の2分の1の長さをもって配置されたものと推測される。かなり後世の削平が著しく、少量の土師器を出土しているが、量は少なく、図化できるものも少ない。



第36図 竪穴住居SB24実測図

S B25

北調査地区の中央東端で検出した弥生時代の竪穴式住居跡である。溜池による東法面によつて掘削されている。西側も後世に水田地造成のために掘削され S B01 の建物跡地山面で 14 cm の高低差となり、西法面を造り出している土手上に掘り込まれている。竪穴の規模は南北で 6.2 m を測るが、東西は不明である。現存する壁面からは長方形もしくは、隅丸長方形の竪穴住居跡と推定される。住居の中心部に焼土が検出されており炉跡とみてよいであろう。柱穴は南側で 2 個検出（柱間 2.3 m）しているが、北側では検出されなかった。（森 光晴）

土壤状遺構および土壙墓

北調査地区において検出した土壙は 14 基を数える（S K51～S K64）。これらには長方形（A型）と円形（B型）とがある。長方形には短辺が長辺の 1/2 以下のもの（I型）、長辺に対する短辺が 1/2 以上のもの（II型）とがあり、円形には円型のもの（I型）とやや楕円形に近いもの（II型）とがある。また土壙の床面プランをみると、箱型・箱築研・V字状などがある。A型・B型とも埋積土は、黒ボクを含む褐色土で、A I型では弥生式土器片をいずれも出土しているが、A II型では顯著な土質の差はないが出土遺物を伴わない。これは時期的差か、埋葬形態差か、機能的差が明らかでない。A I型、B II型は埋葬施設の可能性が高いものである。

S K51

A I型に属し、遺構は N16E16 に位置する。土壙内の埋積土は、黒褐色粘性土で黒ボクを混入する。遺跡の第 5 層にあたる。この付近の地質面は削平をうけているため第 5 層は認められない。床面は水平な箱築研である。東北東に長軸をもつ遺構中央部で弥生式土器片を数点出土したのみである。

S K52

A I型に属し、遺構は N12～E16 に位置する。土壙中最大である。埋積土は黒褐色粘性土である。土壙断面は箱型で床面は水平である。北北東に長軸をもつ。西壁面の南寄りから弥生式土器を、北北東の隅から壁面に沿って弥生式土器片が集中して出土した。

S K53

B II型に属し、遺構は N8～E16 に位置する。S D34 の溝と連結する浅い掘り込みとなっている。埋積土は茶褐色土と黒褐色粘土がブロック状に充填していた。床面より 2 個の柱穴が検出された。柱穴はいずれも床面をさらに掘り下げており、埋積土は黒褐色粘性土である。土壙以前の柱穴と推定される。遺構には布目の平瓦が一面に覆っており、布目瓦の上面には土器片がつぶれて密着して出土した。

S K54

B II型に属し、長軸断面では舟底形を呈する遺構で N12～E10 に位置する。B型では最大

規模である。床面は長軸部の壁面が傾斜した掘込み以外は垂直となっており、床面は水平である。

S K56

A II型に属し、N 4 E 12に位置する。埋積土は黒褐色粘性土である。遺構は黄褐色の粘土（シルト）の地山層に掘込まれている。床面は水平な箱形である。出土遺物はなかった。

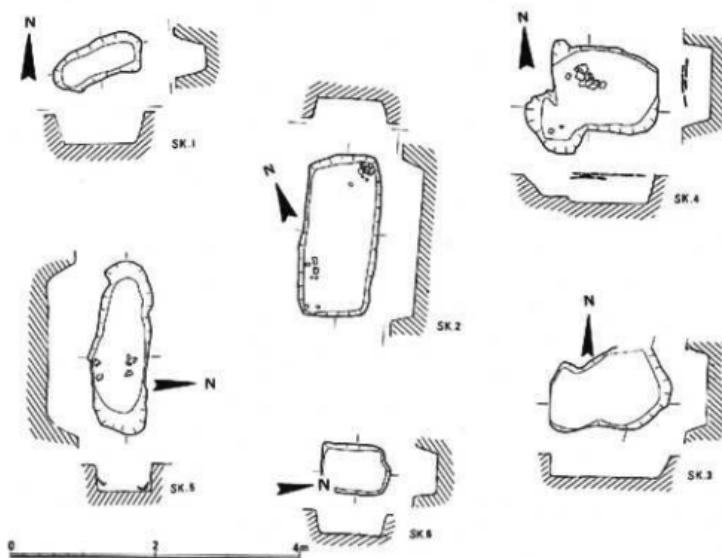
S K57

A II型に属し、S 12 E 12に位置する。土壤内の埋積土は黒褐色粘性土である。遺構断面はS K58の床面より13cm深い掘り込みとなっている。主軸方向は東西に取っており、北壁面中央部で二重に重複する小穴を検出した。遺物は出土していない。

S K58

A I型に属し、遺構はS 4 E 12に位置する。土壤内の埋積土はS K57の埋積土とほとんど差はないが、S K57が、S K58の床面を切り下げており、S K58がS K57より先行することがわかる。主軸方向は南北を指し、S K57と直交する位置にある。遺物は出土していない。

S K59



第37図 土壌実測図 I

A I型に属し、S 4 E 14に位置する。土壤内の埋積土はSK 57に類似する褐色粘性土である。床面は水平で南北方向に長軸をもつ。土壤中央部の西壁面寄りに標石とみられる長径25cmと20cm大の石塊（和泉砂岩）を検出した。北壁の東角にて坑穴1個を検出したが遺物は出土していない。

SK 60

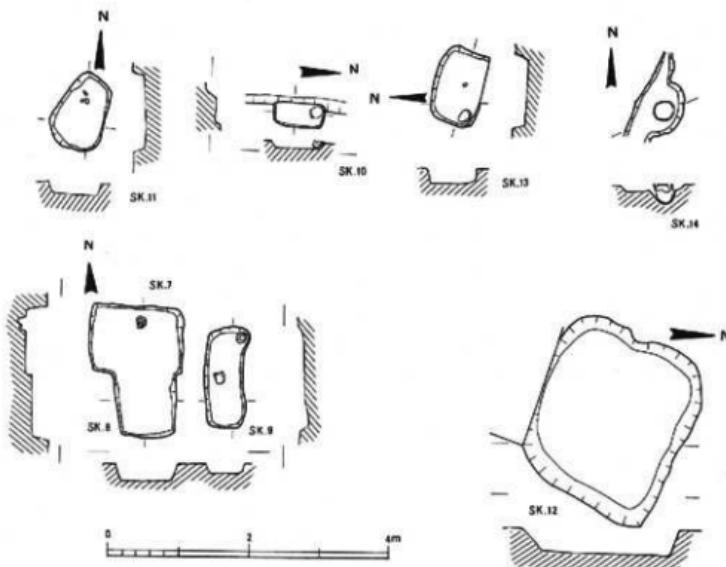
A I型に属し、N 6 E 26に位置する。埋積土は黒褐色土の黒ボク層である。掘立柱建物S B01の地山面より13cm高い位置に土壤の床面を水平につくりだし南北方向に長軸をもつ。造田過程で、SK 60の西壁面が削られている。造構の北壁面で土器が出土している。

SK 61

A I型に属し、N 24~W 0に位置する。埋積土は黒褐色土の黒ボク層である。床面はわずかに四面するが、断面は箱形である。北東の方向に長軸をもつが、東壁面に向かうに従って広がりを見せており。床面の中央部西壁寄りにおいて弥生式土器の底部破片が出土した。

SK 62

A II型に属し、N 38W 6に位置する。埋積土は黒褐色土の黒ボク層で充填した単一層序の土壤である。第4層で複弁の軒丸瓦をN 36W 6の位置で検出した。



第38図 土壌実測図II

第2表 土壌計測表

番号	平面形	主軸方向	検出時等の表面		床面長	床面短径	断面	遺物	備考
			長径	短径					
51	長方形	N 30° E	210	90	138~155	45	弥生土器片		
52	"	N 25° S 21°	350	200	230~110	31	土器片		
53	橢円形	W° E	300	180	170~110	32	布目瓦		一重被覆
54	長橢円形	E 10° - S	400	140	250~80	40	弥生土器片		
56	長方形	N 0° E	170	130	100~70	30	なし		
57	"	E 10° S	214	140	135~97	30	"		
58	"	N 5° E	280	160	187~87	25	"		
59	"	N 3° E	232	84	145~	55	"		標石あり
60	"	N 3° E	130	70	74~35	10	弥生土器片		
61	"	N 20° E	180	140	101~70	15	弥生土器片		
62	"	E 30° S	450	370	250~245	30	なし		
63	"	E 10° S	180	140	106~73	20	"		
64	円形	N	140	120	80~70	25	須恵器片		

SK63

A II型に属し、W 30 E 16に位置する。埋積土は2層に区分される。上層は赤褐色粘質土が下層面の黒ボクと水平に埋積し、土壤内へ上層の土壤が食い込んでいる。床面は水平で東西方向に長軸をもつ。土壤の南駆部はS D 36溝と共有している。床面中央部にこぶし大の石を検出した。出土遺物はない。

SK64

B II型に属する掘方を持つ土壤である。土壤はS D 31溝の最北端W 36 E 20位置にある。S D 31と切り合っており、西壁面は検出できなかった。埋積土は帶赤褐色の土壤と黒褐色粘質土が混入する円底の掘り込みである。土壤の中央部より須恵器の体部内へ口頭部が落ち込んだ状態で出土しており、内部主体を有する唯一の土壤である。(第54図の21参照)

SK65

N 18 E 4位置で検出した三和土による橢円形の粘土塊である。S B 03の柱穴と重複している。後世の造田時に天井部分は削平されたものとみられる。埋積土は第2層と共に共通した灰褐色である。

溝

遺跡は低い台地上にあり、北と西にやや傾斜するので、溝はいずれも西と北面で深さを増し北へ流れている。

遺跡の北にあった高畠池の堤防によって、北に流れる溝はS D 34以外は削平されている。高畠池の堤防では、堤防の外部面に廻らされた水路、S D 35とS D 36および回廊の柱穴が堤

防の下から検出されている。

S D31

E20からN16に南から北に流れる幅0.2mの浅い溝である。S B01の建物によって南面の上流部分は削平されている。溝にS B01の柱穴が掘られ、N18位置でS K51の土壤とN24E16でS B02の柱穴とN36E19位置ではS K56と重複している。遺構からは須恵器と弥生式土器が出土している。

S D32

南から北に流れる溝で、S D31より深く、溝幅も大きい。W4 E16のS B08では流れは冠水し、S B08の床面を浸食し、S K55では大きく溝幅を西に拡げている点で、S B08及びS K55は、S D 2 の溝に先行する遺構と推定される。N20E14でのS B02の柱穴及び掘り方は、溝を切る遺構で明らかに溝が先行している。

S D34

北調査地区の東半部を南から北へ流れる溝である。溝幅は0.6m、深さ0.3mほどで、ほぼ一定の深さで流れる。S B01の北側柱列の東第2と重複している。

S D35

高畠池の南側堤防にそって東より西方向に流れる溝である。溜池の外域の排水溝で黒褐色の埋土をなし、S D33の上端部を穿って流れている。この流路は発掘区の東全域に広がる溜池に沿い、さらに大きく右回している。

S D36

N24からN36の方向に流れる溝である。S D35と平行して走る。この方向は現在の水田地割に沿っている。S D35とS D36は共に、寺院が廢絶後に掘削された溝である。溝内には暗褐色の砂質土が堆積している。この二つの溝の走行および溝内の堆積土からすると溜池の拡張工事と高畠池の拡張工事が同時に実行されたものと考えられる。 (森 光晴)

注

発掘によって得られた遺構の面は2枚である。第1層は、戦後埋め立て(50~60cm)された岩礫、コンクリートに上層部は正土で整地された盛土層、第2層(14~20cm)は、層厚の耕作土層、第3層は、10cm内外の層厚で灰褐色を呈する有機物の混入が少なく、第4層は酸化鉄を含む疊土(羽土)層とS B 4 の建物周辺部に焼土層がみられ第5層は黒ボク層で遺物包含層、第6層は遺構検出層の地山である。第5層黒ボク層は、層厚も一定せず起伏の多い層序であるが上層の第4層とはやや水平性を保った層序となっていた。しかし建物跡、竪穴の掘り込み物分では一部で第4層の落ち込みがみられるものと第5層を欠いた第6層の遺構検出層となるW4からE面方向とであった。

第6層は、黄褐色粘土(シルト)を主体に一部シルトに和泉砂岩を含有して構成される地山に掘り込まれた遺構は種々複雑で、掘り込みの多くは柱穴と土括状遺構、竪穴式住居跡遺構及び南北に走るS D31、32、33、34の溝と発掘区の北端部分が東西に走るS D35、36の溝などであった。地山層の層序は、黄褐色粘土層の厚い(1~15cmのシルト)層で、下部層は和泉砂岩層が古地のベースとなっている。早くから黄褐色粘土は瓦土として利用されている。

V 遺 物

遺物は寺院関係のものとしては、瓦類が大部分を占めている。また寺院造宮前の堅穴住居・土壤・溝などからは、弥生式土器・須恵器・土師器などが出土した。以下、瓦類・土器類・石器の順にまとめて記すが、弥生式土器については造構ごとに記したところがある。

1 瓦 類

A 軒 丸 瓦

軒丸瓦は7種30個体出土した。各類の個体数および各部寸法は第3表に掲げたとおりである。

I型式は素弁10弁蓮華文軒丸瓦である(第39図・図版21の1)。突出した縁の小さな中房に1+6の蓮子を配している。蓮弁は幅がやや広く長めのもので、弁央に細い凸線の棱をつけた厚肉のもので強く反転する。外縁は幅広く、高い縁をなしており、外縁端に圓線が1本めぐらっている。瓦当の厚さは中央部が2.3cm、外縁部が3cmで一定していない。瓦当と丸瓦の接合には、丸瓦上端に近いところに櫛引の工具で刻みをつけてつないでいる。焼成は良好で硬質である。米住庵寺出土の軒丸瓦のうちで、最も古いものとみられる型式で、この軒丸瓦が創建時の瓦と考えられる。

II型式は、素弁11弁蓮華文軒丸瓦である(第39図・図版21の2)。前者と似ているが蓮弁の幅

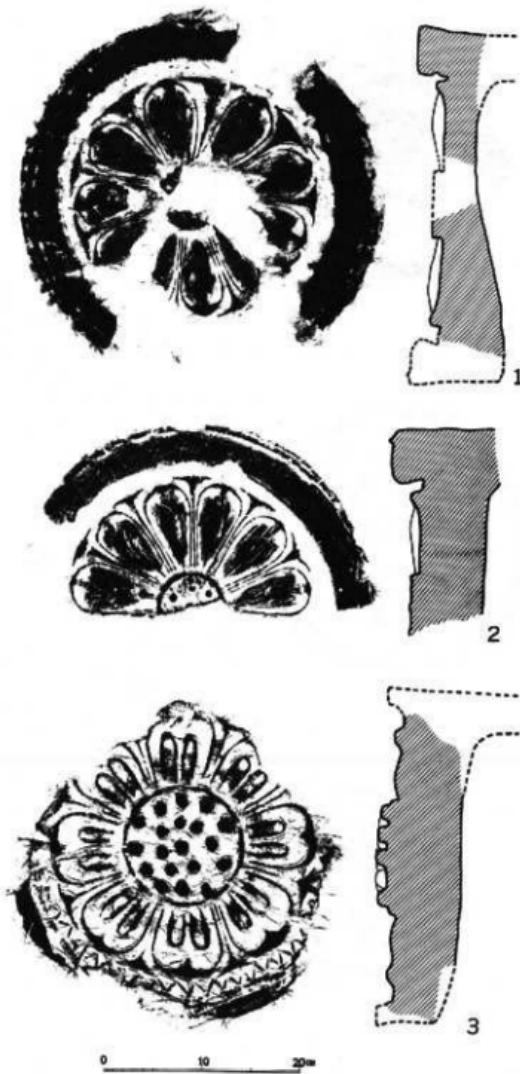
型 式	瓦 当 面										全 長	玉 縁 長	個 体 数			% 計			
	直 内 区		外 区		外 縁		内 縁		外 縁				第 2 次	第 3 次					
	中 房 径	蓮 子 數	弁 区 徑	弁 幅	弁 数	外 区 徑	幅	文 様	幅	高									
	徑	數	徑	幅	數	徑	幅	文 樣	幅	高									
I型式	188	33.5	1+6	96	25	S 10	30		26	16.5			4	1	16.6				
II型式	187	37	1+6	96	25	S 11	27.5		24	15			1	1	6.6				
III型式	155	61.5	1+7+11	72	37	F 8	18	11	8	9	LV54		2	1	10.0				
IV型式	141	35	1+4	61	37	F 4	23	13	11	5.5	LV20		4	1	16.6				
V型式	149								7.5	4			2		6.6				
VI型式	162	41		94	30	S 8	11.5		11	4			1		3.3				
VII型式	170	48	1+6	92	56	F 6	15						12		40.0				

S: 素弁 F: 複弁 L V: 線鋸齒文

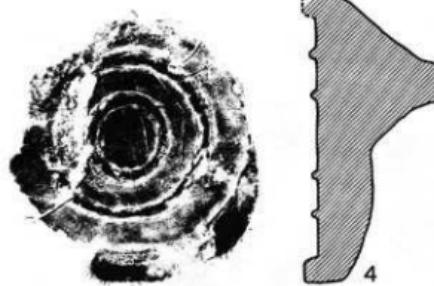
第3表 軒丸瓦分類表

がやや狭く、11弁のうち1弁だけ重弁を含んでいる。厚肉で強く反転している。中房は突出し、 $1+6$ の蓮子を配する。外区は幅広く、高い縁をついている。外縁の端に、I型式と同じく1本の圓線がある。瓦当の厚さは2.5cm。瓦当と丸瓦との接合は、瓦当上端部に近いところに櫛状の工具で、刻みをつけて接合している。焼成は良好なものが多いが、1個だけ悪いものがある。

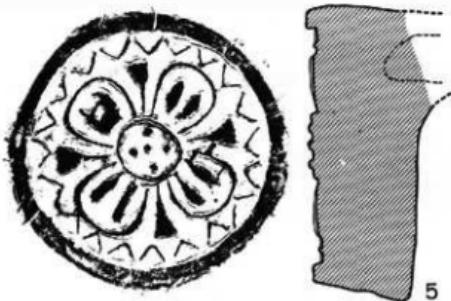
III型式は内区に複弁8弁蓮華文を配し、経の大きな中房に $1+7+11$ の蓮子をつけ、外区には線鋸歯文を配したものである（第39図3）。内区の蓮華文と外区の線鋸歯文との間には界線をつけず、内区の蓮弁に接するように線鋸歯文を密につけている。外縁は傾斜縁である。瓦当と丸瓦との接合は、溝を掘り丸瓦をはめこんでいる。焼成は良好である。



第39図 軒丸瓦実測図 I



4



5



6

0 10 20cm

第40図 軒丸瓦実測図II

IV型式は複弁4弁蓮華文軒丸瓦である（第40図5・6）。低い中房に1+4の蓮子を配し、そのまわりに十字状に4葉の複弁と間弁を配している。間弁の先端は幅広くなっている。外区内縁には線鋸歯文をつけ、外縁は素縁である。瓦当の厚さは5.8cmと部厚いもの（第40図5）と3.7cmほどのもの（第40図6）とがある。瓦当と丸瓦の接合は溝をほり、丸瓦の凸面先端を削り落として内面から接合粘土を押圧した痕跡が認められる。焼成は良好である。

V型式は、重圓文軒丸瓦である（第40図4）。瓦当面は平坦で、内区および外区に4~6mm幅の圓線を二重に配している。外縁は直立縁である。瓦当の裏面上部に溝をつけて丸瓦の先端を削らずにそのまま接合し、外面および内面から接合粘土をはりつけている。

VI型式は素弁8弁蓮華文軒丸瓦である（第41図7）。8弁蓮華文と低く突きだした中房からなるもので、中房の蓮子の有無は明らかでない。蓮弁は平坦で反転がなく、弁央に幅3~5mmの細い凸線の棱をはりつけている。間弁はない。外縁は直立縁である。瓦当と丸瓦の接合は、瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦の先端を削らずにそのままつけている。焼成はあま

りよくない。

Ⅵ型式は複弁6弁蓮華文軒丸瓦である（第41図8・9）。蓮弁は反転度が少なく、複子葉を配している。中房は平坦面に圓線で区画し、 $1+6$ の蓮子を配している。間弁は退化しており、各蓮弁の間に短くつけるだけである。外縁は低く、平坦縁である。接合は、溝をつけ丸瓦の先端を削らずにそのままつけ、丸瓦の外縁をヘラ削りしている。全体的につくりは粗雑で、焼成もよくない。南調査地区のB区から集中して出土している。

（西尾幸則）

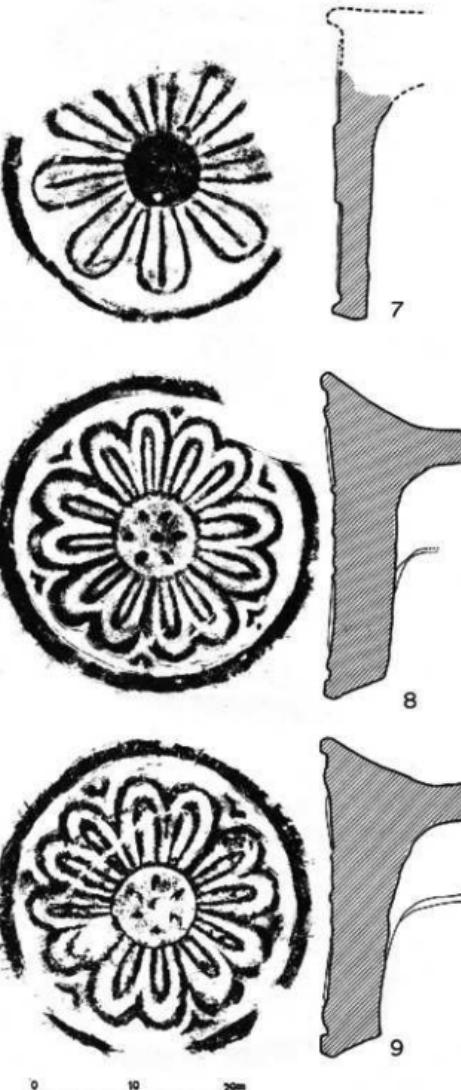
B 軒平瓦（第42図）

軒平瓦は30点出土した。これらは4型式にわかれれる。

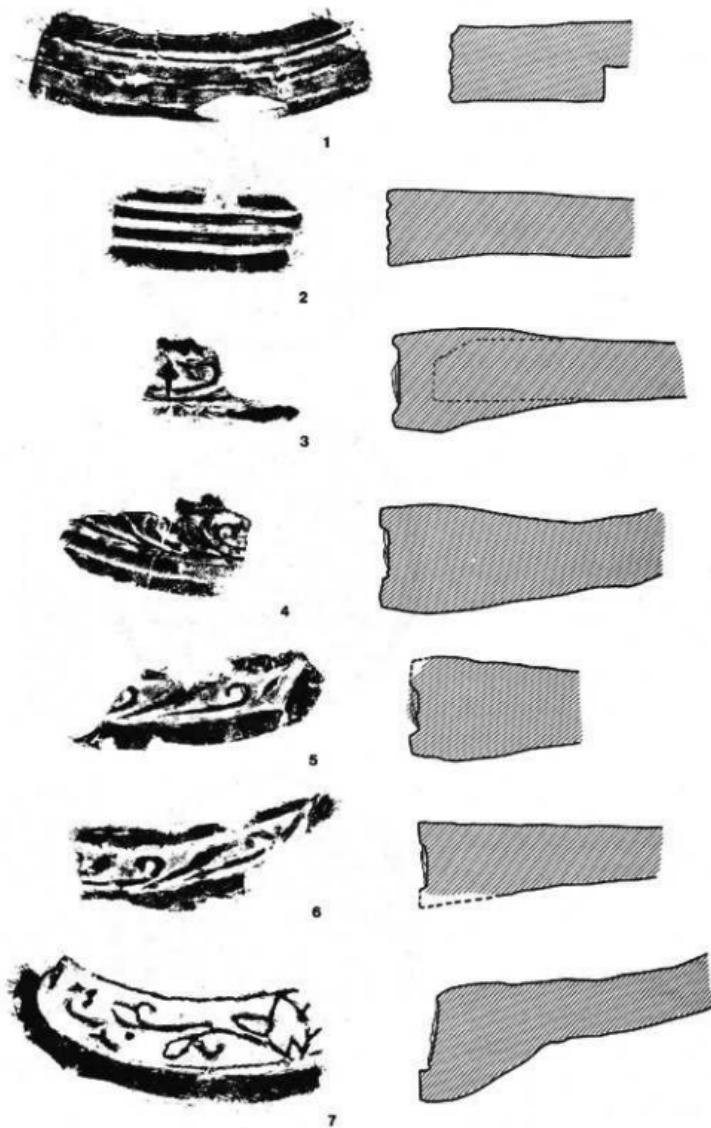
I型式は3重弧文軒平瓦である。顎の形態は段顎をなしている。弧文は範ではなく、ヘラによってつけている。平瓦広端凸面に粘土をはって瓦当をつくる（第42図1）。

II型式は4重弧文軒平瓦である。顎の形態は直線顎からなる。I型式と同じくヘラで文様をつけている（第42図2）。

III型式は均整唐草文軒平瓦である。上下の外区と脇区とを区画する界線のないものである。文様は主葉と第1支葉が反転せずに連続して表現されている。中心飾は菱形状をなし、下から派生する。顎



第41図 軒丸瓦実測図III



第42図 軒瓦実測図

	瓦 当 面										全 長	個 体 数			% 計
	上 弦 幅	弧 深	下 弦 幅	厚	内 区 厚	内 区 文 様	上 外 区 厚	上 外 区 文 様	下 外 区 厚	下 外 区 文 様		脇 幅	脇 区 文 様	文 様 の 深 さ	
I 型式				42		G 3							2		3 16.6
II 型式				38		G 4							2		5 33.3
III 型式				44	19	KK	12		13		12		3.5		8 44.4
IV 型式				54	35	KK	5		14		11.5		3		1 5.5

G : 重弧文

KK : 均整唐草文

第4表 軽平瓦分類表

の形態は曲線顎と直線顎がある。平瓦との接合は、瓦当裏面に平瓦の広端部をさしこんでついている（第42図3～5）。

IV型式の瓦当文様はかなり崩れているが、菱形状の中心飾と唐草文が3回反転する均整唐草文である。顎は曲線顎をなしている（第42図7）。（西尾幸則・池田学）

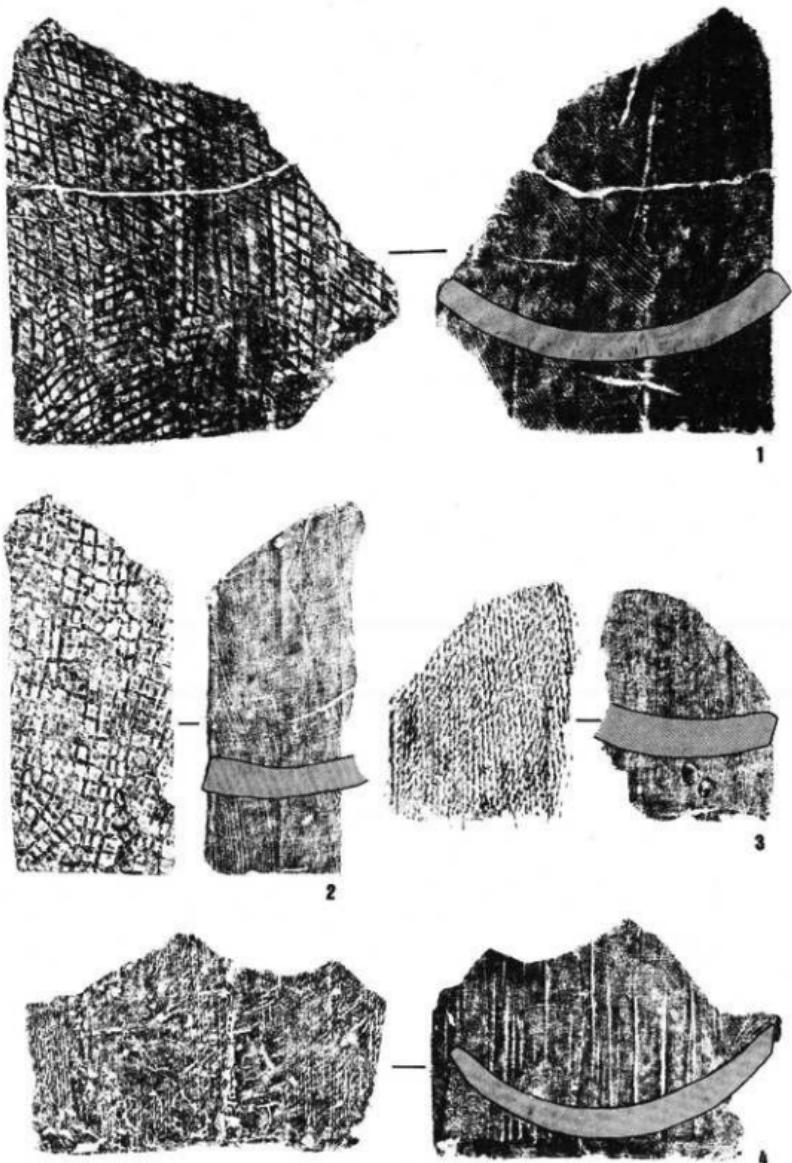
C 九 瓦（第45図）

丸瓦には玉縁丸瓦と行基丸瓦がある。第一次成形は、円筒状の成形台に粘土板を巻きつけて成形を行う。第二次成形で胎上をよく叩きしめながら丸瓦円筒を製作し、それを半截する手法を用いている。玉縁丸瓦は、粘土板を巻きつける段階で、土縁部と丸瓦部を接合しており、行基丸瓦とともに、無彫刻叩きを呈する。丸瓦凸面部をヘラ削りするものもある。丸瓦凹面部は、布目が大半であるが、行基丸瓦のなかには弧状の繩目痕跡を残すものもある。なお、行基丸瓦の厚さは、幅狭になるほど薄くなる傾向にある。

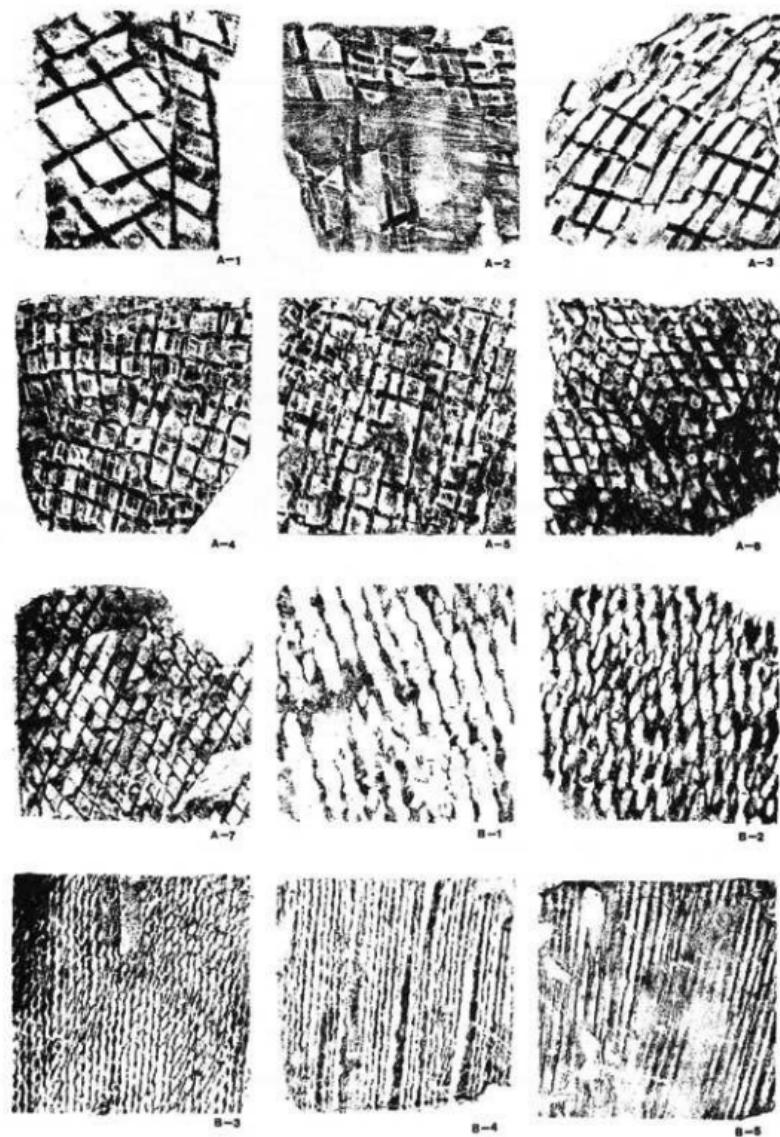
D 平 瓦（第43・44図）

平瓦の第一次成形は、大半が板状に切断した粘土を桶状の成形台にまきつけて製作した桶巻作りによるものであるが、平瓦凸面に布目痕を残す1枚作りによるものもみられる。第二次成形の叩きしめには、叩き板に格子目・斜格子を彫刻するもの（A-1～7）、無彫刻板による叩き、太繩・細繩を板に巻きつけたもの（B-1～5）がある。また平面凸面に粗いカキ目を施したものもある。第二次調整は多い順にあげると、細繩叩き目（138個体）、格子叩き目（20個体）、斜格子叩き目（19個体）、無彫刻の叩き目（10個体）、太繩叩き目（7個体）、カキ目調整（6個体）である。凹面にはいずれも布目がある。焼成は、青灰色を示し硬質なものと、焼きのあまい茶褐色のものとがある。格子叩き目に硬質のものが多い。

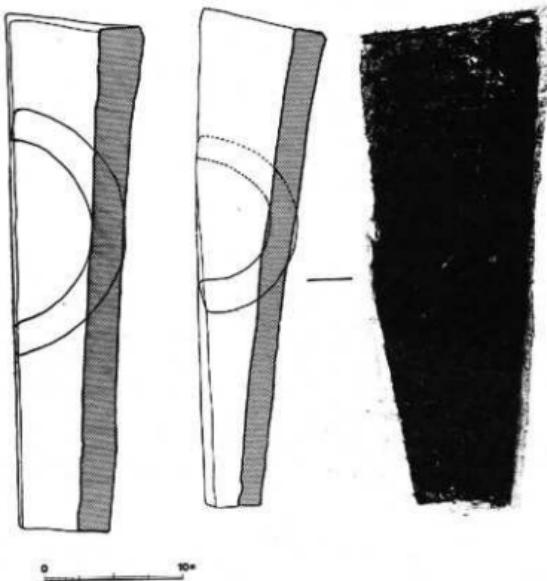
（西尾幸則・松村淳・栗田茂敏）



第43図 平 瓦



第44図 平瓦印き目



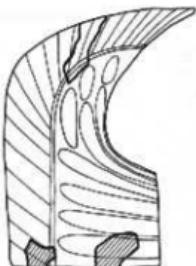
第45図 九瓦実測図

E 鶴尾

2個体の鶴尾破片が出土した。1つは鶴尾の腹部に近い位置の下端部の破片で、鰯の一部と凸帯部分にあたるものである。鰯は段状をなしており、外面はヘラケズリして調整する。たて方向の凸帯もヘラケズリして調整する。腹部側の部分には下部中央につけられる弧状の刺りかきがある。腹部はナデで調整しているが、弧状の刺りかきの部分は丁寧にヘラケズリしている。器壁の厚さは2cmほどで、薄手のものである。淡灰色で焼成はあまり。

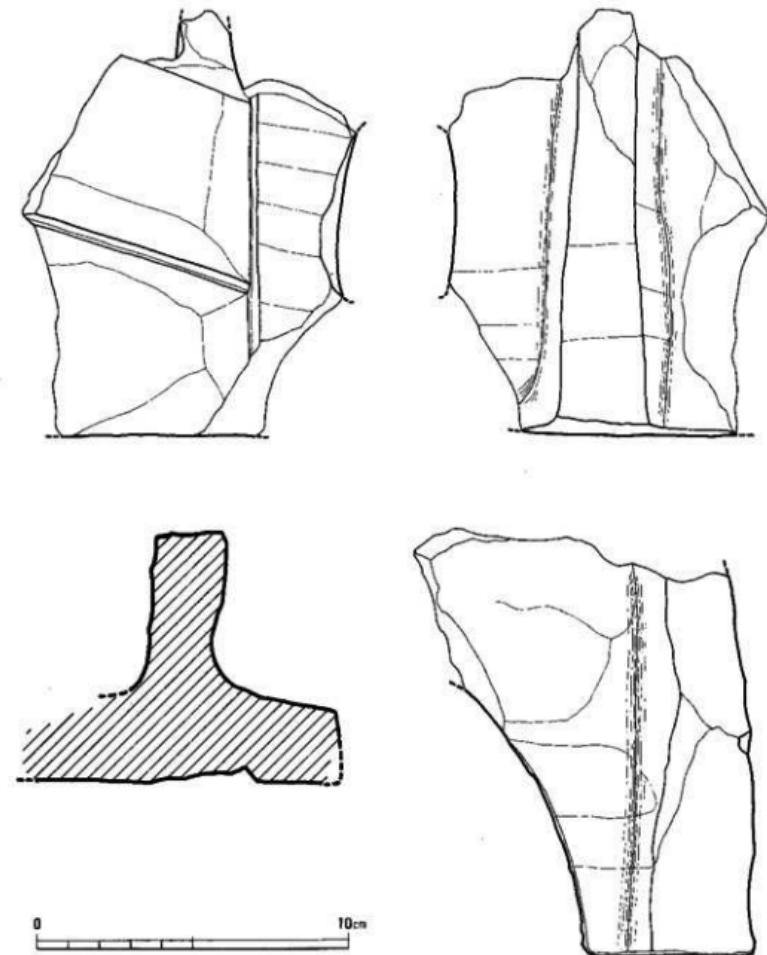
他の1個体は鰯の先端に比較的近い部分のものと頭部に近い部分の下端部とみられるものである。器壁の厚さ・色調・焼成などの特徴から同一個体とみられるものである。

鰯部の破片は、前者とは異なり、段をなさず、沈線で表現するものである。鰯部の最大幅は11cmで、だいに狭くなる。内面はナデているだけであるが、外面はヘラケズリする。器

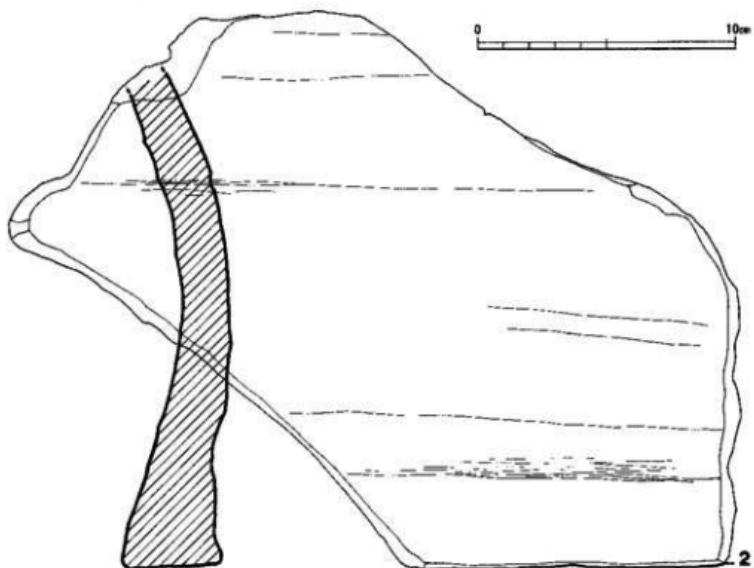
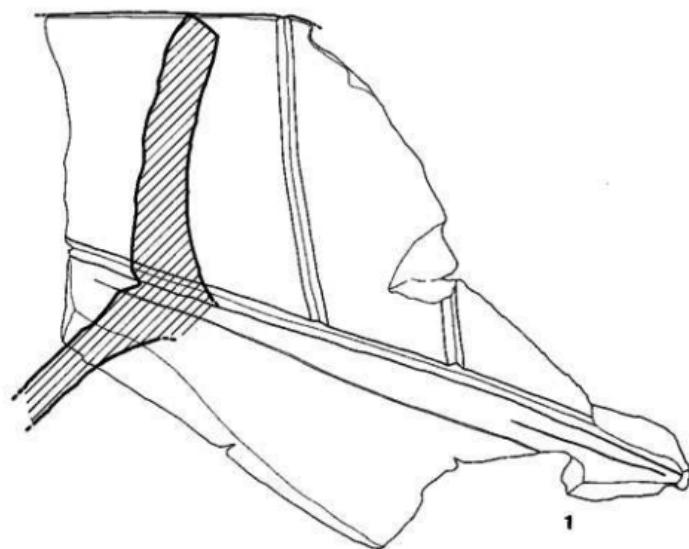


第46図 鶴尾破片想定位置

壁は2cmほどの厚さである。また下端部の破片は、下端の厚さが4cmで、ほかは薄く2cmほどで、ゆるく内窓する形態をなす破片である。内面の調整はなでただけで、指痕を一部と認めているところがある。外面調整は表面の遺存状態が悪く明らかでない。淡灰色で焼成があまい。以上の2個体の鶴尾では、鎌が段状をなす前者の方が先行して製作されたものとみられる。それぞれの破片の想定位置は第46図に図示したとおりである。 (小笠原好彦)



第47図 鶴尾実測図1



第48図 鳥尾実測図II

2 土器類

A 須恵器

a 第2次調査

蓋 A類 (第49図1~2)

1・2は天井部外面は扁平で、三分の二をヘラ削りして仕上げている。天井部と口縁部の境界は不明瞭である。口縁部はやや内寄し、端部は丸く仕上げられ口縁部外面から口縁部内面にかけて横ナデを施している。天井部内面には、粘土紐で巻きあげた明瞭な段（円凸）が認められる。胎土には0.5mm~3mm大の砂粒石が含まれている。1の口経は12.85cm、2は12.25cm。

蓋 B類 (第49図3~13)

3と4は天井部に棱があり、わずかにふくらむ形態を呈している。中央部には宝珠形のつまみを付す。口縁部は短く、下方向に折り曲げ、僅かに外反し丸くしている。5~8は、ふくらみが消え扁平で、9~13の天井部は逆屈曲（凹状）になり、口縁端部は、より短く下方に向て折り曲げて宝珠形のつまみを付している。外面は回転ヘラ削りを施し、口縁部および内面調整は、横ナデおよび不定方向のナデを施し丁寧に仕上げている。

杯 A類 (第49図14~19)

口縁部のたちあがりは、低く、端部は丸くおさめている。受部は、水平または、やや上向きにのび、受部上面に浅く凹線がある。底部内面から口縁。受部上面には横ナデがあり、受部下面から底部にかけては粗く仕上げている。14と15の体部と底部の境は、ヘラ削りによる明確な段で区分されている。このヘラ削りの範囲は、14が%以下、15は%で、底部中央が尖っている。16~19は全体に浅く扁平な作である。ロクロ回転は、14が右廻り、15が左廻りである。

杯 B類 (第49図20・21)

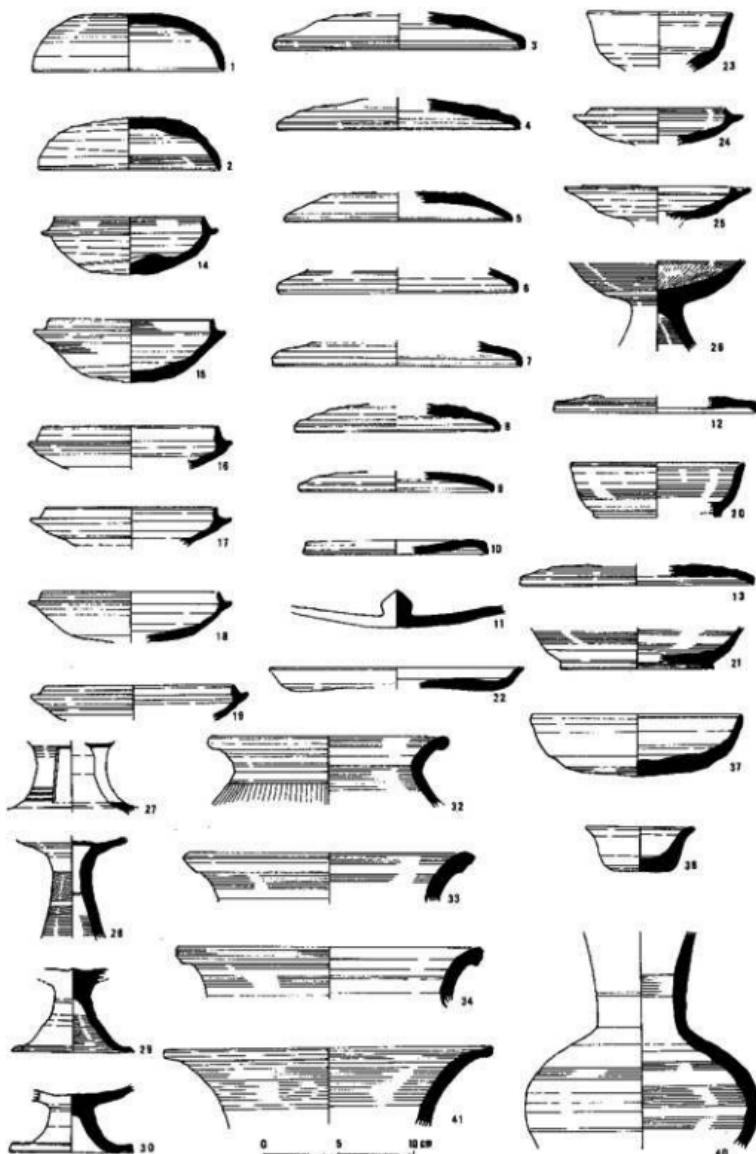
直立気味なハの字形の高台を伴い、下面には2条の稜（凹状）がある。口縁部は、外反し端部は丸く仕上げる。21はとくに強く外反している。体部外面から口縁及び内面の底部にかけて丁寧な横ナデを施す。21の底部は、横ナデしている。

杯 C類 (第49図38)

口縁部は外反し、口縁端部はやや外上方向に延び、丸くおさめている。体部と底部との境は屈曲し稜を呈する。底部全面にスリ跡の痕跡を残している。口縁部から内面底部に横ナデを施している。

高杯 (第49図23~31)

23は有蓋高杯であり杯部口縁の立ち上がりは外上方向に外反し、口縁部外面より内面にかけて丁寧な横ナデを施している。脚部は欠失している。24と25は有蓋高杯の杯部である。立



第49図 須恵器実測図 I

ち上がりは低くやや内傾しており、端部は尖り、受部は水平である。全体に浅く扁平であり受部より内面にかけてナデが施されている。26~31は底部及び脚部であり全体に脚が短くなり、27のみ二方向一段透してある。基部は細く裾部に至って大きく広がる。脚端部は稜をなし丸く仕上げているもの(29, 31)と端部がやや上方にもち上げられ直立におさめられる(30)ものとがある。

皿 (第49図 22)

外傾度が大きく、短かい体部をもち断面方形の端部をなす。底部と体部との境は屈曲して明瞭な稜をなす。底部はヘラ削りしたあと、ナデ調整しており、ほかは横ナデしている。

甕A類 (第49図 32~34)

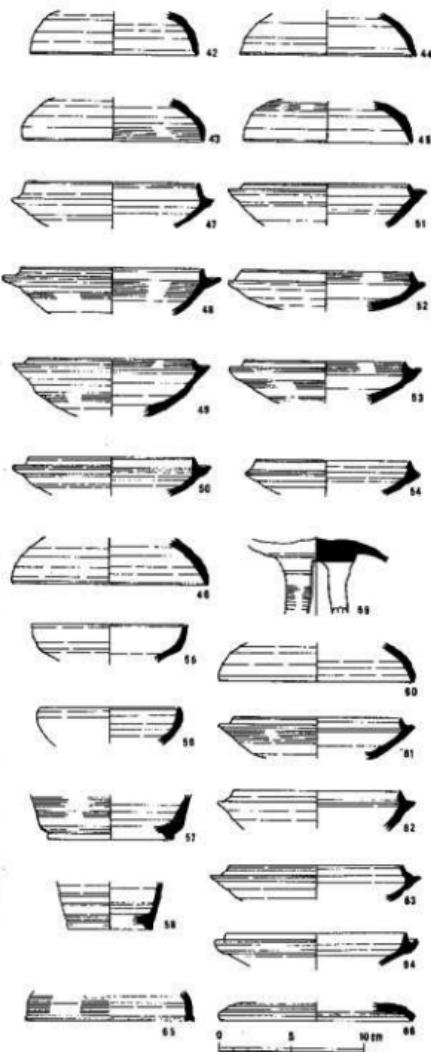
中型の甕である。頭部は短く口縁部は外反し口端外面に丸くふくれた帯をめぐらすもの(32)、口端外面に帯状の段がつくもの(33)、その端部にさらに凸出の稜をなすもの(34)とがある。

甕B類

大型の甕である。口頭部は短く、立ち上りは直口で口縁端部に至って僅かに外上方向に尖った稜をなす。口縁部直下に2対の把手をつける。外面には平行叩きを施し、頭部外面から口縁部および頭部内面に横ナデを施し、体部内面に同心円文の叩きを施している。

提瓶

体部側面には耳を付しているが退化している。先端部の鉤状屈曲は形式化している。体部の前背画面ともカキ目調整を



第50図 須恵器実測図II

施し仕上げている。

瓶（第49図35）

体部より直立気味に外反しており底部端面にはやや内弯する台を貼付している。底面において、透しの端面が考えられる。体部外面には、机い範調整を施す。

長頸壺（第49図40）

頸部は細長く上方へ外反しながらびる、肩部と胴部との境に2条の凹線をめぐらす。体部は範で調整し頸部外面から内面にかけて横ナデしている。

広口壺（第49図41）

口頸部は直立気味に外反し端部は上内方へ屈曲させて稜をなすものである。口縁部には丁寧な横ナデを施している。以上のほかに、第3次調査地区のB・D地区でも壺蓋（第50図42～46、60・66）、壺A類（第50図47～54、61～64）、壺B類（第50図57・58）、高壺（第50図55・56・59）などが出土している。

（西尾幸則）

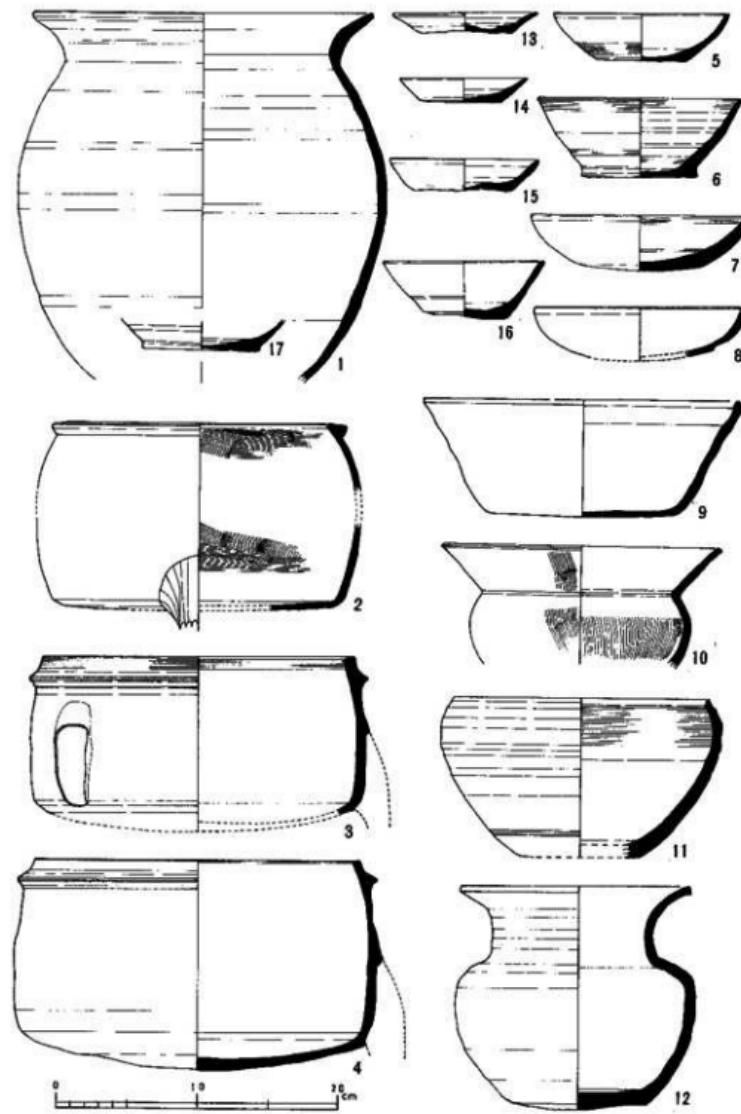
B 土師器

出土数は少なく、壺形土器1・2は、鉢形土器10・11、壺形土器7・8、皿形土器13～15、壺形土器5・6・16・17がある。本土器の内壺形土器にみられる2の長頸形土器は、胴部が扁球形をなし、扁平球の胴部高に対して、口頸部の高さは2倍の器高を取る漏斗状の口頸部となるものが多い。内部は成形時の指頭痕を残している。器表面は丁寧な箠磨研となっている。底部は乳頭状の平底となっている。胎土は精成され焼成もよい、色調は器表面が赤褐色であり、内壁部は黒褐色で描目整形をなすものもある。長頸の壺形土器以外の土器は、いずれも胎土は精成されているが、器の成形はやや雑なつくりとなっている。壺、甕、壺等には、あきらかにロクロによる横ナデ痕を残すものがある。壺の底部では、範切り、糸切底等があり時代差が明らかに見られる。

土師質土器（2・3・4）

上鼎は4個体検出されたが、いずれも手づくりね製である。鍋部の外面には粘土紐の積みあげ成形の様相を呈する凹凸が頗著に残り、無数の指圧痕が残る他に縦ナデの櫛毛目が部分的に見られる。鍋部の内部は、横ナデによる刷毛目仕上げが入念になされている。脚部では指圧痕が残り、掘りしめによる成形の様相がうかがえる。鍋部と脚部はそれぞれ別個につくられた後、はりつけたものである。底部はいずれも平底で器肉は薄くなっている。底部の曲面に沿って平行の叩きしきめがいずれも見られる。鍋部及び脚部の外側には煤が付着し、また脚部の内側はよく2次焼成され煤は付着していない。鍋部の内部には、いくらか有機物の付着物が見られるものがある。鼎部は先足が正三角形位置になるように配置され、脚部の取り付け位置は底部の曲面部に近くはりつけられている。

（森光晴）



第51図 土師器実測図

C 弥生式土器

S B09山土上器

壺型土器

複合口縁を有する壺形土器には短い頸部をつくるI式（1・3・7・8・15～19）と頸部を持たないII式（6・9・12）がある。I式では球形ないし卵形の胴部より内弯しながらすばめられて頸部をつくり大きくくびれて外反したのち、内弯気味に漏斗状の口縁部をつくる。この口縁端部の上面に、環状の内傾した円筒帯をはりつけて複合（重層）の口縁部をもつものをさす。II式は口縁部のつくりはI式と同様の工程と手法による形式の壺形土器であるが、わずかに頸部に直立（若干外反）するところにII式の特色がある。底部は欠失しI、II式ともに不明であるが、いずれも平底であるとみている。

頸部で大きくくびれて外反したのち、口縁上部で内弯して立ち上がり腕状の口縁を持つもの（9・10）、外反して漏斗状をなすものとがある（4・23）。前者の口縁部は内外面とも横ナデ調整を行っている。13、14では口頸部を櫛描きによる調整を施している。頸部内面に指頭痕を残す14とこれを櫛の横ナデによる13がある。

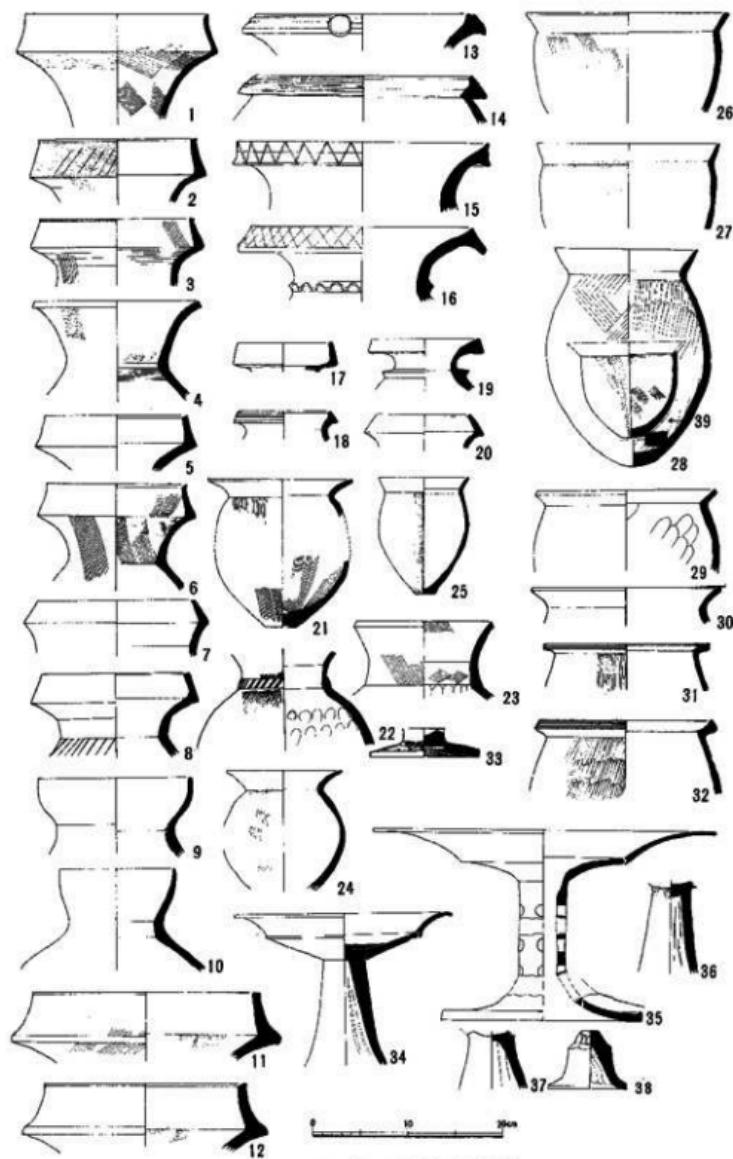
16～23の土器はいずれも口唇部を肥厚させたのち、口唇端面に範による凹線を施すものと、鋸歯文20、斜格子目文21を施したものである。頸部に断面三角突帯を付するもの16・19と、16では突帯頂を指頭変化させた汲状帶としている。この種の土器は胎土及び焼成もよく器面はていねいな範磨きによる仕上げとなっている。22は頸部の片であるが器面は櫛描き整形をした後範磨きを施している。頸部に断面台状の突帯を付け突帯面上を櫛状施文による押圧文がある。器腹内面に無数の指頭痕がある。

24・25は朝顔型のII縁をもつ土器で共に頸部で棱をなす。器面は入念な櫛描きによる整形を施したあと、範磨きを行っている。口縁部は内外面を横ナデしている。口唇端は丸くおさめている。器肉は口唇部と胴で薄くなり、胴部より底部に向って肥厚しながら平底となる。胎土に0.2～0.3mmの粗粒を無数に含むが器表面は化粧土があり、粗粒は見られない。器内面の色調は黄褐色と灰色を呈するものとがある。器表面の色調はいずれもあざやかな赤褐色で底面に黒斑がある。

39は鉢型土器で、口縁部は欠失している。器肉は不均一であるが頸部より底部に向ってゆっくり肥厚して平底の底部となる。器面は内外面共に斜向の櫛描きによる整形である。内部の櫛目は器肉の不調整による波打ちがみられる。色調は黄褐色で焼成は悪い。

26・27も鉢型土器であろう。底部を欠失しているため不明である。口縁部はくの字状でくびれ部に棱をなしている。口縁部と内面を横ナデ調整を施している。器外面は櫛描き整形で仕上げている。28では煤が付着している。器肉は一定でない壺形の土器である。

壺用蓋型土器33がある、つまみ部分をわずか欠失しているが、径11.8cmの円形の土器でつまみ部分はあげ底状の平底を呈する開いた笠形である。内外面を櫛描き調整がなされている。



第52図 弥生式土器実測図1

彫型土器

くの字にくびれた頸部から開く口縁部は急角度をもって立ち上り、また頸部から胴部へかけては、肩に張りをもたないで僅かにふくらみ口縁部の径が胴部最大径よりわずかに少ないもので6例がみられる。

図31・32はともに体部の内側を範削りと範磨研を行い、外側を刷毛で調整し胎土に粗い石英・長石などの粒子を多く含んでいる。29では口唇部は水平に切り、30ではまるく、32は下方に向って次第に器肉を厚くし、丸底に近い平底である。31では30同様に器肉を厚くし、くびれて平底になる。共に器面の外側全面に煤の付着がみられる。胴部の最大径の位置は、30では器高の2分の1より底部に近く、32では器高の2分の1と異っている。

29・36は共に体部の内側は指頭によるナデ仕上げで、外側を刷毛で調整し、胎土に粗い粒子を多量に含む。口頭部の遺物であり不明である。

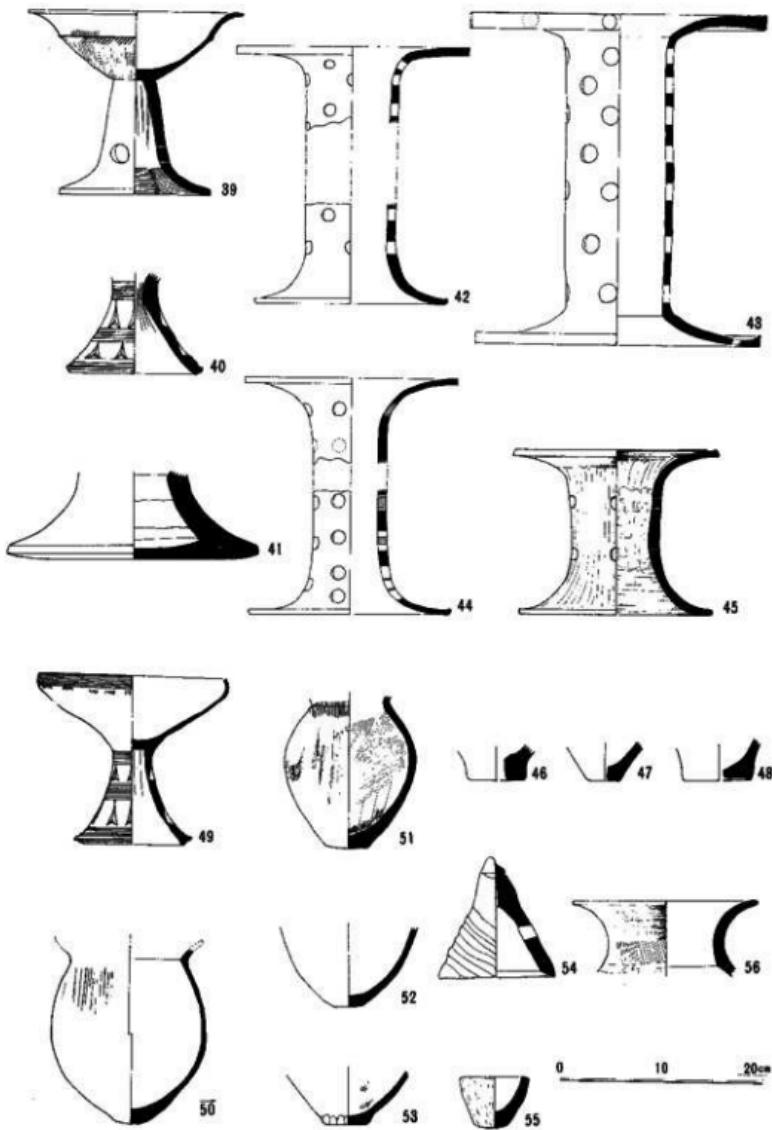
31・32は外窩する短かい口縁部をもち口唇部は跳ね上げがある。端面には凹線が施されている。外面の頸部下に範による磨研をていねいに施す。胎土には粗い砂粒を含む。

器台型土器

4個出土している。上縁・下縁が広がり胴部がくびれて柱状となる特殊な形の土器である。柱状の胴部には数段の円形の透孔がうがたれている。上縁端面には円形浮文をはりつけるもの、波状文・山形文等をつくるものがある。胴部の内面には無数の指頭痕が残る程度に粗な刷毛調整が施されている。その他の器面は丁寧な範磨きがなされている。胴部から裾部や脚部にかけては縱方向に磨研されている。本器は大空遺跡・上東遺跡・安国寺遺跡に比べて特色をもつ器種とみられる。

43は4段と3段の円孔を5方向にうがっている。円柱部の内面は指頭痕を残した荒いナデ仕上げとなっている。大きく開かれた裾部の端部はこころもち立ち上がり端面をなす。端面にはわずかに疑凹線を1条めぐらしている。円柱状の胴部は中央部分がふくらみをもつ。上縁は大きくくびれて内窓して水平状に開いている。上縁端は胴部に平行した端面をつくり範磨研を丁寧に行った後に円形の浮文をはり付けている。浮文部分には斜向に範先により脱落防止の範傷が施されている。柱状胴部の内面以外は丁寧な範仕上げとなっている。円形の透孔は最終行程で施され、直径1.5cm。

42は1より小型の土器で、胴部内面は棒状調整具による斜方向の形成がなされている。下縁の径は上縁径より小さいつくりとなっている。裾部より胴部へ大きく内窓して立ち上がり胴部でこころもち外窓したのち大きくくびれて水平に開いた外縁となっている。外縁端面は垂直に範切りされ丁寧な磨研となっている。胴以外は37同様の仕上りである。透孔も同様であるが、最上段の円孔はくびれ部に施されている。44の下縁部から胴部への立ち上がりや、仕上げは類似しているが上縁部は胴部より大きく内窓しながらくびれて断面朝顔状の上縁となっている。円形透孔は現段数5段と6段が4走向に透孔されている。45は鼓形器台で2段



第53図 弥生式土器実測図II

に4走向に円形透孔をもつ土器で、下縁部より大きく内窓して立ち上がり直立した胴部をつくり再度大きくくびれた後内窓しながら大きく開いた上縁部となっている。上縁端面は内傾している。胴部内面は共通した仕上がりとなっている。その他の器面も窓ナデ仕上げであるが上縁部の内外面は横ナデ仕上げとなっている。器肉は胴部で肥厚している。

高杯形土器

土器は5形態に分類される。34は脚部が大きく開き、坏部が皿状に大きく開くもの。36~38は脚部の裾部が欠失して不明であるが、39の脚部と類似するものと思われる。口縁部が曲折して立ち上がるものの、脚部が柱状胴部をなし円形透孔のもの、坏部は皿状に大きく開き脚部に円形透孔をうがつもの35等多彩である。それだけに器形への工程も種々である。41にみる脚部の工程、36・37にみる円柱状脚部の閉鎖工程、34・38の坏部の台状作り、36・39・37の口縁部の皿状受部に接合する輪積工程となっている。仕上げは施磨研によるもの34~39と外面を櫛描きによる37がある。40・49は時期を異にする土器で二等辺三角形の不透孔を2段に施し数条の凹線で区画している。裾部に窓による凹線がみられる。器面を丁寧に磨研したのちにそれぞれ施文されている。脚部のくびれ部の内壁面には整形時の加圧痕が縱方向に残っている。

支脚形土器

54は器肉の厚い中空の土器である。底部は水平に窓切りにより整えられている。上縁部は椅子状に整形されている。器物の脱落を防ぐ窓面の立ち上がりがある。器面には指頭痕があり手ごねによる土器である。

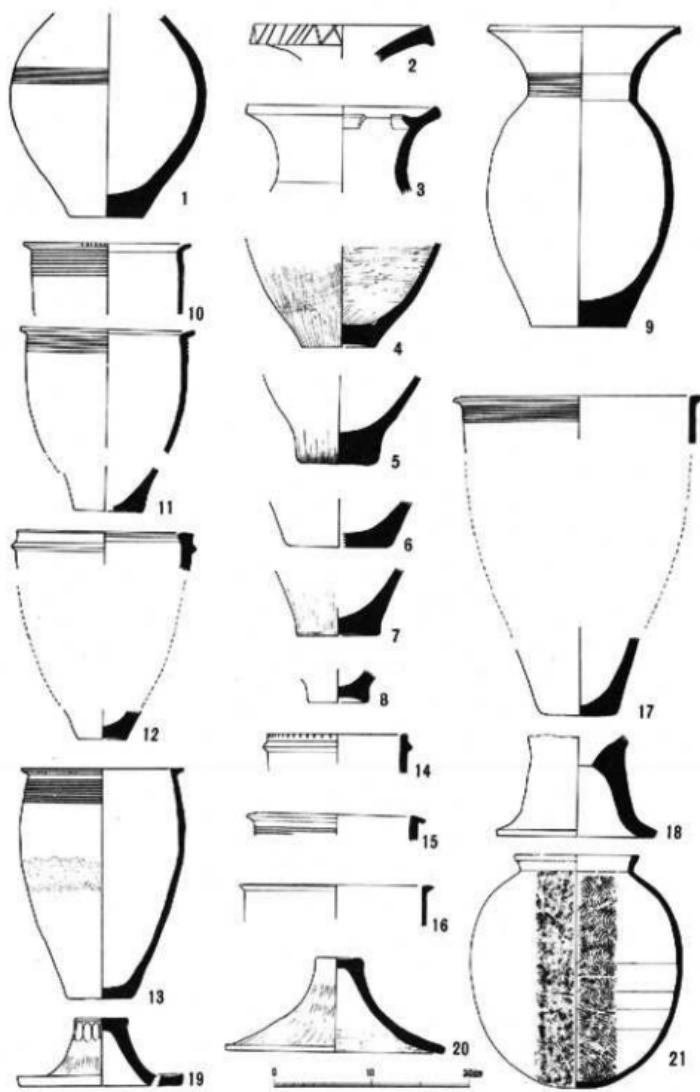
S K51出土土器

弥生式土器の細片を3、4点出土したがいずれも土器の腹部と推定される。器形等の把握は困難である。これらは埋積土と混入した細片とも考えられる。

斐形土器10は口縁部の破片であり口縁は逆L字状口縁であるが、わずかに内傾している。口唇端は円くおさめており、口縁部のくびれ部の下に櫛歯状で等間隔に7条の凹線が施文されている。胎土に粗粒を少量含むが焼成はよく灰褐色をなしている。器肉は一定しており腹部の膜ばりは見られない。13は平底の底部からゆるやかに外反しながら立ち上がり、立ち上がるにつれ器肉もやや薄くなっている。外面は剥落しているが内面は入念な窓による磨研が一部に見られる。胎土、焼成等1の土器と共にしている。両者の復元値は口径18cm器高30cm内外と推定される。

S K52出土土器

出土遺物は1、2の土器底部と破片である。4は底部がややレンズ状に上げ底である。底部より大きく外反した後、内窓しながら胴張りのある球形もしくは卵形に近い泰形土器の底部である。胎土に粗粒(石英)を含む、器面の外側を0.2~0.3mmの櫛歯で形成したのち、窓で磨研を縱方向に底部より胴部に向かって仕上げている。内面は同器具により、底部より胴部



第54図 球生式土器実測図III

須恵器

にかけて入念に成形をし、横方向に竈による磨研仕上げとなっている。器肉は底部に向って厚くなる。5は胎土に粗い砂粒を多量に含み、器肉は下に向けて厚くなりながらかな曲線を描き底部で大きくくびれて肥厚な平底となっている。器面は内外共に剥落が著しく、わずか外側の基底部付近に1.4~1.5cm幅の成形痕を残している。壺形土器の底部である。

壺形土器11は、口縁部で頸部の外側に稜をもつてくの字状にくびれ、口縁部が直線状に開き端部は竈で押して仕上げている。頸部から腹部にかけてわずかに胴張りをもたせた後は、ながらかな曲線を引きくびれを持たないで平底へ至る。頸部には4条の凹線が施されている。器肉は口唇部が薄く頸部から胴部にかけては平均している。口径18.4cm、10は11と同様に頸部でくの字にくびれ外側で棱をなし、内窓したのち端部を持ち上げて円く仕上げた口縁部が開き、口唇端部に刻目文を施している。頸部に8条の凹線が施文されている。器肉は一定している。胎土に粗粒を若干含んでいる。焼成は11、10共によい。口径17.5cmである。

S K54出土土器

壺形土器1は壺形土器の頸部である。胴部より大きく内窓したのち、直立した頸部である、くびれ部には2条の穴帯をめぐらし、断面三角帯に等間隔で押ぼ文を施している。

壺形土器15、16は逆L字口縁をさす細片である。15は頸部に凹線が施されているが、16ではみられない。15、16とも竈磨研の仕上げとなっている。色調は15はチョコレート色、16は茶褐色で器肉も15より薄い仕上がりとなっている。口径16cmと18cmである。

家用蓋形土器20は一部欠失しているが、復元可能な土器である。器高9.9cm、直径23.3cmで大きく開いた笠形で、つまみ部分は突出した上部庇ふうにつくられている。口縁部からつまみまでは曲線を描いて立ち上っている。内部は竈による横方向に研磨され器の外面は櫛による成形が残る程度に竈による磨研が施されている。外面には煤が付着している。19は20と異なるつまみ部分をつくり出している。指先のかかりの部分に指頭による若干の凹面をつくり出した平底である。口縁部は平たく裾をひく形につくられ端部にはそり上がりがある。直径17cm内外、器高7cmで仕上がりは20と同様である。つまみ部分に煤が付着している。

器台形土器18は上半分が欠失しており全貌は不明である。脚部はわずかに裾をひく形につくられ、ゆるやかに内窓しながら立ち上がり、くびれて受け部をつくり外窓している。器肉は厚く、外面に立ち上がりをやわらげる張り付け帶がある。内窓にはくびれ部に舌状帶の張り付けをおこなっている。器面の仕上げは竈による磨研がみられる。内部調整は剥落により不明である。脚部直径は17.2cm、受け部までの器高は7.5cmである。

S K56出土土器

壺形土器13は逆L字形に強く曲折した口縁部をもち口縁端面はこころもち凹面したのち口唇端をへら仕上げによって円くおさめている。頸部からわずかに胴張りをつくりだしたのち、ながらかな曲線をもって平底の底部となる。胎土には粗粒を含むが器肉は平均している。頸部に9条の櫛描による凹線が施されて器面は竈仕上げとなっている。口縁部のくびれ部分と

器腹部に煤が付着している。内面は剥落している。口径14.5cm、高さ24cm、底7cm、腹径17.5cmである。

S K61出土土器

壺形土器17は上器の口縁部の破片である、口縁は逆L字状口縁でわずかに内傾している。口縁部のくびれ直下には櫛目の施文具による7条の凹線が施されている。胎土には粗粒を含み焼成はよく灰褐色で器内は一定している。胴張はみられない。底部は平底である。口径は25cmである。

S K55出土土器

壺形土器2は、口縁部で頸部よりくびれて大きく外反したのち、口唇端をつまみだして稜をなす。肥厚してわずかに内傾する口縁部をつくり出している。口縁部外面には不連続なへら描きの鋸歯文を施している。

S K60出土土器

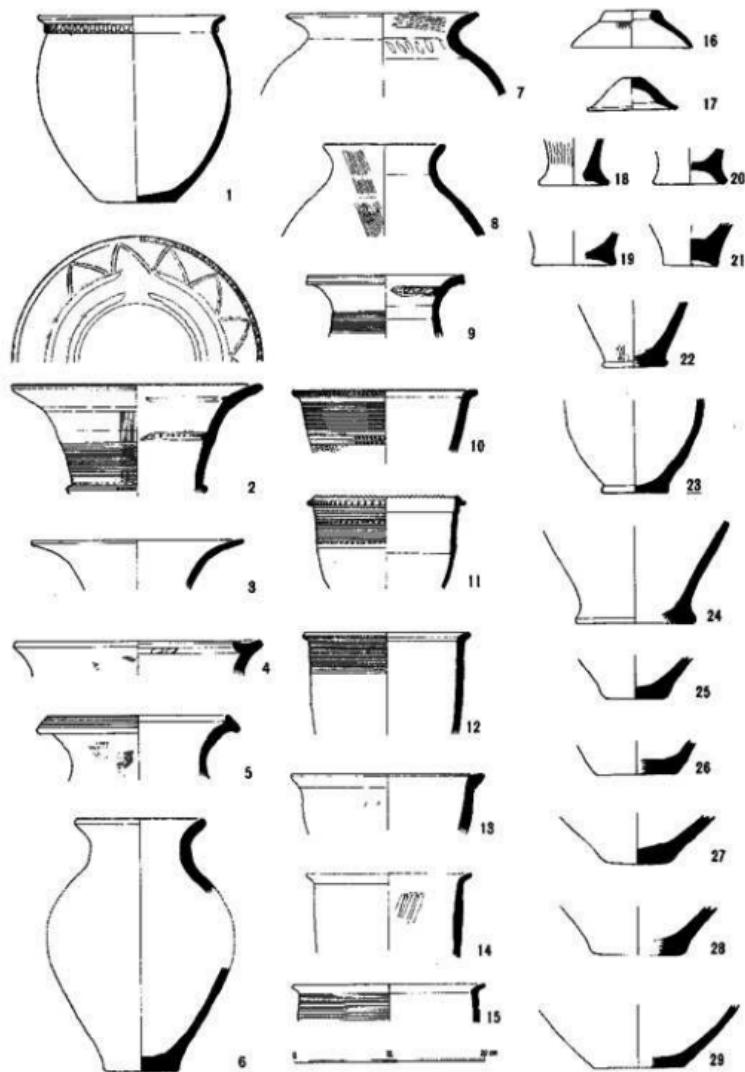
壺形土器1は口頭部は欠失しており不明である。頭部より大きく曲線を描がき球形の胴部をつくり出した後ゆるやかな傾斜をもって平底の底部となる。器内は頭部より底部に向かって肥厚して平底の底部で最大となる。安定感のある壺である。外面は底部付近では縱方向に胴部から頭部にかけては、横方向に竪による磨研仕上げを行っている。内面は斜向と横方向の交叉する竪で研磨されているが、外面の研磨より粗雑な仕上がりであり、頭部付近の内味面には多くの指圧痕が見られる。外面の上腹部には櫛状施文具による5条の凹線文が施文されている。また基底部には焼成後にうがたれた一孔がある。胎土中には多量に粗粒を含み茶褐色であるが、内面は黒色である。頭部径11.5cm、胴部径20.7cm、底径7.8cm、現在高21cmである。

S K55出土土器

9は大きく安定した平底の底部より、外反気味に立ちあがり、ゆるやかな曲線を描きながら内寄してすばめられ、直立した短かい頭部を作くる。頭部より大きく外反して開いた口縁部をつくる。口唇端面は竪磨きで仕上げ、口縁内部も竪で磨研を行っている。頭部とくびれ部における内面には、多数の指圧痕が残されている。器肉は不均一である。口縁部は頭部に向って肥厚し、頭部のくびれ部が薄く底部に向うにしたがって序々に肥厚した後、底部ではにわかに肥厚して3cmを計る。外面は全面を竪で磨研しているが、焼成は軟弱である。頭部には7条の櫛状施文具による凹線文が施文されている。口径20cm、頭部10cm、胴部19.8cm、色調は灰褐色で細かい焼成による盲地がある。胎土中には粗い粒子を少量含む。

3は口縁部のみの破片である。口縁部は頭部より大きく外反気味に立ち上がり、口辺部付近でくびれた口縁端部をつくる。口唇端面は円く竪による磨研がなされている。口縁内部に断面三角形の突帯をはり付けて壺形土器の受け部をつくるが一部突帯が切断されているところから注ぎ口と見るべきであろう。焼成も胎土も2と共通した作りとなっている。口径20cm現在高8cmである。

(森光晴)



第55圖 鳴生式土器尖測圖IV

第3次調査

壺形土器（第55図2～9・25～29）

2はD地区で一部検出した方形の住居跡から出土したものである。頭部外面下に断面三角形状の貼付突帯を付け、指頭圧文を施す。頭部はタテクシ目調整後に12条の凹線を突帯までつける。口縁端部はやや丸く仕上げ、内面に刻目をつけ、口縁部内面には三角状の貼付突帯をつけ、その上部に貝殻による二重山形文を施すものである。

3は口縁端部は丸く横ナデして仕上げ、頭部上半の内面までヘラ磨きする。9は2と同一の遺構から出土したもので、口縁端に凹線文をわずかに残し、頭部内面から口縁部まで丁寧にヘラ磨きする。内面に指頭圧文のある1条の貼付突帯をめぐらす。口縁部外側から頭部上面まで横ナデを施し、その下に数条の凹線をつける。4は口縁端部から粘土帯が貼られ、上方へ少しのぼり、その上部と縁部に横ナデを施すものである。6は口縁部の内外面に軽く横ナデを施し、体部と底部にかけてヘラ磨きする。7は頭部がくの字状に外反し、体部が丸くなるもので、8はゆるやかに口縁部が外反し、口縁端部から口縁部内面を横ナデし、口縁部外面から体部下面までタテクシ目調整を施すものである。

壺形土器（第55図10～15・18～22）

10は口縁端上面から内面に丁寧なヘラ磨きを施し、口縁端に刻目をつけたものである。口縁端外面のすぐ下にタテクシ調整し8条の凹線をつけ、その下に2列の刺突文をつける。11は内面にヘラ磨きし、口縁端に刻目をつけ、さらに刻目をもつ突帯をつける。外面はタテヘラ磨きをし、2段に8条ずつ凹線をつけ、その中間と下面に列点文を配するものである。12は口縁端部に刻目をつけ、12条の凹線をつけるものである。13は口縁端部が肥厚し、その上端部がやや立ち上るもので、14はそれが完全に立ち上っているものである。15は口縁部外面直下に横グシを配したものである。1は口縁部直下に刻目をもつ突帯を貼付したものである。

18～22は壺の底部である。18はやや上げ底を示すもので、20も上げ底であるが、上方でやや広がった形態をなすもの。22は平底である。23と24は壺か甕か判別しがたいもの、25～29は壺形土器の底部で、半底である。

16と17は蓋であろう。16は楕円形の透しを中央部につけるものである。

以上記した土器のうち、壺形土器の2・9および壺形土器10～12は、森光晴・大山正風氏による松山半野の弥生式土器の幅年では前期に含まれるものである。これと同様の土器は、松山市越智町の越智小学校から貝殻による重弧文と木葉文を施した弥生式土器が出土している。また壺形土器13～15は、中期II～中期III（文京I式）にあたる時期のものであり、壺形土器の1と壺形土器の3～5は中期III、壺形土器の6～8、27～29は後期に含まれるものである。

（西尾幸則・池田 学）

注

(1) 松山市教育委員会「文京遺跡」（松山市文化財調査報告書』11 1976)。

3 石 器

N45°S 4° ~ E 2° 地点に広がる約長さ 6 m 幅 2 m の瓦及び人頭大の集石遺構が検出された。遺構は、高畠池の堤防の拡張工事にともなうもので堤防の軟弱な地盤を突き固めるために投入された瓦及び岩石類の堆積遺物である。ほとんど瓦は破碎されており、破碎面は磨滅されていない。この集石に混入されて検出された石器については集石と記載しその他の遺物については、検出地点及び遺構名で挙げておいた。

石斧

1は集石内より検出された船形石斧で全長18cm幅7.2cm厚味5.5cmを計る。全面は丁寧に磨研され光沢を有する。刃部には使用による打撃痕が残る硬砂岩の完成品である。2は緑泥片岩系の石材を利用した船形石斧で基部は欠損し、さらに中央付近より縦裂に剥離している欠損遺物である。面はもとより刃部における磨研はいわいにほどこされている。3は刃部を欠損した緑泥片岩による石器である。基部上端面及び全面をいわいに磨研しておりわずかに四角が彌平し柱状を示す。刃部は不明である、全長15cm、長径6cm、短径4.5cm。4は硬質砂岩を利用した石器である。基部断面を鵠丸長方形に整えたのち、5.5cmに着裝部をていねいに叩き出し叩きによる刻み目は、長径に直交する。刃部より9.5cm付近に最大器幅(5.8cm)がある。最大器幅から刃部に向って背部に円味を保ちながら彌平な腹部を作り出して、刃部は純角な背部よりせり出した形でつくられた舌状刃部である。刃部より3cm付近は、腹背面共に鈍い凹みがみられる。縦断面は嘴状を作くられ彌平な腹部に対して背部の強度を補う円味と、刃部に残された使用痕からみて耕作に使用された利器と見るべきであるが石斧として取り扱った。全長15.9cm、器厚4.2cm。5・6は頁岩である。ていねいに全平面は磨研されている。石器の厚は中央に最大厚があり刃部はいずれも片刃となっている。細分においてはわずかに異なり5の長方形に対して6は刃部に最大幅をもち基部に向ってわずかに幅を減らし基部が最小幅になった定角石斧である。5は全長7.6cm、幅3.3cm、厚0.9cm。6は全長6.6cm、幅3.3cm、厚0.9cm。

7はSB07より出土した遺物である。石質は輝緑岩で全面はいわいに磨研され光沢がある。器形は定角石斧であるが、刃部は両端部につくり出され両頭石斧である。全長5cm最大幅2.5cm、8・9は柱状の整形石斧で石質も頁岩である。9は基部、端面ともよく磨研された完成品である。8は9より腹部のそりの大きい石斧となっている。10は頁岩でSD33より検出された柱状石斧である。四面ともいわいに磨研がなされている。刃部は両面よりつくり出されている。基部には、一部自然面が残っている。全長10.5cm、幅2.7cm、厚1.8cm。11は緑泥片岩を利用した彌平な自然石で刃部を片面より入念につくりだした手斧形石斧である。底部及び全長は欠損遺物のため不明である。幅6.6cm、厚1.8cmで唯一のSB08における遺物である。12はN40°S 9°で検出した刃部のみの欠損遺物である。13・14は共に欠損遺物で

ある。14は2面に縱方向の剥離があり中央部より半折されているが器面はていねいに磨研され、刃部には使用痕が残る。13でも同様の欠損状態の遺物である。基部は入念な磨研となっている。15はNo.20の0地点で検出された遺物で緑泥片岩を利用した一部に自然面を残した磨研となっている。基部上面やや刃部はていねいな磨研をほどこし刃部は両面より造り出している。

石包丁

6個の出土をみたが、ほぼ完形品と見れる16以外は欠損遺物である。利用された石材は緑泥片岩で統一されている。17・20・21の有孔のもの、16の両端面を抉入するもの、18・19の有孔も抉入のないものが検出されたがいずれもSB07の堅穴式住居で併出した遺物ではない。

石鎌

石鎌は、2次調査により21点、3次調査で1点の出土を見ている。調査地に近接した水田、畑地で採集した40、41も参考のため挙げておいた。石鎌に利用されている石材は黒曜石の23、赤色珪岩の25・26以外はサヌカイトによる石鎌である。29は基部を欠損するため基部の形態は不明である。石鎌はいずれも無柄式のものであり、えぐり込みの大きい24・31・33・37に翼状に突き出る35・36、抉込みにより大きく基部が開き翼状をなすもの38、石錐を思わせる抑葉形の42・43・長径4cmを越す25・26がある。これらは遺構に併なったものがその大部分を占めている（第5表）。

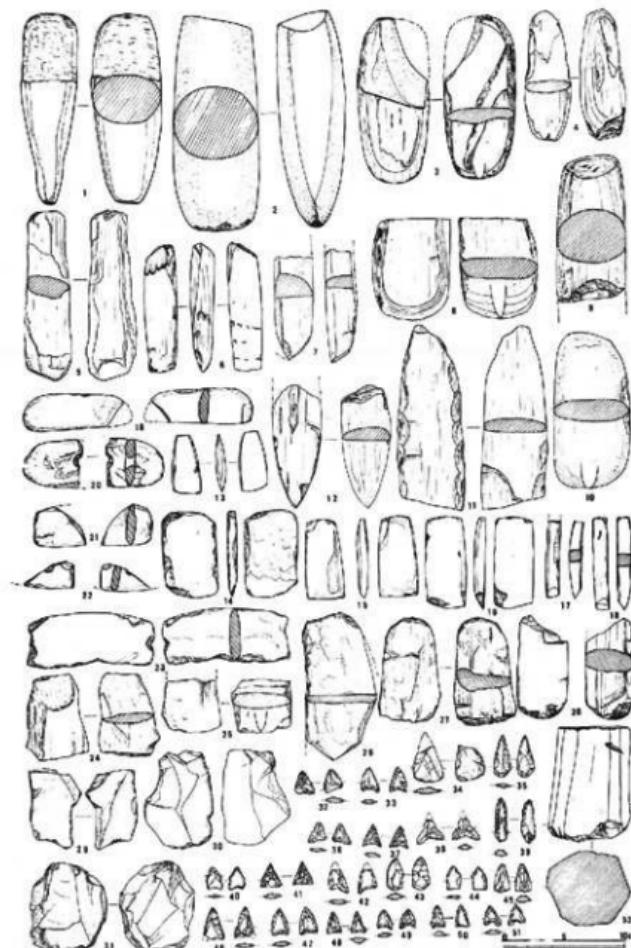
番号	長径	幅	厚	重量	石質	出土地点
44~52はいずれも叩き石である。遺物大きく2つに分類される。1は扁平な河原石を利用するもの、2は棒状の自然石を使用するものとに分けられる。作業石の規格はなく大小多様であるが1の作業石では稜線部分に打撃による剥離面を作っているものと、丸く磨研されるものとの2種類が見られる。2ではいずれも磨研面をもっていないが、共通して握り部分より作業面に向って広がる棒状のものである。作業面には、いちじるしく使用痕が残されている。47	22	1.7	1.3	0.2	0.85g	サヌカイト
	23	2.0	1.9	0.4	1.0	黒曜石
	24	2.0	1.5	0.35	1.5	サヌカイト
	25	4.0復	2.5	0.5	2.4	チャート
	26	3.5	1.5	0.35	1.7	"
	27	復2.2	1.6	0.4	1.15	サヌカイト
	28	2.7	1.4	0.55	2.4	"
	29	1.8	1.3	0.2	0.6	"
	30	1.8	1.6	0.4	1.3	"
	31	2.5	1.8	0.3	0.9	"
	32	1.7	1.2	0.5	0.9	表採
	33	1.7	1.2	0.3	0.5	SD 4 ⁰⁻⁵ 2
	34	1.8	1.2	0.4	0.9	N38E 2
	35	1.7	1.5	0.3	0.7	表採
	36	1.9	1.4	0.2	0.65	S 4 W 2
	37	1.8	1.65	0.3	0.6	N4E 4塊土
	38	復3.0 元2.0	2.3	0.5	1.1	チャート
	39	2.5	1.7	0.15	1.06	サヌカイト
	40	2.7	1.8	0.3	1.8	3次
	41	2.2	1.3	0.6	1.6	白メノウ
	42	3.2	1.0	0.3	1.2	サヌカイト
	43	3.6	1.1	0.5	2.2	SB 9
					"	SB 9

第5表 石器計測表

以外の遺物はことごとく失損しており全長を求められない。

砾石

53—54砾石は2次調査で集石遺構と第3次調査において共に1個検出している。石材は流紋岩を利用している。使用面は共に多面体の使用方法である。
(森 光晴)



第56図 石器実測図

VII 考察

1 伽藍と寺地

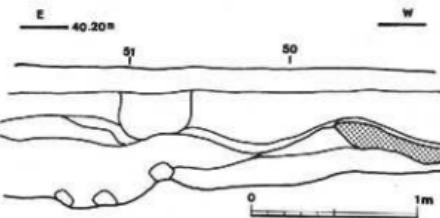
来往庵寺の伽藍については、1967年の第1次発掘調査によって塔跡が判明し、講堂の存在位置についても確認されていた。しかし、今回の2回にわたる調査を加えることによって、講堂の規模もほぼ確定し、さらに回廊の位置・規模についても新たな知見を得た。

まず講堂は版築技法による基壇を確認することができた。基壇外装の化粧石は残存していなかったが、基壇の西方で凝灰岩切石が検出されているので、凝灰岩によって化粧されていたものと想定される。しかし、葛石・羽目石・地覆石など基壇外装を構成する石が全て凝灰岩で統一されていたかは明らかでない。

今回の講堂調査では、全面調査を実施するには至っていないので、講堂の全長を検出することはできなかった。しかし、講堂基壇の北・南・西で検出した玉石組雨落溝および東側の玉石組雨落溝の玉石の抜取跡およびその西1.5mで検出した基壇土の遺存状態からすれば、基壇の東西総長は28.8m、玉石組雨落溝の東西心距離は31.8mと復原される。また基壇の南北長では、基壇の南端・北端付近が擾乱されていたことや、北側では道路となっており充分な調査ができなかったことから、北側玉石組溝の南3.0mまで確認したにとどまり、全長の実測はできなかった。南・北玉石組雨落溝の心心距離は21.0mなので、東西と同様に玉石組溝と基壇端との距離が1.5mとすれば18m(60尺)となるが、現状で遺存する基壇の大きさをそのままとすると15m(50尺)となる。ここでは前者を採用し、東西28.8m(97尺)南北18.0m(60尺)ほどの規模と想定する。

この講堂がこの規模とすれば、大和の飛鳥寺(135尺×76尺)、川原寺(134尺×52.7尺)、法隆寺(118尺×?)、河内の高井田庵寺(106.5尺×67尺)などよりも小さく、河内の新堂庵寺(91尺×54尺)や摂津の伊丹庵寺(92.5尺×57尺)、美濃の弥勒寺(98尺×41尺)などよりもやや大きいが、ほぼ近いものということになる。

講堂の建物は礎石あるいは礎石抜取穴を検出していないので、規模・柱間については明らかでない。しかし、先の調査で本堂の柱位置で講堂の礎石とおぼしき石が3個検出されており、これを動いていない礎石とみているので、ここでこれを採用すると、梁行が11尺等間で北側に10尺の庇がつくもの



第57図 講堂東側土層実測図

を想定しうるので、南側にも10尺の底をつけ梁行純長42尺（10尺+11尺+11尺+10尺）規模のものを想えることができる。この想定では、建物の北側柱列と基壇北端の距離が2.1m（7尺）、南側柱列と基壇南端までの距離が3.5m（12尺）で、南側が少し広くなるが、妥当性が高いものと考えられる。

桁行は今回および前回の調査でも礎石が検出されていないので明らかでないが、基壇の大きさから大まかな想定復原を試みておくことにする。

講堂の桁行は一般に9間あるいは7間のものが多い。いま9間として、しかも等間とするとき～8尺の柱間となり、身舎梁行の柱間よりも狭いものになる。また7間とし、しかも等間とすると身舎の梁行と同じ11尺となり、この方が前者よりも可能性が高いように思われる。なお、前回の調査では、本堂内に礎石抜取穴とみられる遺構を検出し、それによって桁行の柱間の1つを12尺（先の報告書では高麗尺10尺）としている。この12尺で等間とみなすと6間となる。果して等間とみなしてよいのか、もとより手がかりがないので、現状では決まらないが、ここでは11尺等間を可能性の高い1案とするにとどめておく。

講堂の基壇高は、1.7尺くらいに想定され、比較的低い基壇である。これは講堂に一般的に共通した特徴である。基壇の周囲には玉石組雨落溝がめぐっている。この雨落溝と基壇との間は犬走りとなっていたと想定されるが、現状では遺存状態が悪く、敷石になっていたかどうかが明らかでない。

つぎに塔跡は、今回の調査では発掘を行っていない。先の調査では基壇の大きさ9.75m（32.7尺）とみられている。この規模は大和の法隆寺（42尺）、法輪寺（38尺）、摂津の四天王寺（38尺）よりは小さく、河内の高井田磨寺（28.5尺）よりは大きいが、この時期の塔としてはやや小さめである。柱間は1.94m（6.5尺）等間である。塔土壇上には切石の心礎がある。柱座は0.8mほどあり、中央に径0.42mの孔が貫通する。こうした例はきわめて少ないが、類例としては、広島県本郷半磨寺がある。

講堂・塔の位置関係からすれば、金堂は塔の東に存在するものと想定される。現状では、その位置に長隆寺の庫裏が建っており、しかもその周囲には竹藪や菜園などがあるので、かなり擾乱されていることが考えられる。今回の調査では、庫裏の南側の竹藪および庫裏東側で一部発掘を試みたが、やはり擾乱されており、基壇上の確認はできなかった。したがって現状では金堂については何らの手がかりを得てないことになる。塔・講堂が存在しながら金堂が存在しないことは、当時の寺院造営のありかたからみてまずありえない。やはり調査が不充分な庫裏付近を想定してまちがいないであろう。したがって現状では、前回の調査でも想定しているように、金堂と塔が東と西に対置する形式の一つである法隆寺式伽藍とみなしてよいであろう。

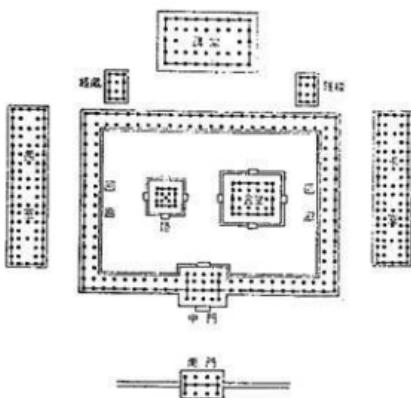
塔と講堂との位置関係をみると、講堂の東西中心線と塔の東西中心線との距離は26.6m（90尺）、また講堂の南北中心線と塔心との距離は22.1m（74.5尺）となる。この数字は先の調

査と異なっている。前回の調査では、講堂の北側柱列と塔心との距離が高麗尺で100尺、塔心と講堂の南北中軸線との距離を50尺と計算している。しかし前回の調査では講堂の規模確認が不充分なので正確な数字をえているとはいひ難い。また基準尺についても講堂・塔・回廊などの柱間復原で記したように各柱間はこの時期に一般的に使用されている唐尺で割りきれる。したがって、高麗尺よりも唐尺によって造営したと考えた方がよいであろう。なお、講堂の南北中軸線はほぼ磁北を示しているが、東西中軸線は東で南へ2度偏しており、正しく直角をなしていない。

回廊は西面回廊のみを検出し、南面回廊はそれにともなう溝を検出したにとどまっている。西面回廊は単廊で南北総長85mを検出している。現状ではこの回廊は講堂・塔・金堂など伽藍の建物の大部分を囲み、なお北にのびており、ほかの古代寺院では例をみないものである。しかし、現状では南調査地区の全域の発掘調査を行っていないので、なお検討の余地を残している。たとえば、現在の長隆寺山門前には東西にのびる幅4mの道が通じている。今回の調査ではこの道路の発掘はできなかったが、この道路と両側溝を含む幅員は4.5mほどがあるので、単廊の幅員1.8mを充分含みうる幅をもっている。したがって、未発掘であるこの道路上に講堂にとりつく回廊が存在する可能性が少くない。仮にこの位置に回廊が走るとすれば、回廊は講堂梁行の南から3間目にとりつくことになる。この確認作業は今後に残されている。なお、東面回廊の想定位置には多くの民家が建っており、今回は確認調査を行っていないが、講堂の南北中心線に対して対称に配置されていると考えると東西回廊の心心距離は約81mとなる。

つぎに僧房は東西2間(16尺)、南北3間(18尺)の房を東西に4房連ねたものである。各房には床東の柱穴が検出されていないので、上間とみなされ、各房の広さは25.9m²である。この僧房は回廊と重複する位置に先行して建てられている。したがって、回廊を廻らし伽藍の主要部分が完成するまで使用されたことになる。

以上、伽藍を構成する建物について述べたが、これらの建物の方位についてみると、講堂の南北中軸線は真北に対し北で6度西へ偏している。塔跡は真北に対し北で1度12分東へ偏している。またこれらを廻る回廊は真北に対して、北で1度東に偏しているので、講堂と回廊・塔とは偏れを異にしている。



第58図 法隆寺伽藍配置図 (200分の1)

伽藍全体の企画については、なお金堂が明らかでないが、知りえた距離をまとめて記すと以下の通りである。講堂の東西中心線と塔心の距離は26.6m(90尺)、講堂の南北中心線と塔心までの距離は22.1m(74.5尺)、講堂心と南面回廊想定位置との距離はほぼ48m(160尺)ほどである。また寺域の四至については、西限を明らかにするため塔の西方にC調査地区を設定し、米住町と南久米町をつなぐ道路まで発掘したが、築地あるいは堀・溝など寺域を画する施設は検出されていない。また北・東・南限についても未検討である。したがって現状で知りうる材料と地形とを考慮し、おおまかな想定を記しておくことにする。

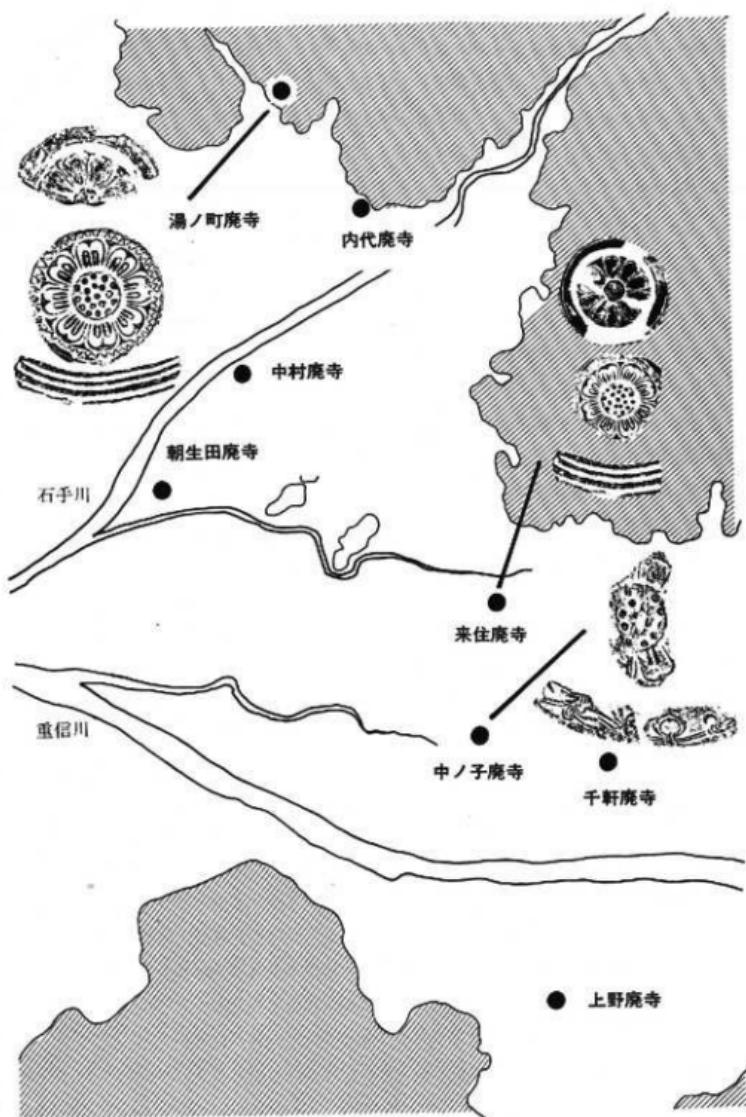
南北距離は西面回廊および南面回廊想定位置をもととし、その南に一定の距離を隔てて南門を想定するとすれば、南面回廊の東西溝が検出された水田の南端まで寺域に含まれるものと想定される。地形的にもこの水田南で1段大きく水田が下がっているので、ほぼ妥当な想定であろう。とすれば、回廊の北端からこの水田南端まではほぼ160m余を測るので、南北1.5町あるいは2町とれることになる。また東西については、C調査地区いっぽいまでは寺域とみなしてよいので、講堂の南北中心線から西77mまでとれるので、東西は1.5町はとれることになる。もし1.5町とすれば、東限位置付近に米住町と南久米町とを結ぶ南北道路が現在走っており、この道路付近が東限となる。また2町とすれば、東側は講堂付近と同一高が東100m付近まで続き、先述した道路の東20m付近で水田が1段下がっているので、この付近まで含む可能性がある。しかし西限想定地には地形の変化がない。以上のような寺域の想定は伽藍の主要建物が、寺域の中軸線上に配置されたことを前提としたものであり、これらの確認は今後の調査に残されている。

2 来住廃寺造営の歴史的意義

これまで明らかになってきたような内容をもつ来住廃寺が、白鳳時代の松山平野に造営された歴史的意義について、ここでは二つの点から述べることにしたい。一つは松山平野における古代寺院造営の展開における位置について、二つは来住廃寺が造営された歴史的背景について古墳時代以降の歴史的変遷のなかで考えてみることにする。

現在、松山平野で奈良時代以前に造営された寺院としては、湯ノ町廃寺・内代廃寺・中村廃寺・朝生田廃寺・中ノ子廃寺・上野廃寺・千軒廃寺・来住廃寺の8寺院が知られている。これらのうち、湯ノ町廃寺・中ノ子廃寺の二寺は、石川茂作氏の「飛鳥時代寺院址の研究」によって早くから知られてきたものである。湯ノ町廃寺は伽藍配置を知りえないが、中ノ子廃寺は遺存した土壇と周辺地形から、法隆寺式伽藍が想定されている。来住廃寺では、なお金堂の位置を確認するまでに至っていないが、講堂の西南に塔を配したことが明らかになり、中ノ子廃寺と同じく法隆寺式伽藍を考えるのが現状では最も妥当なものとみなされる。

さて、これらの8寺院の出土古瓦をみると、いずれも白鳳時代まで遡ることが知られるが、軒丸瓦ではおおまかに3種の瓦当文様がある。Aは湯ノ町廃寺・来住廃寺から出土している

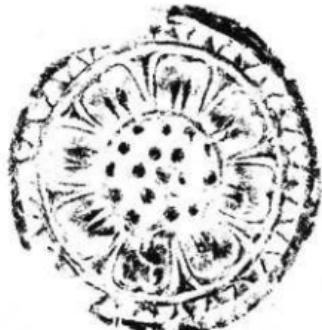


第59図 松山平野古代寺院分布図

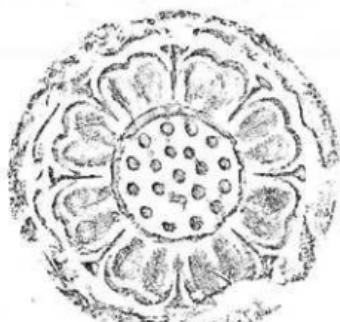
素弁10弁（11弁）蓮華文軒丸瓦である。これは弁が内厚で、10弁のうちの1弁に単弁のものが含まれており、外縁は幅広く、しかも圓線とみるべき線が1本のみられるものである。Bは朝生田廃寺・中ノ子廃寺から出土している複弁8弁蓮華文で外区に面違い鋸歯文をつけたものである。これは同範とみるべきものが、大和の平隆寺から出土している。Cは内区に複弁8弁蓮華文を配し、これに接して外区に線鋸歯文をつけたもので、法隆寺式の系譜を引くもので、湯ノ町廃寺・中ノ子廃寺・来住廃寺・中村廃寺・朝生田廃寺・上野廃寺などから出土し最も出土例が多いものである。

また軒平瓦では、白鳳時代のものに重弧文と忍冬唐草文軒平瓦がある。重弧文は来住廃寺・湯ノ町廃寺・中村廃寺・内代廃寺などから出土し、忍冬唐草文は朝生田廃寺・中ノ子廃寺・上野廃寺から出土している。これらの3種の軒丸瓦が出土しているが、最も古い1群としては、Aの素弁10弁蓮華文軒丸瓦をあげることができよう。これは先述したように、1弁のみであるが、単弁があること、外縁が幅広く圓線とおぼしき線が1条のみられることなどから、単弁の影響をみることができるものである。しかしその時期は白鳳時代の三者の瓦のなかで、最も古い時期を想定してよいものであり、組合う軒平瓦は重弧文軒平瓦とみられる。このようにみると松山平野では、この種の瓦を出土する湯ノ町廃寺・来住廃寺の造営が最も先行して行われたものと想定される。これと同時期もしくは多少遅れるところが、大和の平隆寺と同一の文様をもつBの複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。この種の瓦は朝生田廃寺と中ノ子廃寺から出土しており、組合う軒平瓦は忍冬唐草文軒平瓦が出土している。そしてCは内代廃寺・中村廃寺・上野廃寺の創建瓦とみられるもので、法隆寺で出土している複弁8弁蓮華文軒丸瓦のなかでもやや後出のものと考えられているので、A・Bよりも遅れて採用されたものと考えられるものである。なお、湯ノ町廃寺・来住廃寺では創建瓦のAとともにCの軒丸瓦が出土しているのは、Aの瓦当文様を採用した堂塔に引き続いて造営された堂塔にCの瓦当文様による軒瓦が使用されたことを示すものである。

このように、松山平野における寺院造営の順序としては、温泉郡に湯ノ町廃寺、久米郡に



第60図 朝生田廃寺出土軒丸瓦



第61図 中ノ子廃寺出土軒丸瓦

米住庵寺の2寺が造営され、多少遅れて久米郡に朝生田庵寺、浮穴郡に中ノ子庵寺が造営されたものと考えられる。そして、それらに続いて温泉郡の内代庵寺・中村庵寺・浮穴郡の上野庵寺、久米郡の千軒庵寺が造営されたものと想定される。以上のような想定が妥当だとすれば、松山平野における寺院造営はその造営開始はいずれも白鳳時代ではあるが、細かく造営の動きをみると、ほぼ3段階にわたってなされたことが知られ、来住庵寺は湯ノ町庵寺とともにその先駆けをなした点に大いに注目する必要がある。

ところで、以上のような軒瓦のうち、Cの法隆寺式の軒丸瓦は、畿内およびその周辺地域を中心に分布し、さらに山陽道の東半部から南海道、西海道の一部まで広がることが知られている。こうした法隆寺式の軒瓦の分布については、法隆寺資財帳にみえる庄倉と密接な関連をもって分布していることが、鬼頭清明氏¹¹⁾によって注意されている。法隆寺資財帳に庄倉がみえる郡は、神野・和気・風連・温泉・伊余・浮穴の6郡と骨奈島である。これらの郡のうち、法隆寺式の軒丸を出土している寺院は、温泉郡では湯ノ町庵寺・内代庵寺・中村庵寺、浮穴郡では中ノ子庵寺・上野庵寺から出土している。鬼頭氏によれば、これらは法隆寺の庄倉が媒介として瓦当文様が受け入れられた結果とみなされている。さらに法隆寺式の瓦当文様は資財帳には記されていない久米郡の来住庵寺や朝生田庵寺からも出土しているが、これらは庄倉のある湯ノ町庵寺から范型が移動したことによってもたらされたものと想定されている。松山平野における法隆寺式の瓦当文様の導入およびその分布のありかたの背景としては、ほぼ妥当な見解とみてよいであろう。

ただ、今回の来住庵寺の調査結果および先述してきた松山平野における寺院造営からすれば、なお考慮すべき点もある。たとえば、松山平野の寺院で出土する法隆寺式軒丸瓦は、先述したように湯ノ町庵寺・来住庵寺では創建時ではなく、のちの堂塔の造営に採用されたものである。また法隆寺式の軒丸瓦は、明らかに法隆寺の軒丸瓦の影響のもとにつくられたものであるが、内区の8弁蓮華文にすぐ接して鉢唐文をつけており、圓線をめぐらしていない点が異っている。こうした特徴は、同じ法隆寺式の軒丸瓦の瓦当文様として知られる讃岐の仲村庵寺や道音寺出土の場合も共通している。したがって、讃岐・伊予にこうした特徴のものが存在することからすれば、松山平野への導入は法隆寺からストレートにもたらされた場合と、讃岐などでつくられたものから、さらに松山平野にもたらされた場合とが考えられる。

さらに、松山平野では8寺院のうち、湯ノ町庵寺・内代庵寺・来住庵寺から同范の瓦が出土している。一般に同范瓦が出土する場合は、范型が移動する場合と、同一瓦當で製作された軒丸が異った寺院に供給される場合がある。湯ノ町庵寺・内代庵寺・来住庵寺の三者の関係では、湯ノ町庵寺・内代庵寺は温泉郡に、来住庵寺は久米郡に含まれており、郡を異にしている。こうした郡を異なる場合では、范型が移動することによって同范の軒瓦が製作されたことを想定するのが一般的には妥当であろう。しかし、これらの3寺院は郡こそ異なるが、わずか5キロメートル内の近距離にある寺院である。したがって、来住庵寺が

法隆寺式の軒丸瓦を葺いたのは、湯ノ町廃寺から范型を移動させることによっても、また軒丸瓦そのものの供給をうけることによっても可能である。そのいずれかは、瓦そのものの製作技術や胎土などの検討をする必要がある。今回の報告にあたっては、比較検討の準備を欠いているので他日を期したい。ただ来住廃寺と湯ノ町廃寺は、法隆寺式の複弁8弁蓮華軒丸瓦のほかに、素弁10弁蓮華軒丸瓦も同范とみられる。したがって、二つの寺院造営は、ほぼ同時期に併行して行われていることを示している。これは来住廃寺が固有の瓦当の范型をもちえなかったというよりも、二つの寺院がきわめて密接な関連をもって造営されたことを示唆している。

さて、古代の松山平野については、文献史料では、「国造本紀」に「久昧國造 駿島豐明朝神魂尊十三世孫伊与主命定・賜國造」とあり、伊与主命が久米國造に任せられたことを記している。また「新撰姓氏録」の右京神別の条には、「久米直 神魂命八世孫昧日命之孫也」とあるので、伊与主命も久米氏につながることが知られる。「伊予風土記逸文」には、伊与郡に天山があり、その近くに久米寺があることを記している。また「正倉院文書」の大平20年には、「久米直熊鷹伊与國^{年五十}久米郡天山郡戸主」とあり、「続日本紀」の大平神護2年にも久米郡の名がでてくるので、風土記の編集後に伊与郡が分離し、久米郡ができた可能性が指摘されている。

この久米郡は、「和名抄」には、天山・吉井・石井・神戸・余戸の五郷があったことが知られている。これらのうち、天山・吉井・石井は現在も地名が残っているので、その地域があてられるが、来住廃寺の米住町および久米町がどの郷にふくまれるかは諸説あり。なお定説をみていない。たとえば「日本地理志料」では、久米郡に五郷のほかに久米郡を想定している。また吉田東五氏の「大日本地名辞書」では、石井郷・天山郷の東に接する郷として神戸郷を考え、もとの久米村にあてており、その郷名は「続日本紀」の大平神護2年に久米郡、伊与郡に神封二番をあてていることによっておこったものと想定している。いずれの見解が妥当かは明らかでないが、いずれにせよ来住廃寺が立地する来住・久米の地域が久米郡の中心地域に位置していたことは、ほぼまちがいない。

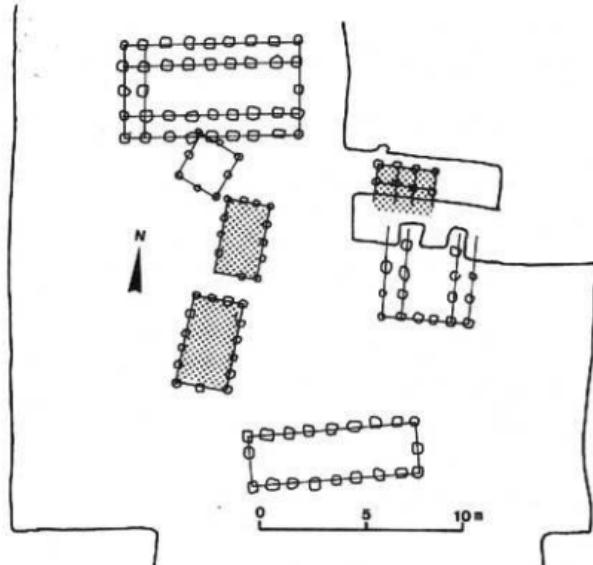
なお、「伊予風土記逸文」の久米寺については、石田茂作氏は「飛鳥時代寺院址の研究」で、中の子廃寺をあてている。これは石田氏が書かれた時期には、この地域に白鳳時代まで遡る寺院が他に知られなかったことから想定したものであり、必ずしも十分な根拠にもとづく見解とはいい難い。現状でも風土記の記述からすれば、中ノ子廃寺を否定する根拠は必ずしもないが、久米寺が久米郡の中心地域に造営されたとみた方がよいとすれば、前回の報告書でもふれたように来住廃寺の方が中ノ子廃寺よりも妥当性が高いとみてよいのではなかろうか。

つぎの前段階の歴史的展開からみると、まず松山平野の古墳では現在知られる古い古墳としては、桑原の経石山古墳・三島神社裏古墳・波賀部神社境内の王塚古墳などの前方後円墳

がある。これに続く古墳としては、御幸寺山古墳・星ノ岡西山古墳・小野平井谷古墳・湯山横谷古墳・天山古墳群・東山古墳群や芝ヶ崎丘陵の南麓の低丘陵地や米住庵寺西方に位置する独立丘陵などに多くの古墳が築成されている。そして松山平野に古代寺院が造営される直前にあたる7世紀前半では、前に続いて芝ヶ崎西古墳・久米丸山古墳群・山田池古墳群・鷹子柳ヶ谷古墳群・大池古墳群・権現山古墳群など、芝ヶ崎丘陵の西南部から鷹子柳ヶ谷・大池から小野の山麓にかけて多くの古墳群が形成されており、米住庵寺の西方に立在するいくつかの独立丘陵にも東山古墳群などこの時期まで継続して築成された古墳が知られている。

このような松山平野中央北部に集中する古墳・古墳群は、重信川と石手川とによって形成された豊かな耕地による農業生産を背景としたものであるが、こうした6・7世紀の古墳群は松山平野の中央部に居住した各集団内部における階層分化が、有力な族長を頂点とする階級構成のなかで進展し、有力な古代家族と劣弱な家族との分化が行われ、族長層および有力な古代家族が劣弱な家族を隸属化していくことを具体的に示すものである。古墳築成このような展開とともに、7世紀後半にみる古代寺院の造営もまた、この松山平野の地域的構造の頂点に立つ族長・有力家族によってなされたものである。

寺院造営は膨大な労働力と資材を不可欠とする。しかもそれまでの古墳築成とは異なり、新たな建築技術者・瓦工人・石工人などを多数必要とする。それだけに、この寺院造営はこ



第62図 京都府正道遺跡

の地域における族長層の経済的・政治的関係を具体的に反映するものである。

ところで、今回の北調査地区では、米住庵寺の造営を推進した族長層の居住集落にかかわるとみてよい5棟ほどの掘立柱建物が検出されている。これらの建物は柱穴から出土した土器および米住庵寺に関連する溝などと重複することから、7世紀後半の寺院造営に先行する建物群と考えられ、建物方位・建物配置などから少なくとも2時期以上にわたって居住したことが知られる。こうした建物が白鳳時代の寺院の寺域から検出された例は伊予では他に知れないが、近畿地方では大和の和田庵寺⁽³⁾・法起寺⁽⁴⁾、和泉の池田寺⁽⁵⁾、山城の正道庵寺⁽⁶⁾、伊勢の額田庵寺など検出されている。これらのうち、たとえば和田庵寺では塔跡付近で建物群が2時期にわたって検出され、法起寺では寺院と方向を異にする建物が数棟検出され、池田寺では10棟余におよぶ建物や倉庫があり、額田庵寺でも講堂の位置で庇をもつ大規模な建物を含む掘立柱建物が知られている。また正道庵寺でも倉庫をもつ掘立柱建物群が知られている。

以上のうち、和田庵寺は蘇我氏の一族の居住地とみられ、法起寺は太子の岡本宮に関する建物群、和泉の池田寺は池田首に関連する建物群に想定されている。こうした遺跡のほかに、石印茂作氏は「飛鳥時代寺院址の研究」のなかで、有力氏族の居住地に建てられた寺院として、豊浦寺・日向寺・法輪寺・広隆寺・西琳寺など多くの寺院をあげており、その一つに伊予の法安寺もあがっている。「日本書紀」巻13年には、蘇我馬子が石川の宅に仏殿を建立した記事をみると、これらは初期の寺院造営が氏族の居住地に行われることが少なくなかったことを示している。こうした諸例からみると、米住庵寺の場合も平行の長い建物がまとまりをもって検出されており、やはりこの地域に居住した有力族長に関連するものとみるのが妥当である。それは現存する地名との関連からすれば、久味国造に任せられた久米氏に関連するものとみるのが最も妥当性が高いというべきであろう。

建物群は、北調査地区に限らず、南調査地区でも柱穴が多数検出されているので、かなりの広がりをもつ集落を構成して居住していたことをうかがわせる。おそらくこうした集落は米住庵寺の造営にともない、集落の再編成を行うことになったと推測される。(小笠原好彦)

注

- (1) 鬼頭清明「法隆寺の庄倉と軒瓦の分布」(『古代研究』11 1977年)
- (2) 近藤義郎・今井亮「群集墳の盛行」(『古代の日本』4 1970年)
- (3) 奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査概報」7 1977年
- (4) 小笠原好彦「和田庵寺」(『仏教藝術』116号 1977年)
- (5) 本村豪章「法起寺発掘調査概報」 1968年
- (6) 広瀬和雄「池田寺発掘調査現地説明会資料」 1979年
- (7) 高橋美久二「正道遺跡発掘調査概報」(『城陽市文化財調査報告書』第1集 1973年)

3 出土土器について

本遺跡における出土土器には、弥生式土器の壺形土器をはじめ、夔形土器・高坏形土器、壺用蓋形土器・甕用蓋形土器・器台形土器・支脚形土器から、土師器では、壺形・夔形・高坏形・器台形・支脚形・肧形土器等を出土している。土器における相対的年代は、弥生時代の前期・中期・後期に分類される弥生式土器をはじめ、古墳時代の土師器及び、須恵器も出土している。弥生式土器では、前期の第1様式（Ⅰ期）に属するものに、木葉文土器片の出土をみている。口頸部のまとまった出土品である第3次の出土遺物は、1期の後半に属する土器で、アイリ式土器に含まれる。夔形土器片では、小片ではあるが、逆L字口縁をもち、口唇端面に刻目文を、口縁直下に凹線文と刺突文を有するものがある。

中期の第2様式（Ⅱ期）に属するものとしては、そのすべてが、土括状遺構及び土括墓より出土している。壺形土器においては、上腹部に四線を施すのをはじめ、口縁部・口唇部に疑問線を含み四線文を数条付けるという特色をもっている土器である。夔形土器では、薄い口縁が水平に開き、口縁部から頸部にかけては、形状は逆L字状の口縁をつくり、口縁内面から口唇部にかけては、ヘラによる横ナデ調整を施している。頸部外面にも、わずかに横ナデが見られる。第3様式（Ⅲ期）に属するものは、かねて、文京1式として取り扱ったものである。口縁内面から口唇部及び頸部外面にかけて、横ナデを施しており、口唇端にヘラ描きの山形沈線文をめぐらし、頸部に断面三角形形状の貼付け突帯をもつ、頸部から胴部上にかけては、複刷毛目、胴部から底部にかけては、横ヘラ磨研を施している。器内は若干異なる所があり、輪積による製作過程が考えられ、その口縁形状は、朝顔型口縁をなすものを指すが、口縁部の端を切り落した退化形式も考えられ、漏斗状口縁をなすものがある。底部は肥厚な平底の底部をもつものと、レンズ状に内凹するものとがある。胎土には、粗砂を多く含むが焼成は、Ⅱ期の灰褐色の土器に対して、第Ⅲ期の土器においては、彩度を有する明るい茶（4, 10, 4）、にぶい黄茶（6, 17, 4）、黄茶（6, 16, 3）の色調を示すものへと移行している。夔形土器では、頸部で大きく曲折し水平な口縁をなすものを基本型としながらも、口唇端部がやや肥厚するものへ、肥厚した口唇端面に1～2条の疑問線を施すものと、刻目文を施すものとがある。器形は、頸部より胴部にかけて、ゆるやかな曲線を描き、口縁径よりわずかに広い胴張りをもつ、I類に対して、口縁部がくの字にくびれて、外反した口縁部をつくり、口唇端面をつまみ上げて肥厚させ、端面には一条の凹線をめぐらす、口頸部は丁寧な横ナデ仕上げを行っているものとがある。器内は口縁部から胴部にかけて均一であるが、胴部から底部にかけては、やや肥厚しながら平底の底部へと続き、底部にI孔を穿った瓶形土器もあるが、これを含めII類、III類には頸部より水平に曲折し、頸に貼り付け突帯（断面三角形・断面台状形）を有するF字状口縁のものがある。I、II類は胎土に粗粒をわずかに含むが、F字状口縁のIII類では、粗粒を多量に含む同器種はいずれも内外面と

も入念なヘラ磨研による仕上げがなされている。焼成はよく、器面に化粧土による覆被がみられるものがある。色調は、I～II類では黄茶色から橙色に変化し、III類ではチョコレート色を呈するものが多い。いずれも煤の付着がいちじるしい。

壺用蓋形土器は、大きく裾部を開き、平底状のつまみを持つ笠形土器である。III期の上器に伴うものに壺用蓋形土器がある。平底状のつまみ部から、大きく裾部を開いて笠形をなす土器である。器外面はヘラ仕上げであるが、所々に櫛目(櫛目)の形成痕を残している。内面はヘラによるナデ描きが行われている。器肉は厚いが焼成もよい。胎土に粗粒を含み、色調は茶褐色である。高环形土器 I類では若干の差はあるが、口縁及び脚部に凹線文を施し、脚部に二等辺三角形状の内面に達しない透孔を配などの共通手法をもち、一式は口縁端面、脚部に凹を配するが、二等辺三角形透孔をもたない二辺式では2棟と2段の二等辺三角形の透孔をもつものをさす。坏部は共に大きく皿状に開き、二式共に、共通する形態をもつ脚部にのみ差異がみられる。一式では坏部に皿状と大きく内弯するコップ状坏部が知られている。第4様式(III期)の壺形土器の形状は、口縁から頸部にかけて極端にくびれ、短い頸部を造るものと、頸部に断面三角突帯のみを貼り付けるものとがある。弥生後期の上器と考えられ、胴部はかなり丸味をおびる点とも壺とも判別しがたい器形に、変りつつあるようすが伺える一式と、口縁部が大きく漏斗状に開き、口縁径がかなり大型の壺形土器 II式がある。特徴は口縁端を極端に肥厚させており、瀬戸内一円にその類似土器は求められない。肥厚口縁は一式の口縁内傾面に肉付けすれば生じる形であり、一式に基本型を求める。肥厚した口縁部の貼り付けを口縁部に内傾して形成すれば、第5様式での複合口縁が得られる。

この期の壺形土器においては、口縁部がくの字を主体とするものが多く、胴部の最大径が器高の中位及び中位以下にあるものが多くなり、つり鐘状の器形から卵形に変形するが、口径に対して胴径は等しくゆるやかな胴張りとなり、ゆるやかな曲線を小型のもの、胴部よりくの字状に曲折したのち、平底の底部となるものが多いが高台付の底部に至る。器面は内外面共に丁寧にヘラによる磨研を施しているが、頸部から口縁部では横ナデ仕上げとなっている。また発見例は少いが、壺用蓋形土器がある。高环形土器はII類に属しており、I類に見られた凹線文を頸部、あるいは脚部に残しているが、文京I式にともなう土器とは異なり、文京II式においては、施文がさらに発達し、二等辺三角形の透孔もまた脚部の凹線の数を増す。一方脚部が発達し大型化して器台状を示すものと、退化して小型化するものとの変化が見られる。高环I類の施文が発達する段階から、退化していく過程の高环と把握したい。II類の坏部は、口縁部の端面が、水平に保たれるもの、坏部が内弯しながら外反し、口縁部で直立するものが見られる。さらに脚部における施文具(金属器?)による山形の沈線も出現する。山形沈線は、壺形土器IV類、V類の複合口縁部にもみられ、ほぼ同時期の叶器と考えられる。器台形土器は、当地方では初見の時期で、小型の數状のものが主流をしめ、中央部に1～2孔の円孔を透孔するものが多い。内面は粗い櫛目(櫛目)の成形を残しているが、外面は逆方

向にヘラ磨研がなされている。第5様式の土器においては、竈形土器・高環形土器・器台形土器が盛行する反面、腰形土器が衰退している。

これらの土器はいずれも弥生式時代の後期から終末に属する土器であり、土師器との移行期にあり、器台形土器は最も盛行する。器形には脚部が中空の柱状をなし、数条の凹線で区画されたのちに数段の円透孔を穿ち、上縁部には、浮文・波状文・鋸齒文・円形刺突文・竹管文・製造摩文を施すものから、上縁部内面部に、櫛描きによる施文がなされているもの、下縁部に凹線・刻目文を施しているもの等実に優美な土器である。中空の柱状内面は、粗い櫛描き成形であるが、その他の器面は丁寧なヘラ磨研が施されている一群と、脚部に1~2段の円透孔を穿った鼓形の器高の低い、30cm以下の二形態がある。以上はいずれも弥生終末期の土器を示すものであるが、いずれも高環と脚部が柱状をなす器台とをのぞき、胎土に粗粒を含む土器群である。これに対して、土師器においては、ほとんど第5様式に類似する器形を伝承してはいるが、いずれの土器も粗粒を含まない砂質粘性土を胎土として利用している点において、弥生式土器と区別される。また、城東、大空、安國寺等に類似する土器も多く出土する。前期の土師器を併出する遺構（住居址）の平面（床面）構造は、方形プランの堅穴式住居に伴うものが多く、堅穴の壁長に対して主柱間の距離とが「一度」^{1/2}という床面プランをもつ住居より出土を見る。中期の土師器は、堅穴の壁面内に主柱の柱穴は穿たれてはいるが、相応する壁面長に対して柱間距離が^{1/2}以上にあるもの（柱位置が堅穴の端に近づく）にともなう。後期の土器は、堅穴状の床面の掘込みは認められるが、柱穴は、堅穴の外周部に穿たれているものに併うものが多い。

（森 光晴）

つぎに、須恵器の杯A類の47・提瓶の36・高環の59・長頸壺の40・器台の60などは、松山平野における群集墳の時期にあたり、久万ノ台1号墳、東山2号墳などから多く出土している。大阪の陶邑古窯址群の編年ではⅡ期の後半に該当し、TK43~TK209型式に平行する時期で、ほぼ6世紀後半から7世紀前半にあたる時期である。また蓋A類の1・2や42~46・60は杯A類の14~19や48~54・61~63と組合なものであり、この地域の受部をもつ杯身の終末段階に属するものである。同時期のものとしては、高環23~31・55~56・59・65があげられ、陶邑古窯址群との対比ではTK217型式に平行する時期と考えられ、その実年代も7世紀中頃に想定されるものである。来往庵寺に関係する時期の遺物としては、蓋B類の3~13、66があり、これらは宝珠型のつまみを付したとみられるもので、杯B類の20~21、57・58と組合るものとみられる。同様の土器は国道バイパス11~8遺跡でも多少出土している。それらに続く時期のものとしては、皿の22・杯38・腹29・瓶35があげられ、時期は陶邑古窯のMT21~TK7に相当する時期と考えられ、7世紀後半から8世紀前半の時期が想定されるが、これらの時期の資料はなお不足である。

（西尾幸則）

VII おわりに

来住庵寺は、1967年と今回の2回にわたる調査によって、白鳳時代に造営された寺院として、きわめて重要な内容をもつものであることが明らかになった。今回の調査は、以前から知られていた塔基壇に加えて、講堂・回廊などを検出し、さきの調査で法隆寺式伽藍と推定していたことが、ほぼまちがいないことを裏づけた。

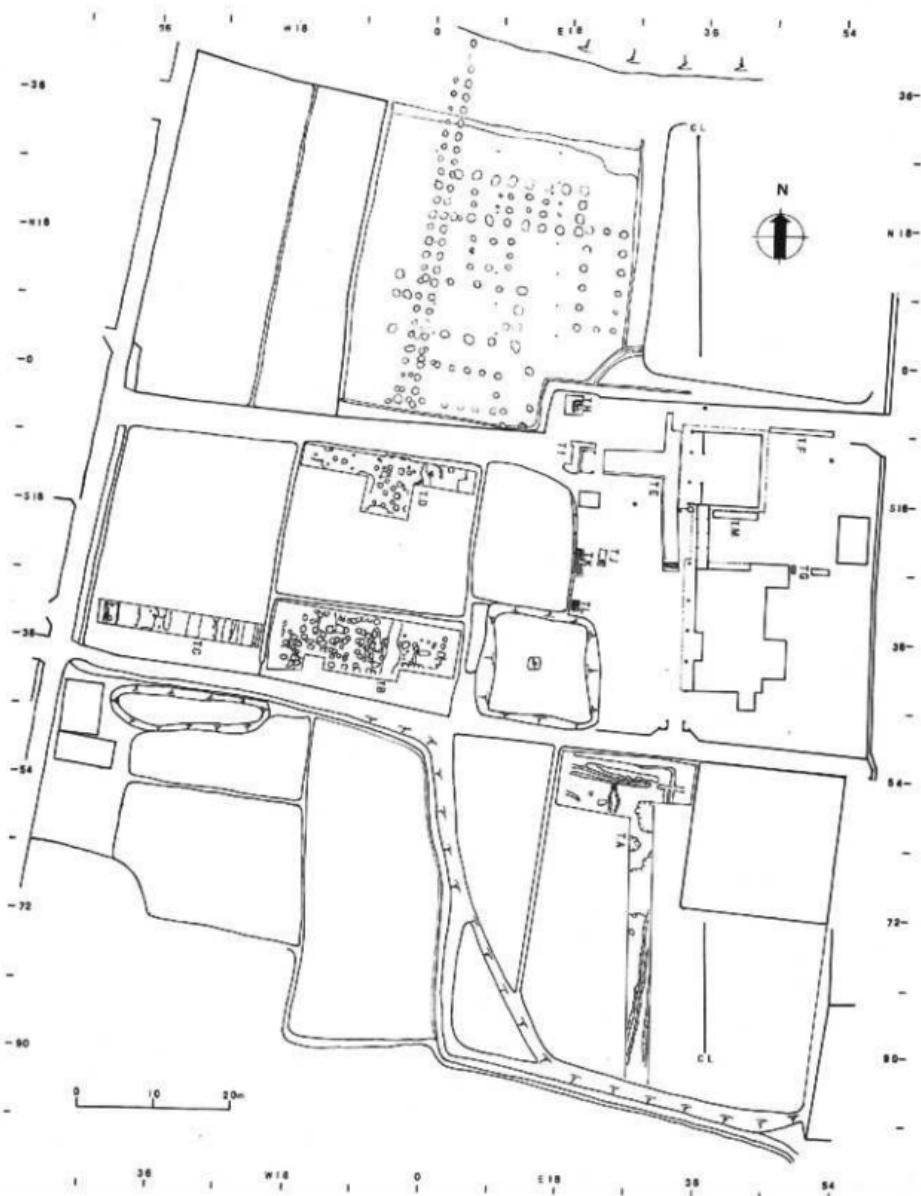
松山平野には白鳳時代の寺院が8カ所知られている。当時の中央である近畿地方は別として、地方の限られた一地域として、これだけの白鳳時代の寺院が存在するところはごくまれである。しかし、今日これらの寺院が、十分な内容が明らかでないまま宅地などに変化し、すでにその大半が破壊されてしまっているものが多いことは憂慮される。

今回の来住庵寺の調査成果は、松山地方の古代史を考えるうえで、きわめて貴重な素材を多く提供することになったことはまちがいない。今回、こうした重要性が認められ、国指定史跡として保存されることとなった。都合3回の調査を行ったとはいえ、なお全域の調査を行ったわけではないので、未確認なところも少くない。いうまでもなく古代の寺院は、金堂・塔・講堂などによってのみ構成されていたわけではない。寺院として機能を果すには、食堂・僧房はじめなお多くの建物が存在する。こうした建物についても今後明らかにする必要があり、課題として残っていることを記しておく。

前回の調査と同じく、今回の調査においても、長隆寺住職、関 享道氏の終始御協力をえた。とくに第三次調査では、長隆寺本堂の正面をはじめ境内や庫裏周辺の菜園を数ヵ所にわたって発掘することとなったが、全面的な協力をいただいたことに対し、厚く感謝の意を表したい。また第一次調査を実施された大山正風氏からは、現地での調査に協力いただくとともに前回の調査所見をはじめ、松山平野の古代寺院について多くの御教示を得た。とくに第2章1節の松山平野の古代寺院については、大部分が大山氏の御教示によって文章化したものである。また、栗原文蔵氏からは、埼玉県立博物館が所蔵する松山平野の古代寺院出土の軒瓦の拓影を拝見する機会を与えていただいた。以上の方のほか、愛媛県教育委員会・伊予市教育委員会・協和道路株式会社・善宝寺住職村上・白貞氏・長井數秋氏・松下正司氏・藤崎良本氏らの御協力を得た。文末ながら記して感謝したい。

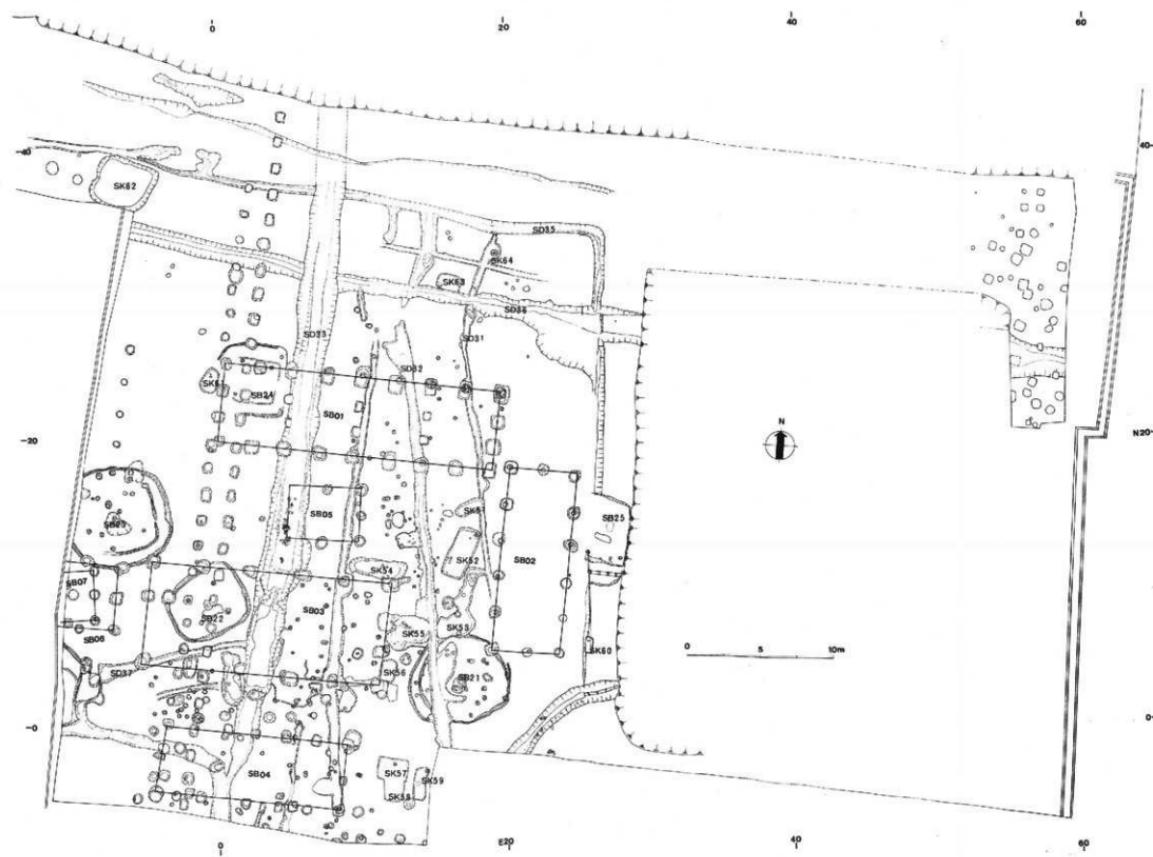
(小笠原好彦)

図面 1

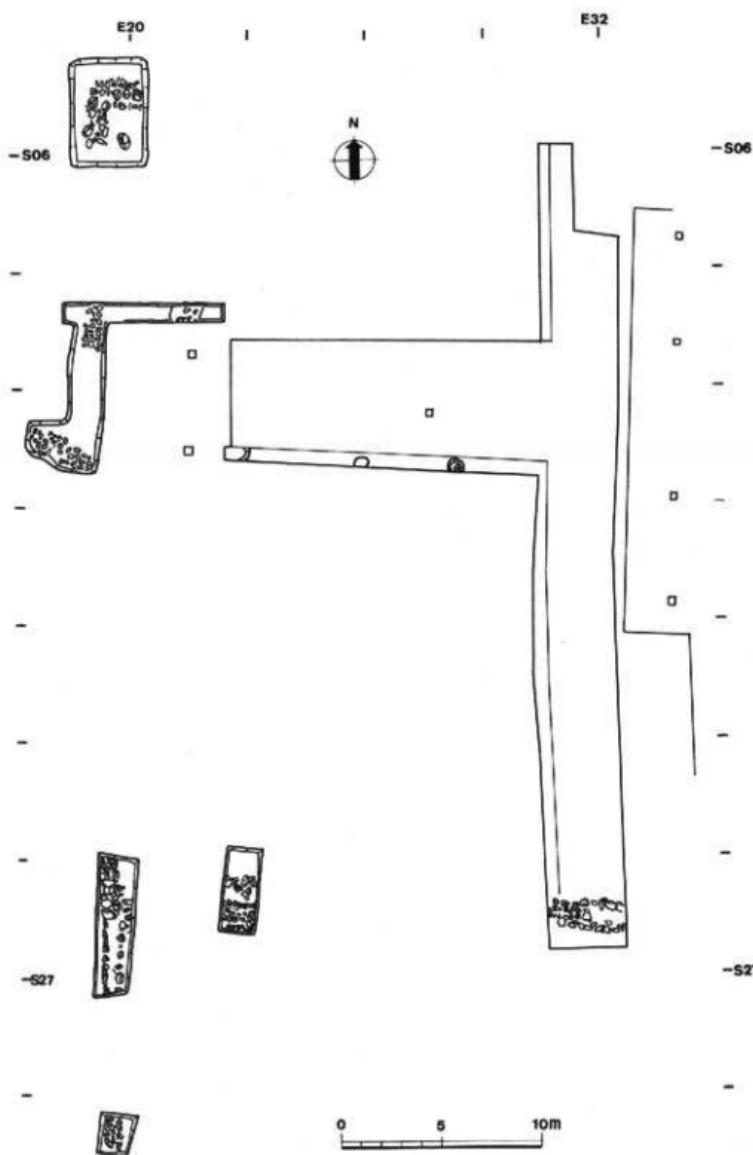


来住庵寺遺構配置図

図面 2

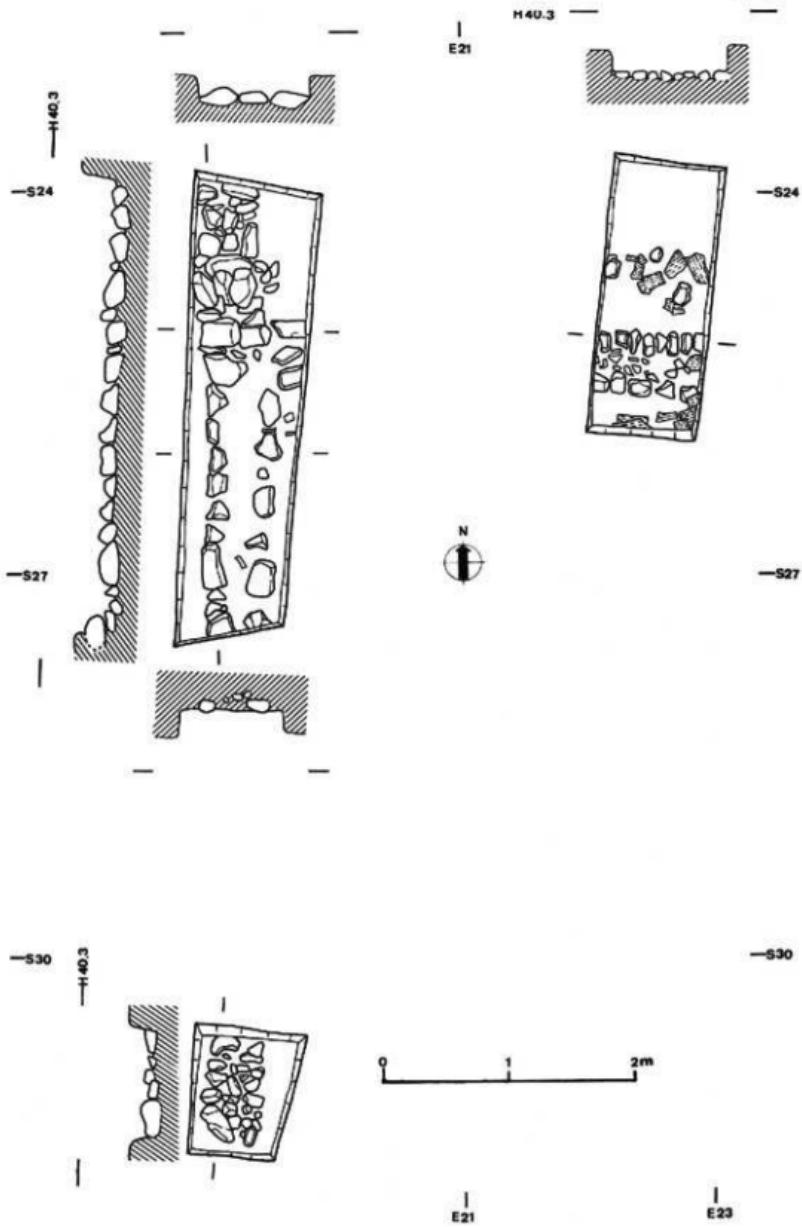


図面 3

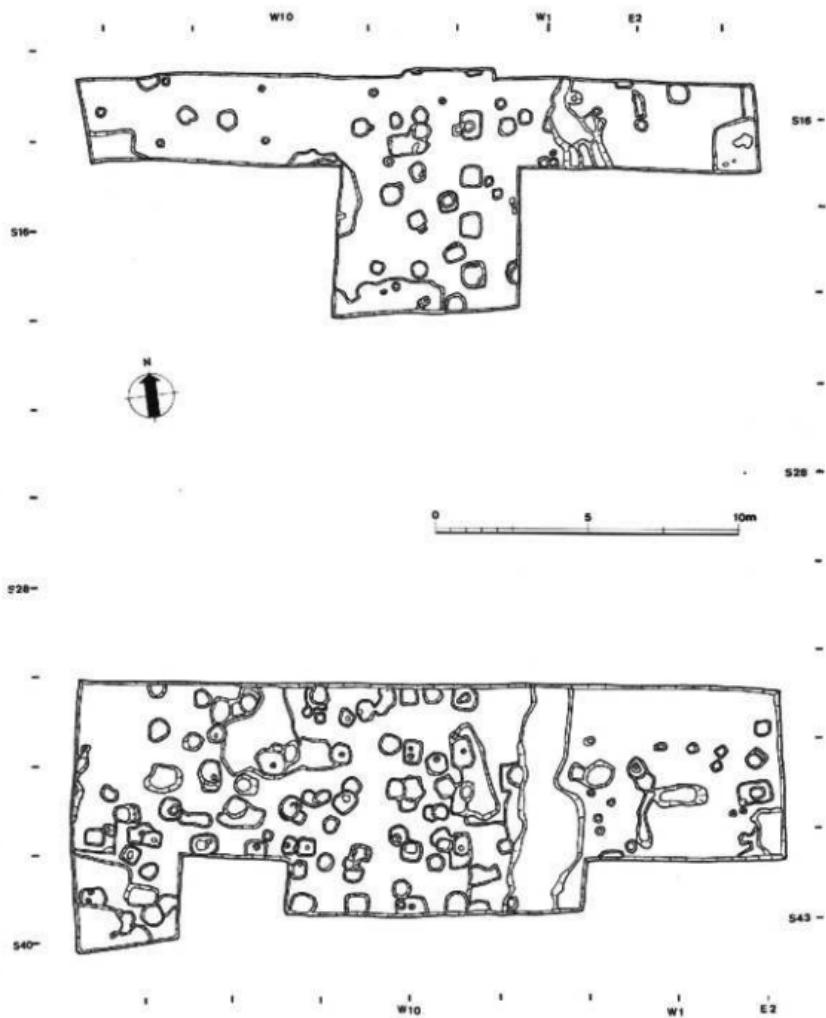


講堂玉石組雨落溝実測図 I

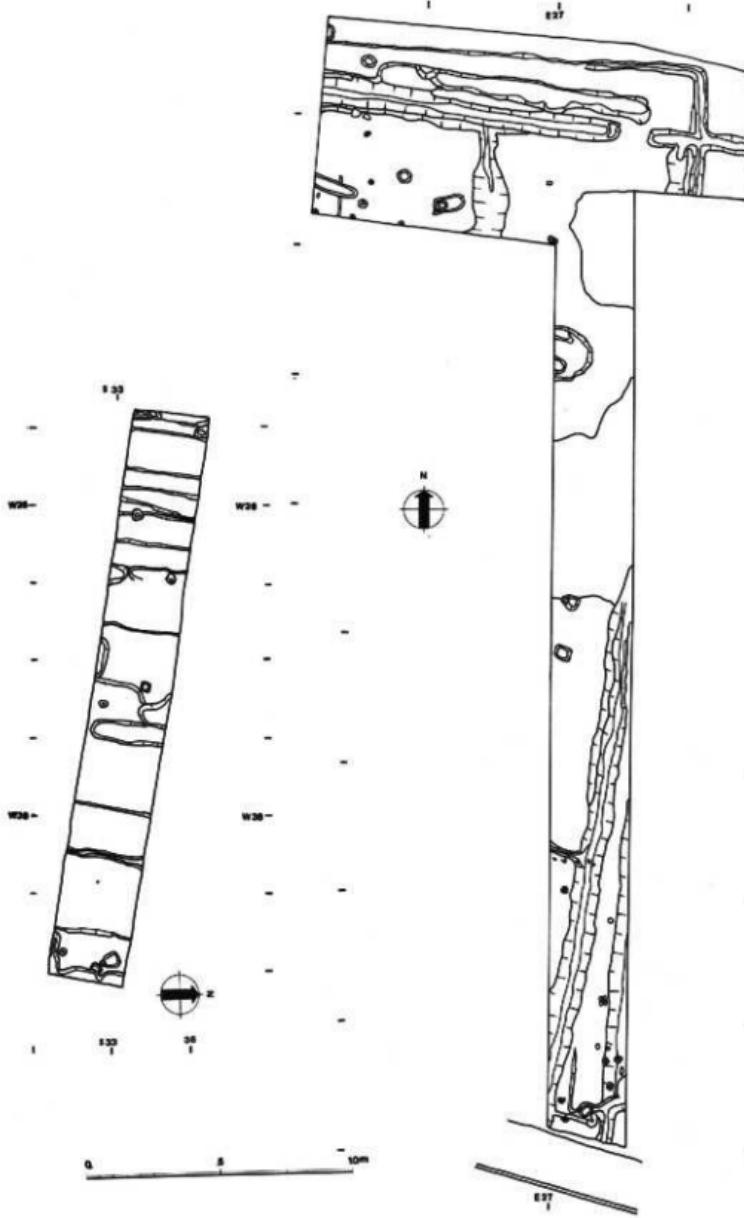
図面 4



講堂玉石組雨落溝実測図 II



南調查地区 B 区・D 区



南調査地区 A 区・C 区



北渊寺地区全景

図版 1



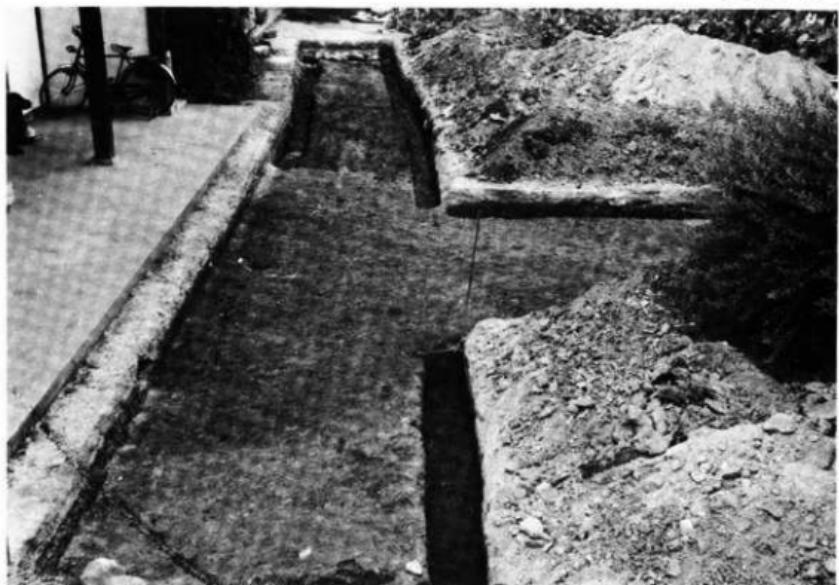
来往庵寺跡周辺空中写真



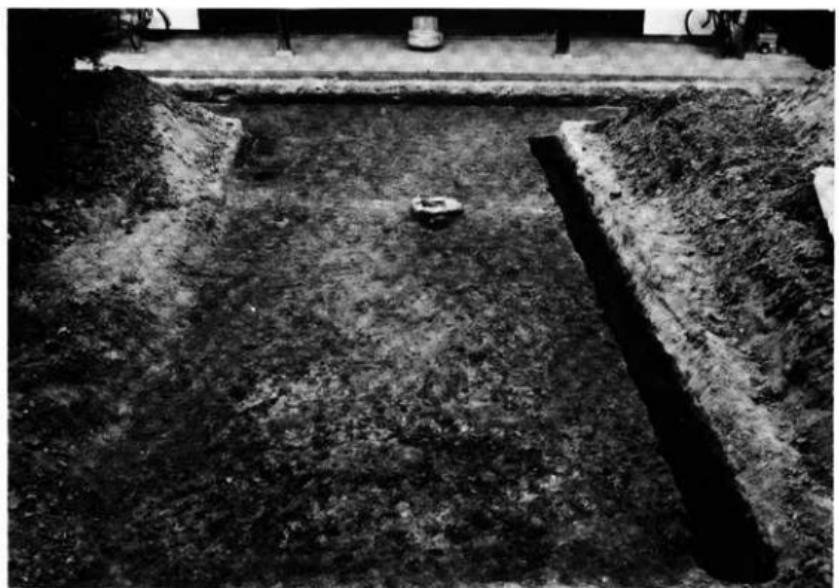
長隆寺全景（西から）



塔跡心礎



講堂基壇（北から）



講堂基壇（西から）



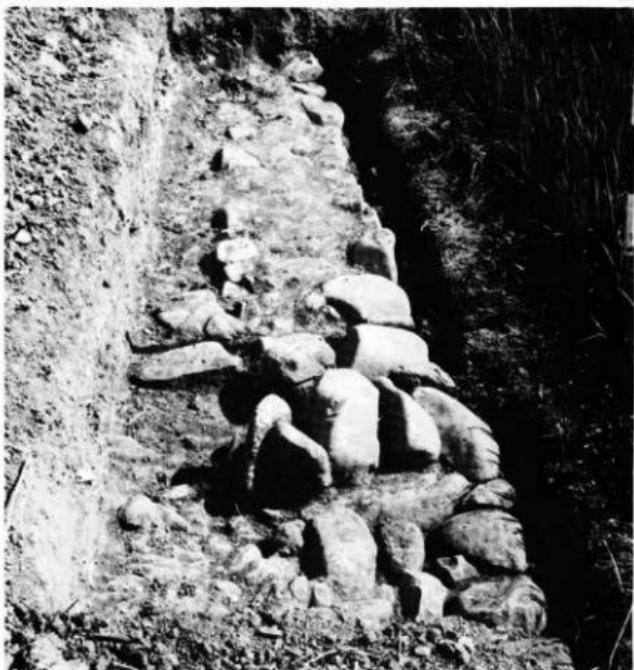
講堂南側雨落溝（東から）



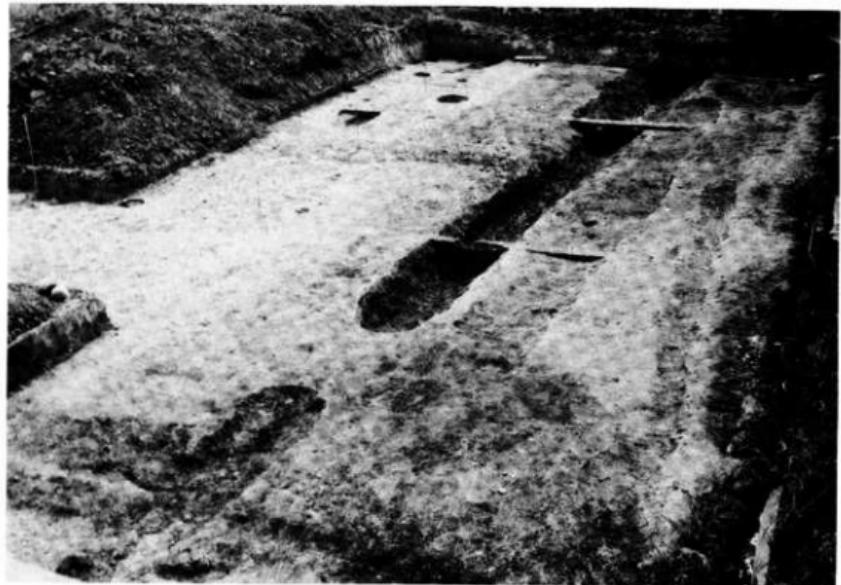
講堂雨落溝西北隅（南から）



講堂南側雨落溝
(南から)



講堂南辺石組溝
(北から)



南面回廊A区（東から）



西面回廊B区（東から）



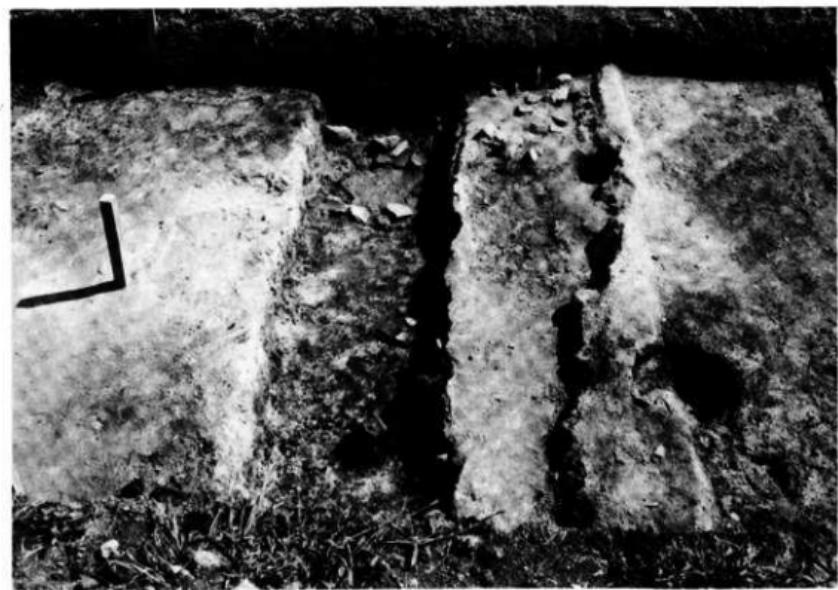
西面回廊D区（西から）



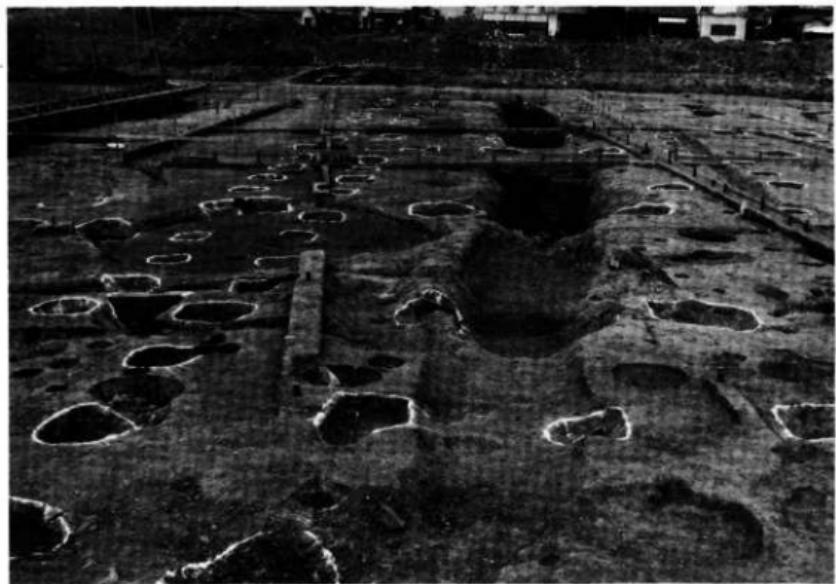
西面回廊D区（南から）



南調査地区A区（北から）



南調査地区C区（南から）



西面回廊と S D33 (南から)



西面回廊と S B22 (北から)



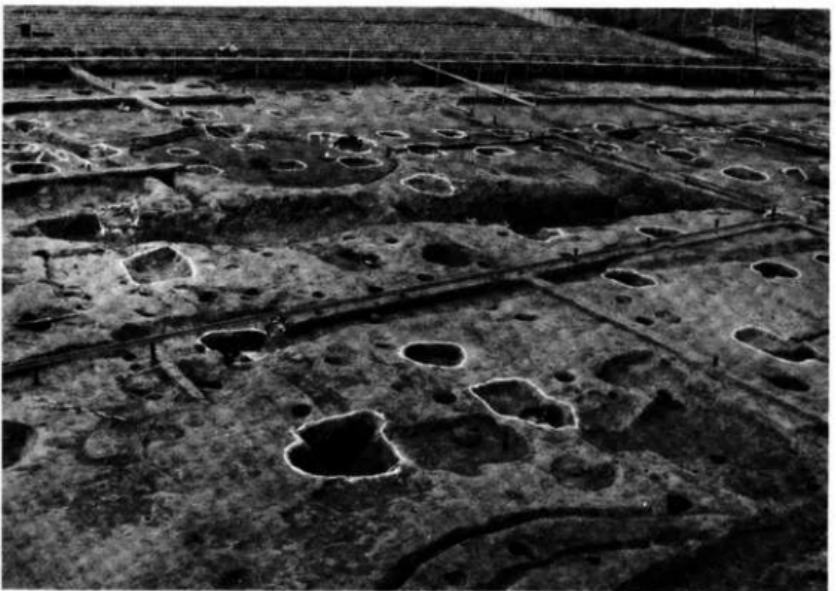
北調査地区全景（北から）



僧房全景（南から）



僧房全景（東から）



寺院造営前建物 S B03（東から）



寺院造営前建物 S B04 (東から)



寺院造営前建物 S B02 (南から)



僧房柱穴



僧房柱穴



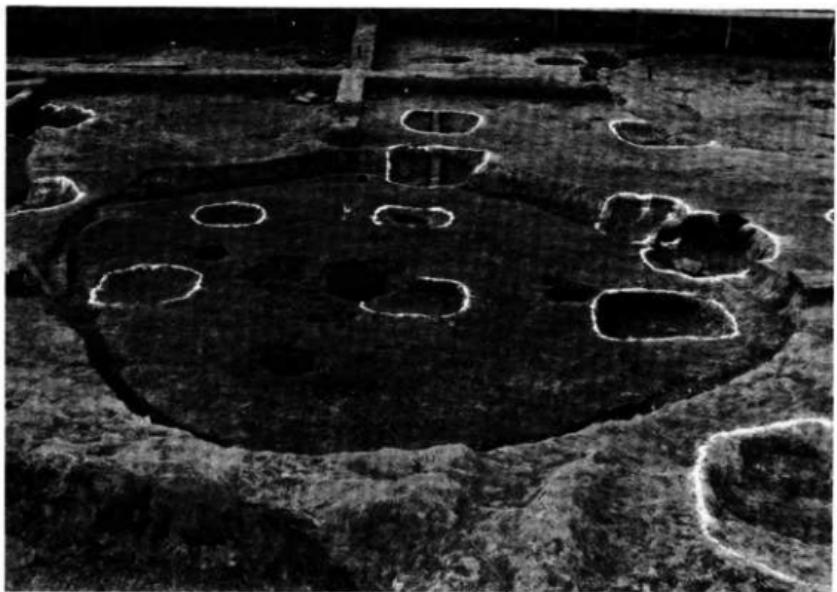
僧房柱穴



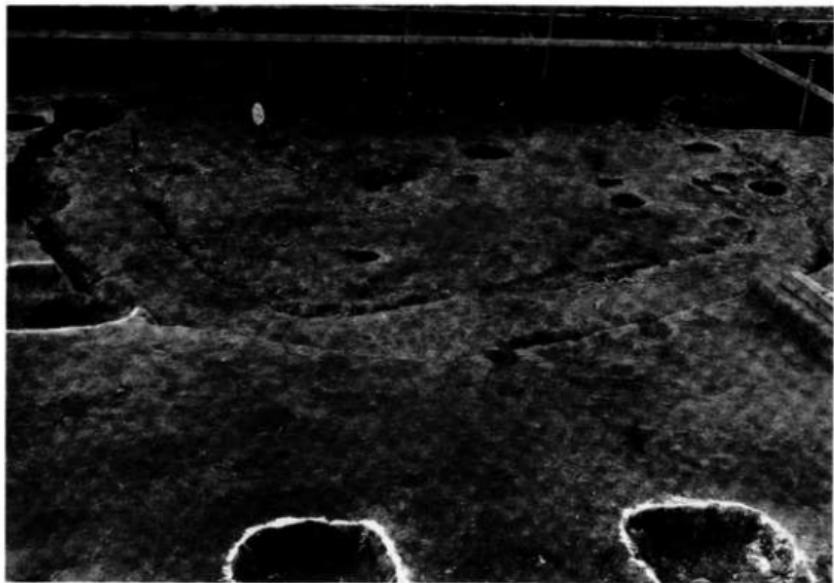
北調查地區西面回廊東側溝



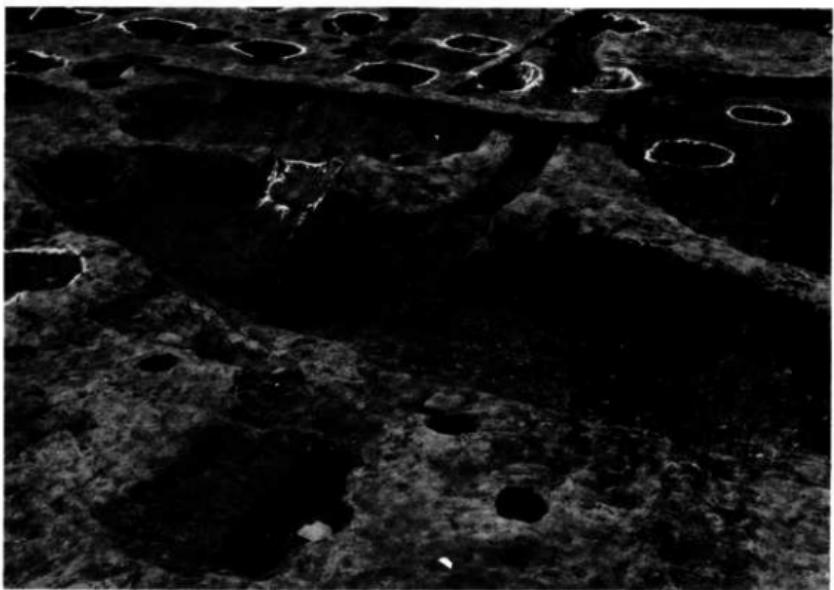
竪穴住居 SB21 (東から)



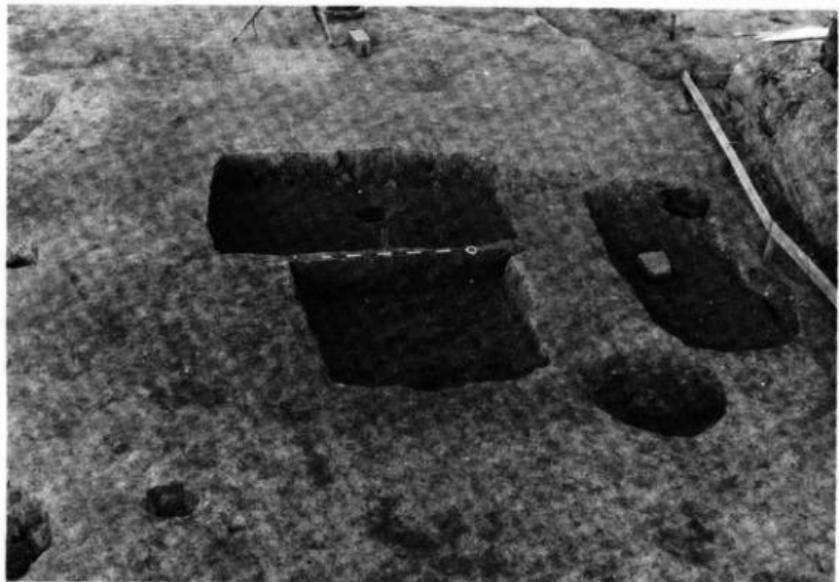
竪穴住居 SB22 (東から)



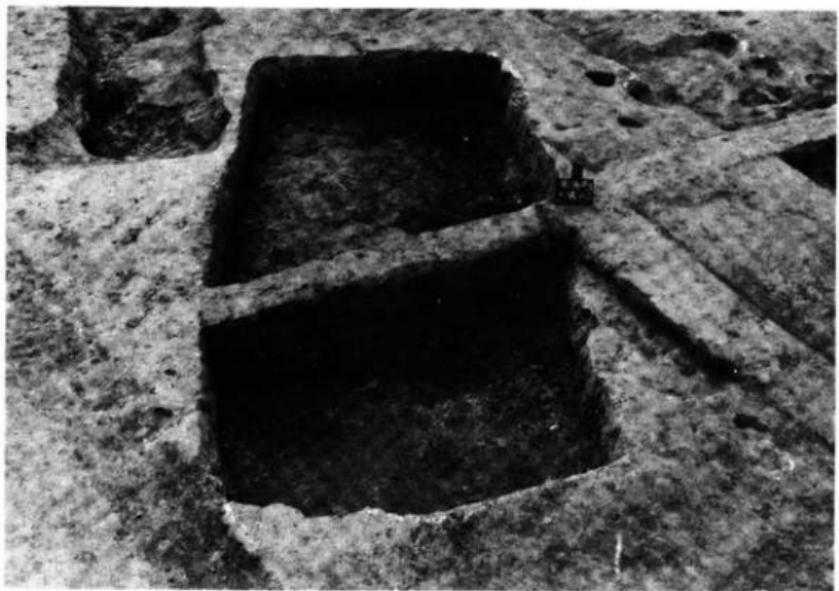
豊穴住居 S B 23 (東から)



S D 33南端部 (東から)



弥生時代土壙 SK57・58・59



土壙 SK52

講堂基壇版築状況



南調査地区 C 区
(東から)



南調査地区 B・C 区
(西から)



S D38検出状況



軒丸瓦出土状況
(B区)



丸瓦・平瓦出土状況
(B区)



竪穴住居 S B22
土器出土状況

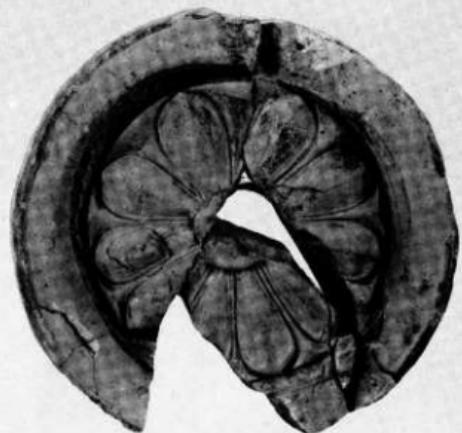


同上



同上





1



2



1



5



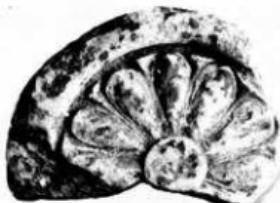
2



3



6



4



7



1



4



2



5



3



6



1



5



2



6



7



3



8



4



9



10



11





3



1



4



2

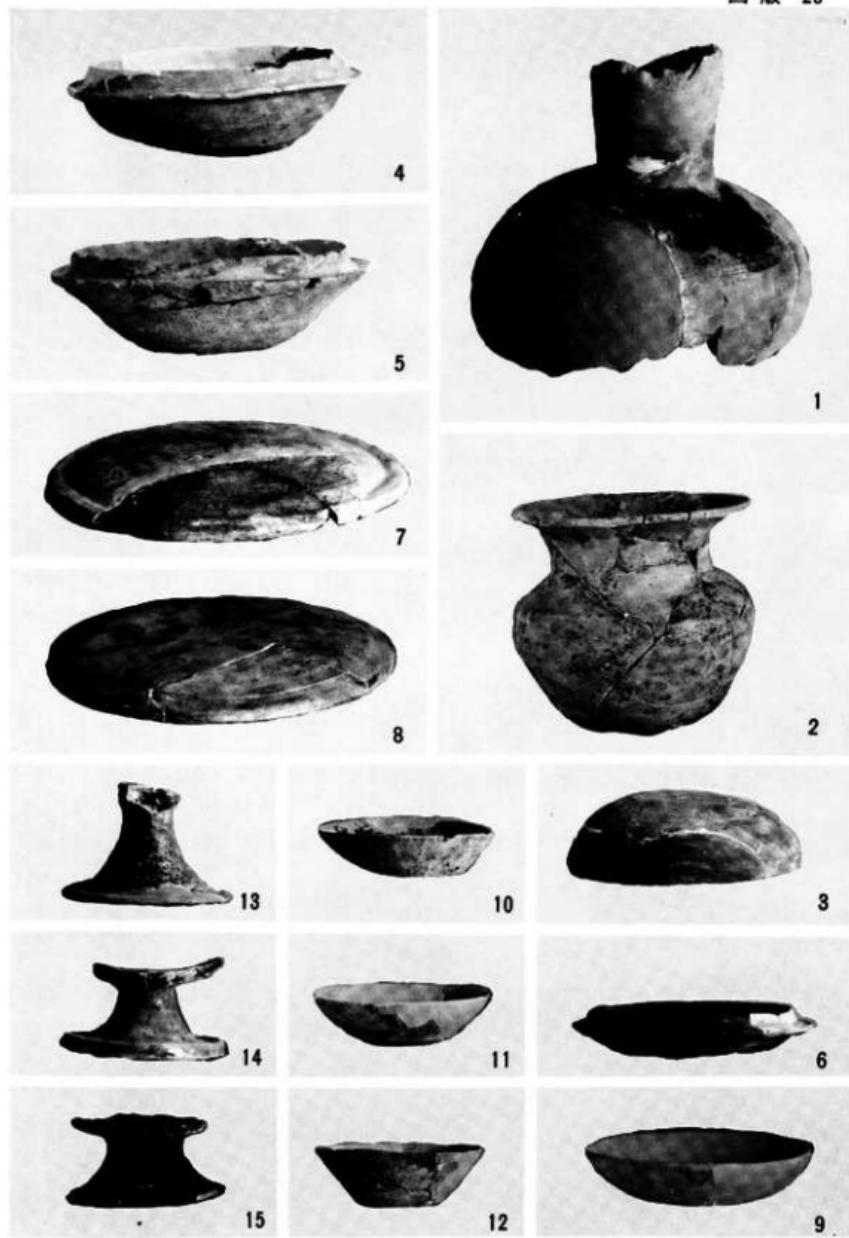


6



5







4



1



5



2



6



7



3



5



1



6



2



7



3

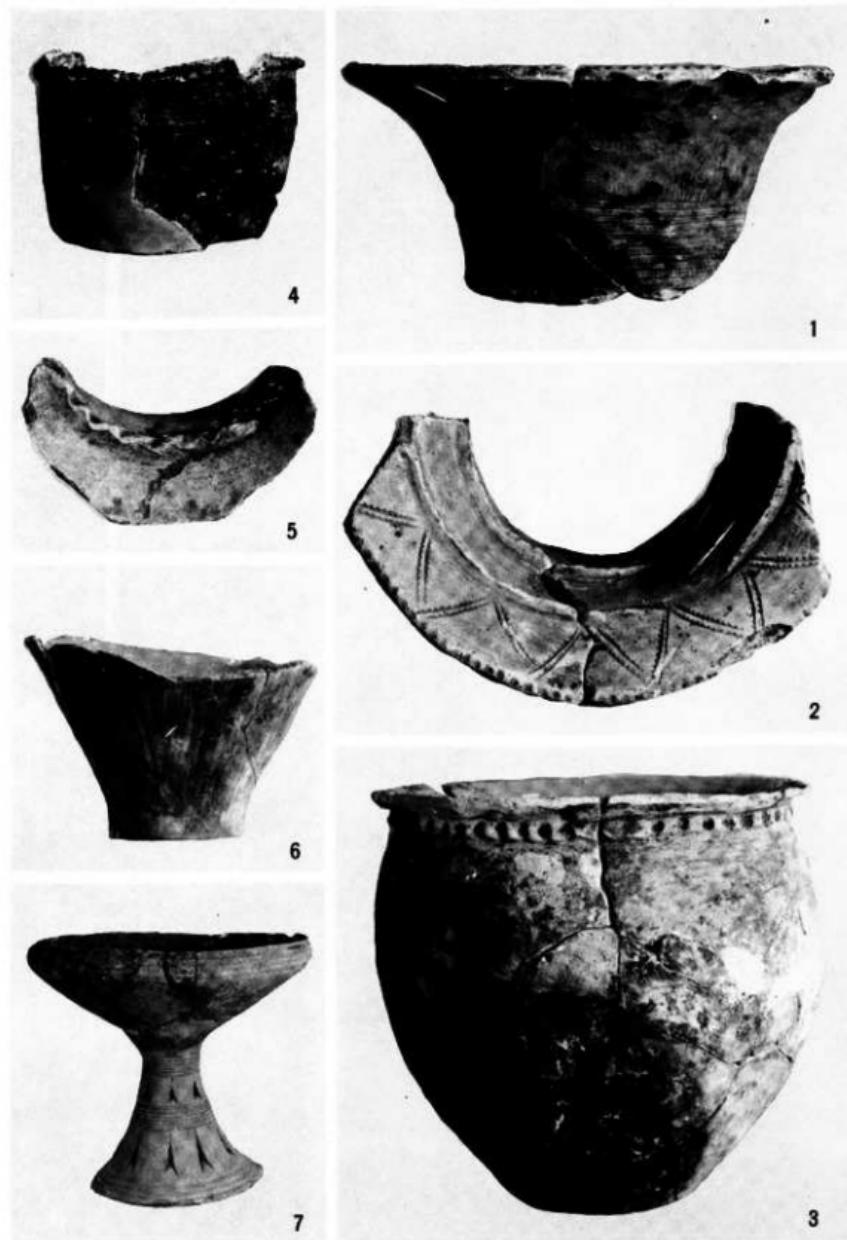


8



4

上部器（5～8）・弥生式土器





4



1



5



2



6



7



3



3



1



4



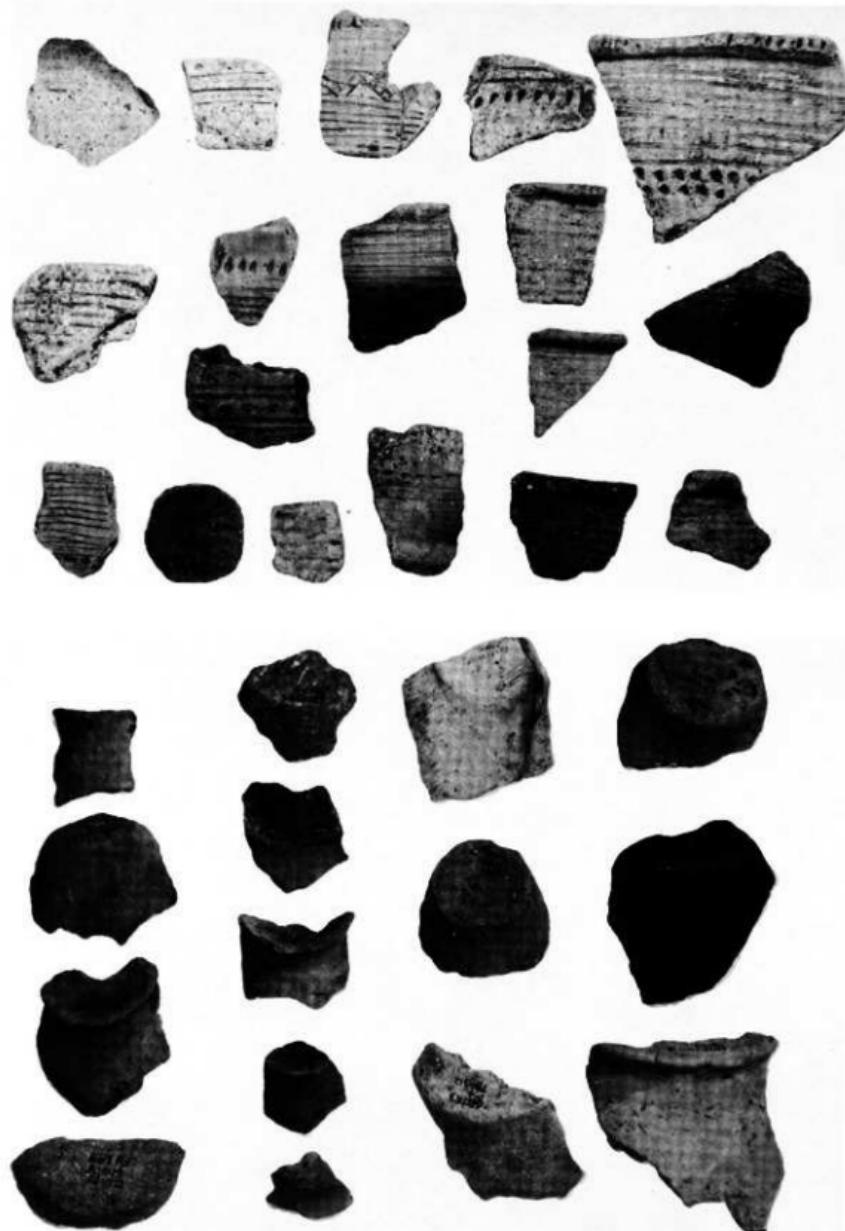
2



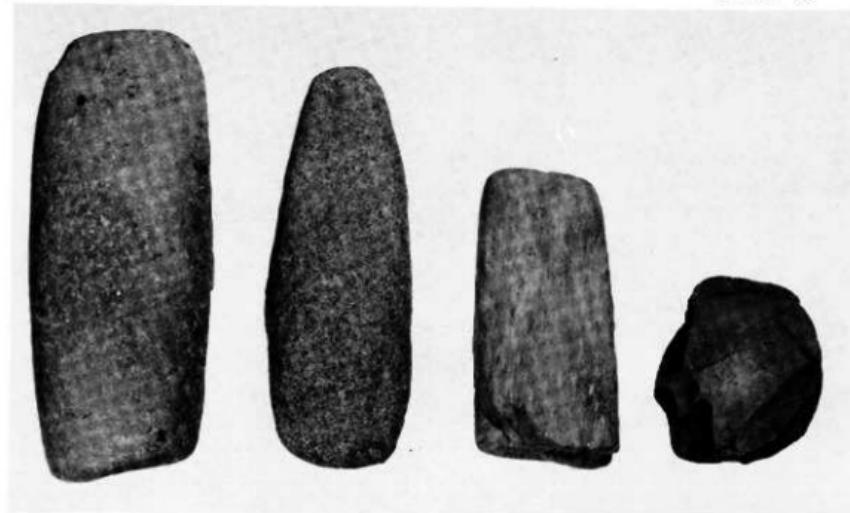
6



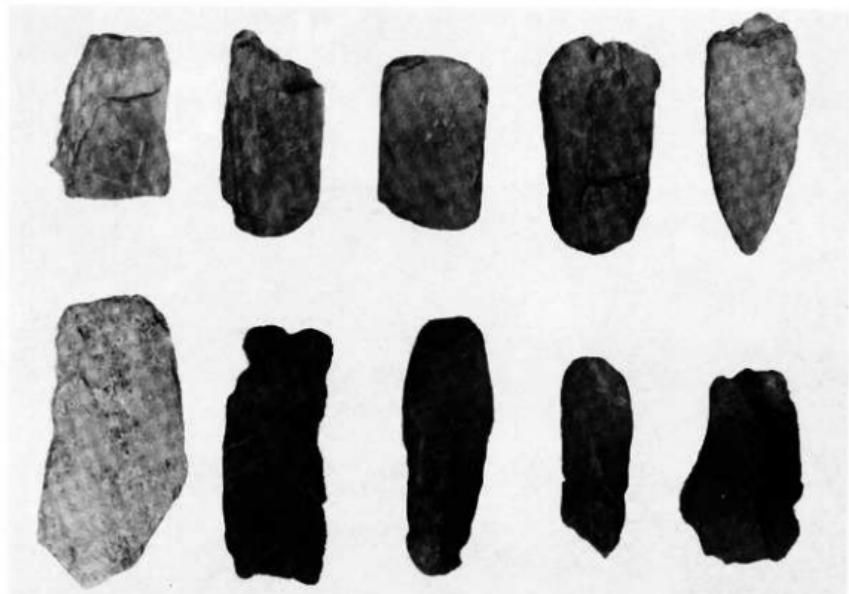
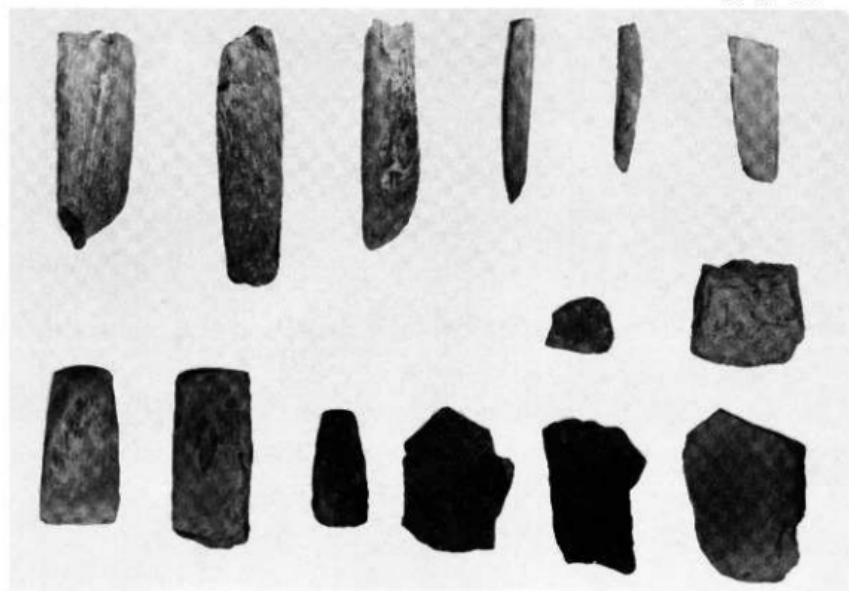
5

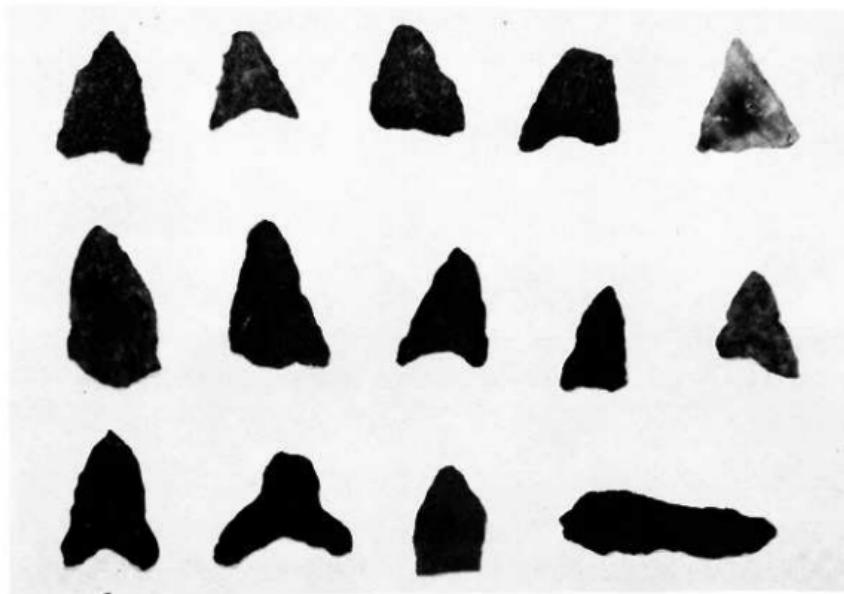
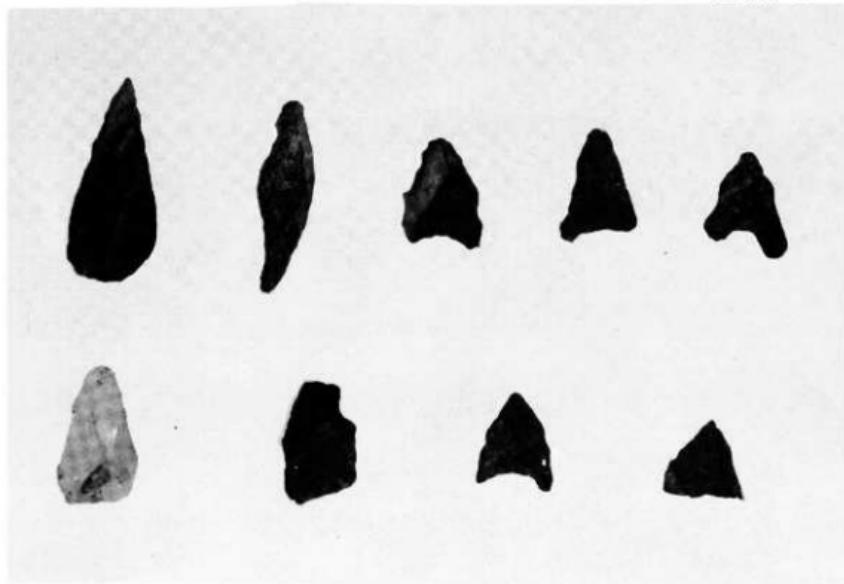


苏生式土器



石器類





石器類

松山市文化財調査報告書

1 三島神社古墳	昭和47年（絶版）
2 天山・桜谷古墳	昭和48年（〃）
3 長隆寺廃寺跡	昭和49年（〃）
4 古照遺跡	〃（〃）
5 釜ノ口遺跡	〃（〃）
6 かいなご・松ヶ谷古墳	昭和50年
7 国道バイパス概報	〃
8 岩子山古墳……（人物埴輪）	〃
9 御産所11号墳・勿那山古墳	昭和51年
10 占照遺跡II	〃
11 文京遺跡・弥生式土器縦年岡付	〃
12 来住廃寺跡	昭和54年
13 五郎兵衛古墳	〃

松山市文化財調査報告書 第12集

来住廃寺

昭和54年3月30日発行

編集 松山市教育委員会

発行 松山市教育委員会

〒790 松山市二番町四丁目七番地二

TEL (0899) 48-6520

印刷 有限会社青葉図書